今日のソ連邦

1978
18
9.15



特集 文豪トルストイ生誕一五〇周年

ベロルシアの新しい農村

ソ連柔道期待の新人

今日のソ連邦

第18号　1978年９月15日号

本誌の材料はノーボスチ通信社の提供によるものです。

本誌を入手するには

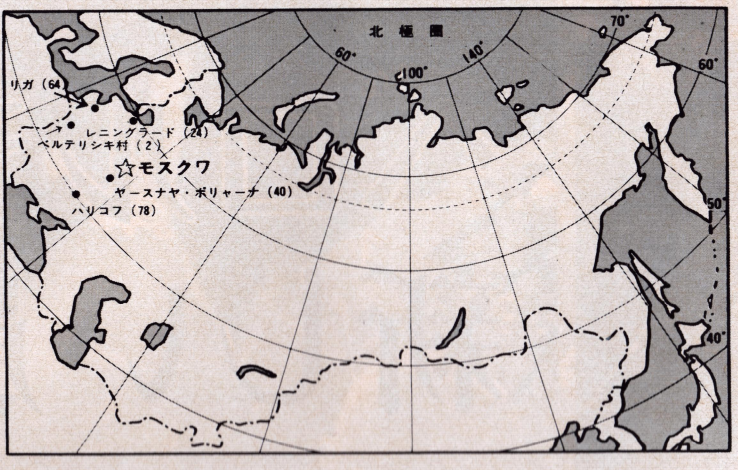
下記送料を添えて広報部にお申込み下さい（誌代無料）。（送金には振替または切手を御利用下さい）

半年分送料……………………1200円

１年分送料……………………2100円

同時一括送りの部数が多くなれば、送料も割安になりますから、広報部にお問合わせ下さい。

★数字は関連記事のページ



ベロルシアの新しい農村……2

（イデオロギー問題）文化の振興と社会主義国家（クハルスキー文化次官に聞く）……12

（ソ日経済協力シリーズ⑭）比重増す機械設備貿易……14

モスクワ・オリンピックのポスターを募集……15

（科学技術）レーザー光線で飛行機の着陸を誘導……16

モスクワのジャズ・フェスティバル……18

（国内問題）ロシア連邦共和国の新森林法（M・エフィーモフ）……22

レニングラードを訪れた大阪市の代表団……24

（本だな）民族学者ニコライ・ネフスキーの著書『宮古島の民俗』……25

ダンスを通じて情操教育……26

（問題点を探る）なぜ医者の権威は低下しているか？（M・フロムチェンコ）……32

特集　文豪トルストイ生誕一五〇周年

永遠の同時代人トルストイ（L・レオーノフ）……34

『神父セルギー』の新しい映画化……37

レーニンのトルストイ論から……38

トルストイの墳墓の地　ヤースナヤ・ポリャーナ（O・ブルガーコワ＝ポノマリョワ）……40

世界の作家、トルストイを語る……50

ソ連におけるトルストイの著作……51

トルストイと徳富蘆花（A・シフマン）……52

日本におけるトルストイ（木村　毅氏に聞く）……56

トルストイと私（本多秋五氏は語る）……57

日本で上映されたトルストイ原作映画……58

日ソ協会のトルストイ生誕記念行事……59

トルストイの作品と岩波書店……59

（ソ連の視点）何よりも大事な新型大量殺りく兵器禁止問題（Y・ジューコフ）……60

（読者の質問に答える）身体障害者の生活と就業……62

（オリンピック・ニュース）オリンピックに備える鉄道……63

（スポーツ）ソ連柔道期待の新人ヤツケービチ……64

人工水晶体のフョードロフ教授に感謝の手紙……68

季刊誌『オリンピアード・モスクワ80』創刊号……69

太平洋サケ・マスの人工養殖（G・ピサレフスキー）……70

モスクワの動物腫瘍病院……71

ロシア語のページ……74

（子どものページ）アリの冒険（V・ビアンキ）……75

〝おとぎの宮殿〟――ハリコフ人形劇場……78

（トピックス）ショスタコービチの全集刊行（13）／モスクワ＝カムチャツカ空の直行便（23）／クマの親善使節（61）

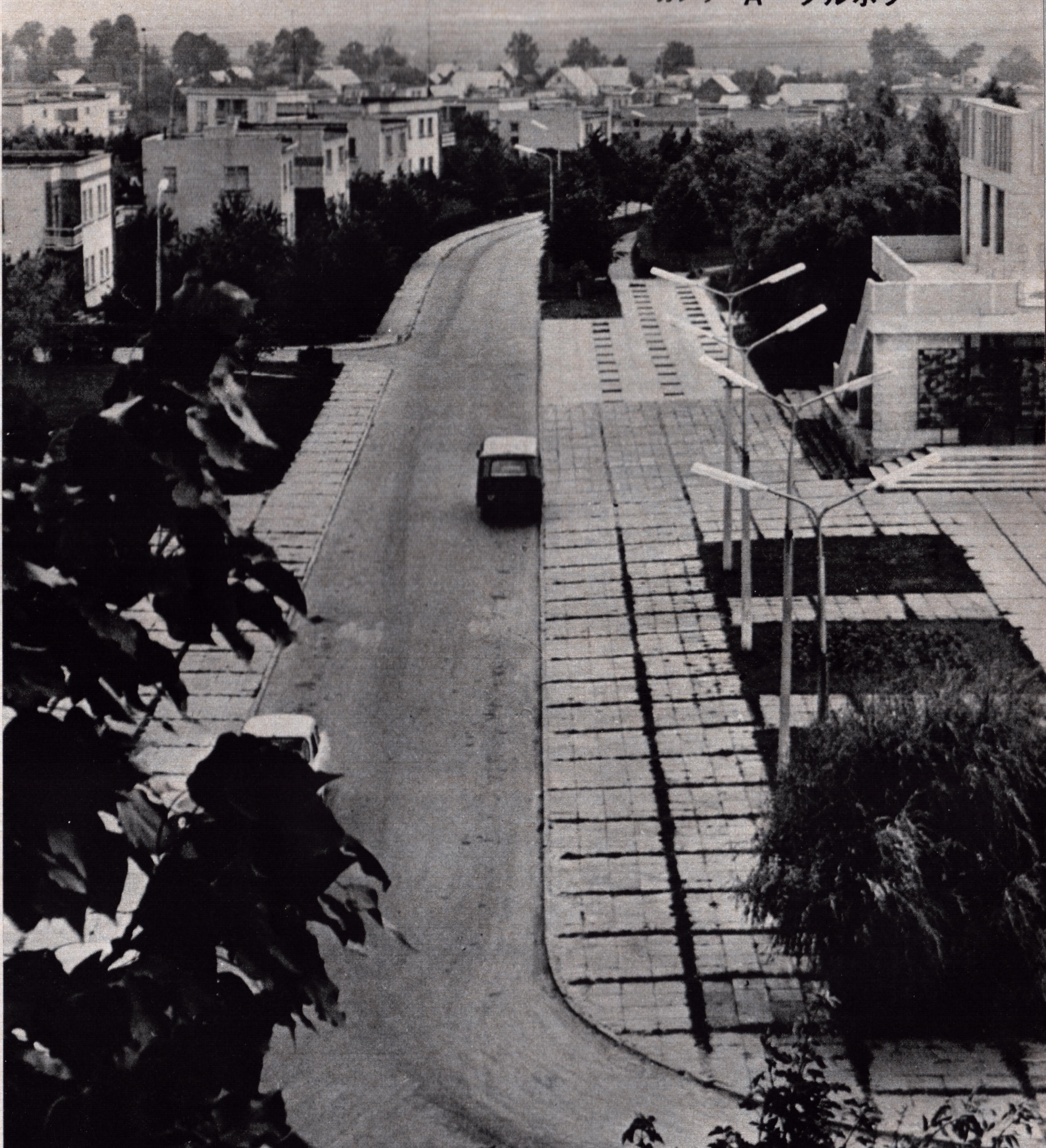
表紙　レフ・トルストイ

ソビエト社会主義共和国連邦大使館
東京都港区麻布台２―１―１　電話(583)4224
（本誌についてのお問合せは広報部へ）

広報部　東京都品川区東五反田３―９―13
郵便番号141　電話(03)447―3536(代表)
振替口座東京９―122358（加入者名＝ソ連大使館広報部）

ベロルシアの新しい農村

カメラ　**A・フルポフ**



ベルテリシキ村のたたずまいは郊外都市そっくり。ここには普通の生活をするのに必要なものは何でもそろっている。将来の人口は2000人。

ベルテリシキ村は、ポーランドと国境を接するベロルシア共和国最西端のグロドノ州にある。

村にコルホーズがつくられたのは一九四〇年。コルホーズの創設にともなって、村の農民の生活は大きく変わるきざしを見せたが、その変革の第1段階も、やがてドイツ・ファシスト軍の侵入によって中断した。ベルテリシキ村はベロルシアの何千という村と同じく、ファシスト軍の手で地上から抹殺された。

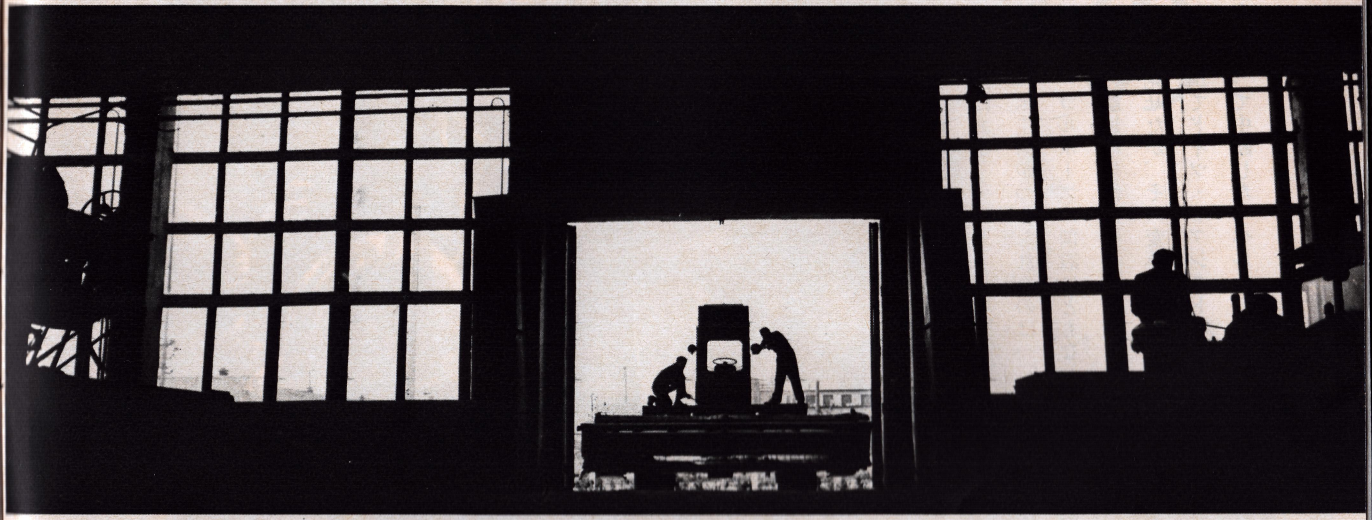
文字通り何もない所にコルホーズが再建されたのは、終戦後5年もたった一九五〇年のことで、当時一番必要だったのは、とりあえず雨露をしのぐ住居であった。ファシスト軍の侵入により何百万というソビエト人が住居を失



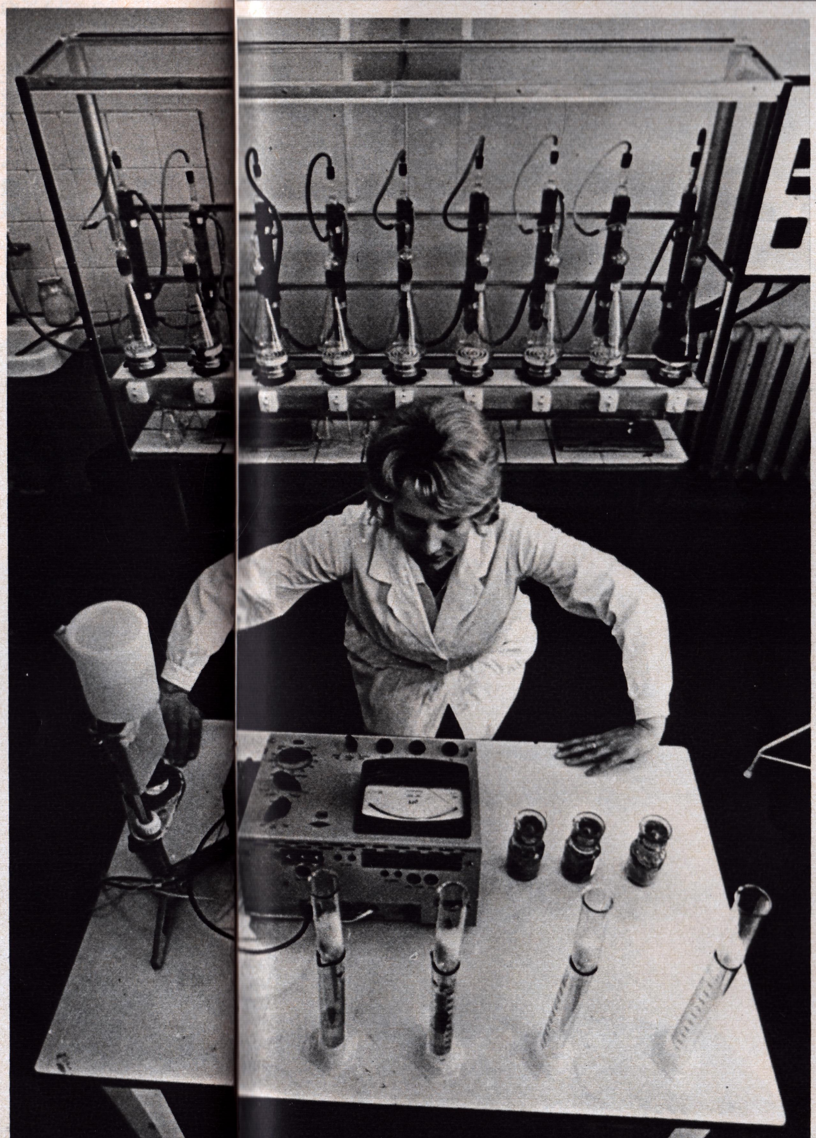
村の中央広場の噴水



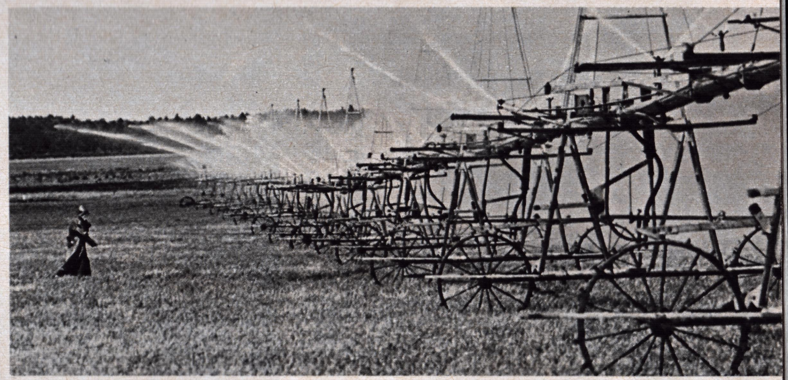
▶
あそこには3階建てのアパート……村の建設にたずさわる人々には将来の村の姿が手にとるように浮かぶ。



圃場に出るまえの機械の点検



飼料分析実験室のマリーナ・プロホロワ室長



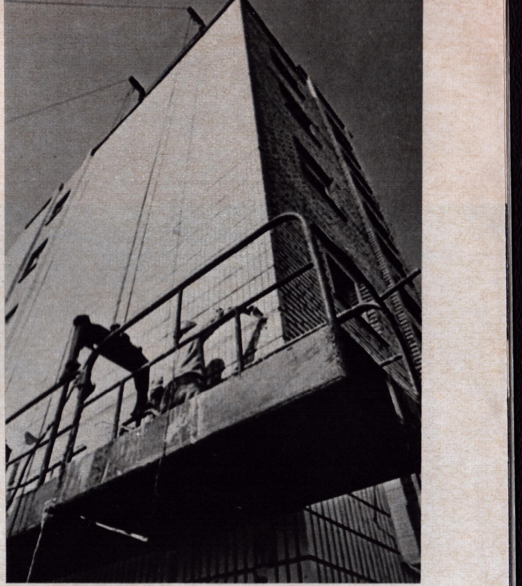
コルホーズの牧場で活躍する散水機



干し草の調達。野良仕事は100%機械化されている。



穀物の収穫



10フラットのアパート。若い人はこんなアパートが大好きだ……

っていたのだ。村は廃墟から立ち上がり、一応建設されたが、当時のこのコルホーズの動力、農具といえば、馬36頭、スキ27きりだった。

村の変革の第3段階は、ベルテリシキ村のプログレス・コルホーズの長期発展計画がたてられた一九六七年から始まった。

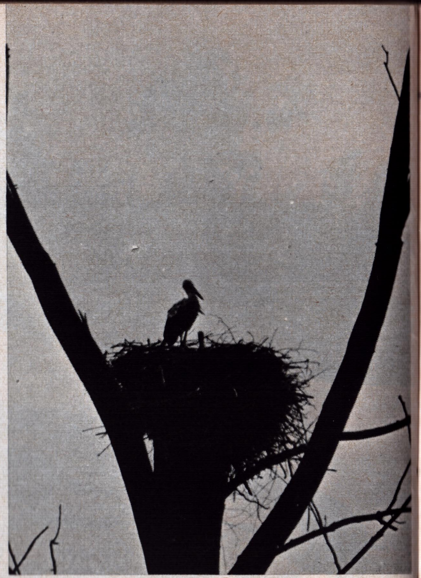
発達した社会主義の社会の課題は、都市と農村との大きな格差を解消することだが、それには大規模な行動計画が必要であり、その計画を実現するには国とコルホーズの経済力を高める必要があった。行動計画は農業労働を一種の工業労働に変えるとともに、都市の生活条件に劣らぬ生活条件を農村につくることを予定している。それには、農村生活の特殊性を考慮して設計され、あらゆる設備をそなえた住宅を農村居住者に提供し、部落に文化、日常生活、商業、医療面のサービス施設をつくることがさし当たって必要である。

農村の生活様式を一変するには、まず第1に、ソ連西部地区の昔からばらばらに分散してきた農村部落を再編成する必要がある。コルホーズやソフホーズの本部から遠く離れている零細部落を整備するのはとてもむずかしい。

プログレス・コルホーズのあるグロドノ州の一部の経営は50近い部落をかかえているが、これらの部落の電化、上下水道、ガス工事を完了するには、多大の資金と労力がいる。道が悪い時は救急車も各部落に行けない。子供は学校に行きつくとぐったりするし、両親も大きな部落のようなサービスに事実上ありつけず、不便をかこっている。

そのうえ村が方々に分散しているので、畑は使い古しの毛布のようになる。耕地面積が少ないので、灌漑工事は思うにまかせぬし、性能のよい機械も有効に使えないからだ。

このように、社会的要求と経済的必要が一つにからみ合っており、こうした問題に直面したすべての共和国では、それらを一つにまとめて検討している。たとえばベロルシア共和国には三万以上の零細農村があるが、それらを整理統合して五五〇〇の大農村にすることになっている。こうした整備には膨大な支出が必要であり、コルホーズは自己資金をそれに当てるとともに、国立銀行の長期貸付金を利用している。しかしこうした整備が農村住民にも、経営の経済にも、メリットをもたらすことは疑いない。



ベロルシアの農村風景につきもののコウノトリの巣

こうした大規模な課題をいっきょに解決するのは無理だが、ソ連は農村部落の改造と新村建設の経験をこれまでにかなり積んできており、民族的伝統と過去の進歩的遺産を生かした快適な農村を現代的な建設方法でつくる経験は十分にある。

プログレス・コルホーズの中央広場を設計したのは、ベロルシアの建築家たちである。ベルテリシキ村の姿形づくりにかなり大きな役割を果たしたのは、コルホーズの理事会と社会団体の共同歩調と権威ある行動である。理事会と社会団体は設計者の意見に耳を傾け、設計者の考えに注意深く従った。フョードル・センコ（現ベロルシア共和国農業第一次官）元コルホーズ議長は、村づくりを通じてまるで自分がプロの建築家になったかのようだったといっている。もちろん誇張だが、コルホーズ員全部が村の運命に関心をもったといっても誇張ではないだろう。専門家たちはベルテリシキ村のマスタープランをつくるに当たってコルホーズ員にアンケート用紙をくばり、農民の住宅はどうあるべきか、補助建物や倉庫はどこに置いたらよいか、村の住宅付属地はどうあるべきか、どのような建物を主体にするか、平屋か、都市風に数階建てか――コルホーズ員の回答は新ベルテリシキ村の建設に大いに役立った。

現在ソ連の農村では八九七の標準住宅設計図をもとに住宅が建てられてい



牧場の向こうには新しい住宅群がひろがっている。



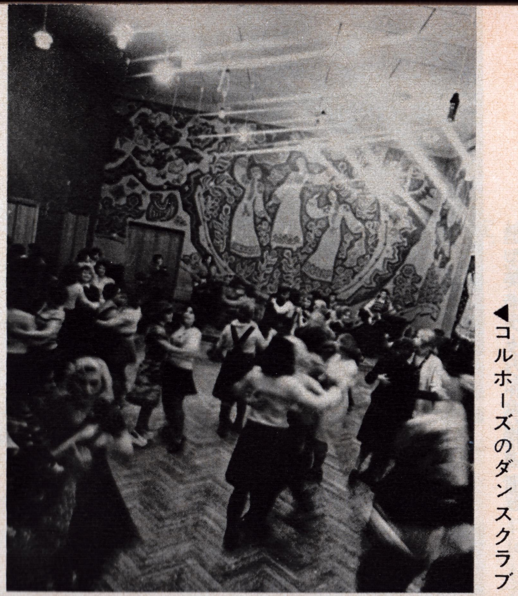


コルホーズの専門家ビクトル・クレムコさん一家はコッテージの２階の部屋に住んでいる。ベランダは一家の憩いの場。

暑い夏の日の昼下がり……

▼コルホーズのアマチュア芸能サークル員

◀コルホーズのダンスクラブ



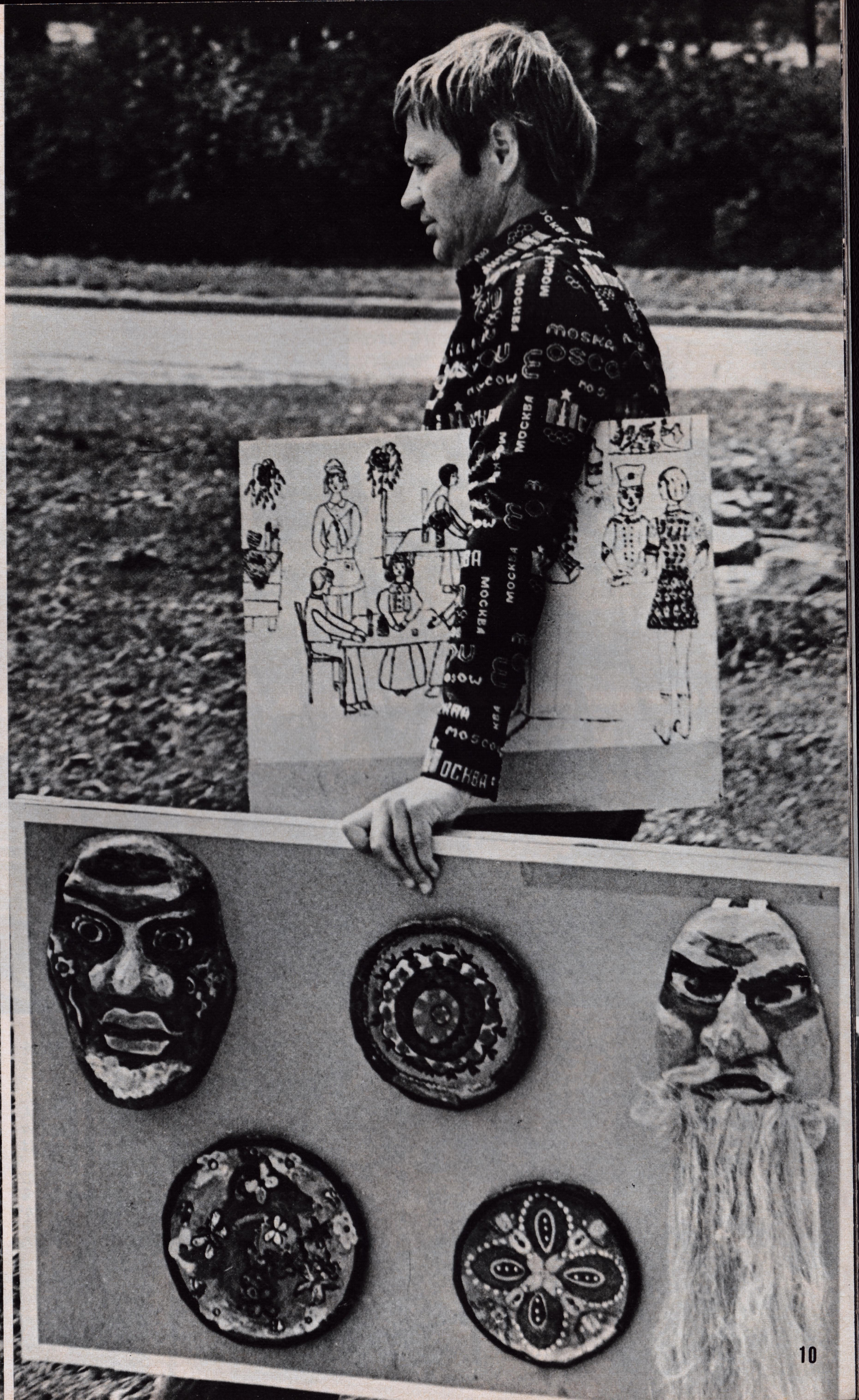


るが、そのうちのいくつかはベルテリシキ村でも見ることができる。プログレス・コルホーズのアレクサンドル・ドゥブコ議長（ベロルシア共和国最高会議代議員）は、設備の整った農村とは、毎日の日常生活を変えるだけでなく、労働条件も変え、人々の気持ちを変えるものだと見ている。そうなれば、どの専門家も進んで農村に行くようになり、そこでは日常の暮らしも楽しければ、働くのも楽しくなる。

ベルテリシキ村の経験が示しているとおり、コルホーズ員の年齢層の違いによって、家の好みも違っている。たとえば若い人は数階建てのアパートのフラットを選んでいるが、もう少し年をとった人々は、設備がそろい、広い納屋と地下室が付いている１戸建てのコッテージを選んでいる。

コルホーズ員自身が言っているとおり、ベルテリシキ村には普通の生活に必要なものは何でもそろっている。幼稚園、中学校、診療所、商業センター、日常生活サービス・コンビナート、スナック、ホテル、文化会館、室内プール、子ども用屋外プール、フィンランド・サウナなど……将来この村の人口は二〇〇〇人にふくれる予定。だから公共施設や上下水道、ガスなどの設備はそれを見込んで建設されている。

住宅、生産地帯を含めてプログレス・コルホーズの敷地の住宅、施設の最終工費は一二〇〇万ルーブルの予定。このコルホーズの一九七七年度の純収入は三一〇万ルーブルで、その半分が生産施設、文化・生活施設や住宅の建設に投入されていることを考えれば、コルホーズがこの工費をまかない切れることは確実だ。



造型美術スタジオの指導者ユーリー・エリョーマ



村の一隅にある古い白カバづくりの家は、コルホーズ博物館の一部となる予定。



村の近くの川辺はコルホーズ員たちのレクリエーションの場所

文化の振興と社会主義国家

クハルスキー文化次官に聞く

ワシリー・クハルスキー・ソ連文化次官にノーボスチ通信記者がインタビューした。

文化、芸術発展と計画化

記者 周知の通り、ソ連の社会的、経済的発展は科学的に計画されている。では、文化、芸術の分野に計画というものはあるか?

次官 一見して、精神的文化と計画とはとても両立しえない概念のように思われる。もちろん創造過程を〃計画する〃ことは不可能だ。あれこれの重大な問題やテーマ、ジャンル、比ゆ的表現方法にたいする芸術家の忠実度とか、あげくのはては、作者自身でも時にはどうしようもない作者の芸術的空想とかをかりに規制するとしたら、それはまったく不自然だろう。ついでに言うと、芸術家の創造の自由についてはソ連憲法に定められている。

しかし文化面にも計画は存在する。ではいったい何が計画されるか? なによりもまず、物質的基盤の発展、すなわち劇場、フィルハーモニー、芸術アンサンブルなどをふやすことである。それらの建設、開設、組織、それらのための新しいアーチストの養成は、国民の精神的要求の高まりや新しい都市、工業中心地の出現、古い都市のダイナミックな発展と密接な関係がある。

たとえば、現在ソ連には音楽劇場かフィルハーモニーのないような大都市は事実上ない。

巨大な経済改革が進められている東西シベリア、極東の人々、たとえばバイカル・アムール鉄道の建設者たちが十分芸術を楽しめるようにするために、国家機関は予めここに文化施設の建設を計画している。

記者 ソ連文化省は数多くの音楽施設を管理しているが、音楽施設はこれで十分だと思うか?

次官 ソ連では音楽は非常に人気があり、〃音楽地理〃の規模は膨大だ。若干具体的な数字を挙げておこう。

ソ連には47のオペラ劇場、30のミュージカル・コメディー劇場。45の交響楽団、70の室内楽団、26の民族楽器オーケストラ、46の合唱団、65の歌舞アンサンブル、約五〇〇の各種軽演劇集団があって、一三五のフィルハーモニーと一六二のコンサート組織に統合されている。以上は国営のプロ集団だが、それらとならんで、時にはプロと比べても見劣りしない多くのアマチュア劇団や芸能アンサンブルも活躍している。一九七五年には文化省と労働組合の系統のクラブ施設だけで、三万八〇〇〇の合唱団、七万四〇〇〇の音楽集団、七万一〇〇〇の舞踊団をふくむ五八万五〇〇〇のアマチュア芸能集団があった。

われわれの目的、われわれの〃超課題〃は、祖国の文化と世界の文化のすべての富を、すべての国民の手のとどくものにすることだ。

ソ連には一〇〇以上の大小民族が住んでいる。多くの少数民族は革命前、ソビエト政権前に、プロの音楽、演劇、美術を持たなかったし、自民族の文字さえ持たなかったが、それにもかかわらず数世紀にわたって彼らは貴重な精神財を蓄えた。彼らの民族的創造——詩、音楽、美術——はすぐれていて、比類のないものである。われわれはそれを大切に保存し、各民族の特徴や伝統を考慮に入れ、これらの若い文化が実り多く発展するのを極力助けており、また彼らが短期的に高い水準に達したことを喜んで指摘している。数十の少数民族が住んでいる山地のダゲスタン(カフカズの自治共和国)の作曲学校のごときは、外国でも評判のよいいくつかの第一級の音楽作品をつくった。

盛んな歌劇とバレエ

記者 西側では資金不足のためオペラ、バレエ団がしばしば破産し、解散しているが、ソ連ではどうか?

次官 有名なソ連のバレエはもちろん、オペラも、いま真のルネサンス期を迎えているといえよう。それには幾つかの理由があるが、まず第一は、音楽愛好家、とくにうれしいことだが、青年のオペラ、バレエ熱がどんどん高まっていること。第二の理由は、ソ連の作曲家がこのジャンルに伝統的な愛を寄せていることである。ロシアの古典作曲家は世界的に有名なオペラとバレエをつくったが、ソビエト時代になってからもすぐれたクラシック音楽が生まれた。たとえばセルゲイ・プロコフィエフ、ドミトリー・ショスタコービチ、グルジア人のザハリ・パリアシビリ、アルメニア人のアレクサンドル・スペンジアロフのオペラがそうだ。ソ連ではオペラのジャンルは例外なくすべての共和国で盛んである。毎年劇場のポスターで、テーマと様式の多様性、新しい形式の大胆な探求を特色とするソビエト作曲家のほぼ一五〇のオペラの題名を見ることができる。

当然、オペラ、バレエ団の数も増えている。音楽劇場の経営は非常に高くつく。上演の費用は沢山かかるが、わが国では音楽劇場の破産などは問題になりえない。劇場は黒字どころか、逆に国から補助金をもらっている。補助金はたっぷりあるので、成功裏に創造活動をし、各シーズンにいくつかの初演を行い、作曲家に新しい作品を注文することができる。ソビエト国家の文化政策は商業目的を追求せず、国民のたえず高まる精神的要求の最も完全な充足を目的としている。

対外文化交流も活発

記者 ソビエト芸術への外国の関心は非常に高い。あなたは外国との文化交流の現状をどのように評価するか?

次官 われわれは現在一二二カ国と文化交流を進めている。この数字自体、多くのことを証明していると思う。資本主義諸国——米国、カナダ、オーストラリア、西欧の多くの国をふくむたくさんの国々とのわれわれの文化交流は、政府間協定にもとづいて発展している。ソビエト芸術にたいする関心は実際高い。事実上すべての大規模な芸術集団、有名な歌手、演奏家(ソ連のすべての民族共和国の出身者)が文化交流に参加している。彼らの外国公演はいつも評判がよい。それは本誌の読者もご存じのとおりだ。

記者 西側の一部のマスコミは、外国の芸術家がソ連で公演する場合、ソ連旅行やレパートリーの面で厳しい制限を設けていると言っているが、実際にそのような制限はあるのか?

次官 昨年世界から一四〇のさまざまなアンサンブルをふくむ約一万人のアーチストがソ連を訪れた。44の美術展が開かれた。わが国を訪問する芸術家は、毎年すべての連邦構成共和国の一七〇—一八〇の諸都市で公演している。彼らの公演はソ連のテレビ、ラジオで定期的に放送される。われわれはできるだけ良い条件を外国人アーチストに与えようと努めている。彼らの評価、新聞雑誌等での多数のインタビューから判断すると、彼らは観客と当局の親切、配慮に満足している。レパートリーについて言えば、われわれは客演の国際的慣例を守っている。年間一〇〇人以上の外国の興行主、芸能プロダクションの代表者がソ連を訪れている。彼らはソ連の芸術集団やソリストのプログラムを検討し、彼らの興味を引くものを自由に選択している。われわれもこの原則を守っている。われわれの目的は、ゲストの公演の最大の成功を保障し、ソ連の観衆に他の諸国民が誇りにしている文化を紹介することであり、それは最良の相互理解と友好の発展に役立つ。

しかし目の肥えたソ連の観客は、がらくたは受け入れないし、きびしく、要求が高く、趣味がよい。だから内容のないプログラムや非芸術的な代用品はソ連の観客から受けない。このような公演はみじめな経験をなめている…

…

トピックス*

ショスタコービチの全集刊行

現代の大作曲家ドミトリー・ショスタコービチが世を去ってから早くも3年過ぎたが、現在、ムージカ(音楽)出版所は全42巻のショスタコービチ全集の編さんに着手しており、秋には最初の数巻が刊行される。7年がかりで企画されているこの全集で中心的地位を占めるのは、なんといっても15の交響曲。そのほかに6つの器楽協奏曲(作曲家自身によるピアノ編曲も含めて)、オペラ『鼻』と『カテリーナ・イズマイロワ』、オペレッタ『モスクワ、チェリョームシキ』、バレエ『黄色の世紀』、『明るい流れ』、それに作品番号一番のスケルツォから『ノボロシースクの音楽時計』にいたるすべてのオーケストラ作品、オラトリオ『森の歌』、カンタータ『わが祖国の上に太陽は輝く』、交響詩曲『ステパン・ラージンの処刑』、合唱曲集、四重奏曲、ピアノ曲、歌曲などが収録されるほか、芝居や映画の音楽にも3巻がさかれる。

比重増す機械設備貿易

今回はソ日間の機械設備貿易について、M・V・クルイロフ駐日ソ連通商代表部員にインタビューした。



M・V・クルイロフ駐日ソ連通商代表部員

発達した工業国同士で

ソ日間の機械設備貿易について、その傾向など。

現在、ソ連と日本は高度に発達した機械工業部門を持ち、さまざまな機械設備を大量に生産しています。

毎年、次々に新しいタイプの機械、器具、設備が開発され、生産されています。機械設備はソ日貿易において、ますます大きな役割を果たしています。

一九七〇—七一年のソ日貿易総額における機械設備の割合は16—17%だったが、一九七七年のそれは、両国間の貿易が目ざましく拡大して、貿易総額が現在30億ドルを超えているにもかかわらず、40%にも増大しました。

第9次および第10次の5ヵ年計画期中に、ソ連の対外貿易機関は日本への機械設備の輸出を一貫して増大させてきました。

ソ連の対外貿易機関は一九七一年に日本から総額一億五〇〇〇万ドルの機械設備を購入しましたが、一九七八年には、その額は6倍以上にふえ、一〇億ドルを超えました。

この8年間にソ連の対外貿易機関は総額三〇億ドル以上の機械設備を日本から購入したことになります。

この間にもっとも多額の機械設備を日本から購入したソ連の対外貿易機関は「テフマシインポルト」（全ソ技術機械輸入公団——化学工業用機械設備）、「マシノインポルト」（全ソ機械輸入公団——ガス・石油工業用機械設備）、「アフトプロムインポルト」（全ソ自動車工業輸入公団——自動車工業用機械設備）、「スタンコインポルト」（全ソ工作機械輸入公団——工作機械その他の工業部門用機械設備）です。

この間、日本からは化学肥料、化学繊維、エチレン、ベンゼン、エアコン、合成ゴム、アルミ構造材その他を生産するための工場の機械設備が供給されました。これらの工場用の機械設備は、生産技術ライセンスといっしょに供給されました。他方、ソ連の対外貿易機関は一九七一—七七年に、総額約七〇〇〇万ドルのさまざまな機械設備を日本へ輸出しました。

まだまだ大きい発展の余地

ソ連から日本へ輸出される機械設備にはどんなものがありますか？

日本の商社はソ連でさまざまな工作機械、船舶用設備、溶接機械、エネルギー産業設備、航空機、製鉄所や自動車工場用の設備などを買い付けています。それらの中には、たとえば高炉の廃ガスを利用するガスタービン、熱いうちに鉄を切断するためのノコギリ、鋳物部品の電気精錬装置、高精度鋼管圧延装置その他、ユニークな機械設備があります。高度に発達したソ連経済は、日本の商社が導入に関心を持っている機械設備やライセンスの輸出を可能にしています。とはいえ統計によれば、可能性が増大しているにもかかわらず、日本商社のソ連での機械設備の購入額は長期にわたって年間七〇〇〇万—一〇〇〇万ドルを超えず、事実上いつも同じ水準にあることが分かります。

最近の2年間に、ソ連で生産されている新しい機械のモデルチェンジが完了しました。たとえばヘリコプタ〝KA26〟、トラクタ〝MTS82〟、オートバイ〝ドニエプル10〟などがそれです。このモデルチェンジの過程で、これらの機械の高い技術指標が確認され、日本の専門家にも高く評価されました。

この10年間のソ日貿易には、長期にわたって、安定したペースで機械設備を供給した例がたくさんあります。たとえば「テフマシインポルト」は長期にわたって日本の商社から、かなりの額の化学工業用設備を購入しています。また「マシノインポルト」は建設用のクレーンや土木機械、アタッチメントを、「エレクトロンオルグテフニカ」（全ソ電算機輸出入公団）と「テフノプロムインポルト」（全ソ工業技術輸入公団）は電算機を、「スタンコインポルト」は工作機械を等々、それぞれ恒常的に日本から購入しています。

ソ連からは、高精度鋼管圧延装置、ガスタービン、工作機械などが日本へ長期的に供給されています。

ソ連は一度ならず、両国の経済発展の展望を見込んだ、長期的な基盤にもとづく貿易経済関係を日本とのあいだに打ち立てたいと強調してきました。

なぜなら、そうすることによって、確実性と安定性が得られるからです。

現在、ソ連と日本はすでに、シベリアおよびソ連極東の木材資源や石炭の開発における長期協力の、具体的な協定を結んで、それを実行しています。長期的な協力が、機械設備貿易をさらに発展させることは疑いありません。

モスクワ・オリンピックのポスターを募集

——「80年オリンピック・ポスター」国際コンクール要綱

ソ連でモスクワ五輪ポスターの国際コンクールが行われています。

主催は「プラカート」（ポスター）出版所、モスクワ・オリンピック組織委員会、ソ連スポーツ委員会、全ソ労働組合中央評議会、コムソモール中央委員会、国家出版・印刷・図書販売委員会、ソ連文化省、ソ連美術家同盟、ソ連ジャーナリスト同盟。

これらの機関、団体によって「80年オリンピック・ポスター」国際コンクール組織委員会がつくられました。

「80年オリンピック・ポスター」国際コンクールの目的は、恒久平和と安全、すべての国家間の完全な相互理解と信頼をめざす進歩勢力のたたかいを反映し、諸国民の平和と友好の一層の強化にたいするスポーツ交流の役割、オリンピックのスローガン「より速く、より高く、より強く」を明快に示し、人間の調和的発達の重要な手段としての体育とスポーツを表現し、「オリンピックはオリンピック選手たちだけのものではない」とスポーツ運動の大衆的な発展を呼びかけるような、ポスター美術の新しい作品の創造です。

この国際コンクールの参加には資格制限はなく、個人でも、ポスターを制作している団体でも参加できます。

入賞作品の決定のために国際審査委員会がつくられます。

出品作品は、印刷用として発表されたことのないポスターのオリジナル、または80年オリンピックをテーマにしてすでに発行されたポスターに限られます。

作品のサイズは60㎝×90㎝、または70㎝×108㎝に限定されます。厚紙に貼って送付のこと。

ポスターの裏面には6ケタの任意の数字を書いて下さい。作品に添えて封筒を入れ、この封筒にも同じ数字を書くこと。そして、この封筒に住所、氏名、生年月日、最終学歴を書いた紙を入れて封をして下さい。

締切日は一九七八年12月31日（当日消印有効）。

コンクールの規定に合わない作品は審査の対象外とし、作者に返却しません。

コンクールの結果は一九七九年3月までにソ連の新聞紙上に発表されます。

入賞作品はプラカート出版所が直接あるいは外国の会社を通して印刷し、ソ連内外に配布することもあります。

入賞作品のうち、印刷される作品の作者には、ソ連の著作権法にもとづいて版権料が支払われます。

コンクールの入賞者にはそれぞれ次の賞金が授与されます。

一等（3点）　二〇〇〇ルーブル
二等（6点）　一五〇〇ルーブル
三等（10点）　一〇〇〇ルーブル
佳作（20点）　五〇〇ルーブル

入賞者にはまた、賞状とメダルが授与されます。

なお、佳作入賞者は、賞金ではなく、希望により五〇〇ルーブルに相当する品物で受けとることができます。

モスクワ・オリンピックの期間中、80年オリンピック・ポスター展が開催されますが、この展覧会に展示されたポスターの作者には参加証と記念メダルが贈られます。

作品の送り先は次の通り——

USSR, MOSCOW, KRYMSKAYA NABEREJNAYA 10/14, VYSTAVOCHNY ZAL SKH SSSR

科学技術

レーザー光線で飛行機の着陸を誘導

アレクサンドル・チューバ

飛行機の泣きどころ

首都のブイコボ空港で、われわれは長い間離陸の許可を与えられなかった。モスクワ上空は雷雨が荒れ狂っていたからである。

「われわれが着陸する先方も悪天候だったら？ テストは取りやめですか？」と私はたずねた。

「反対です。その時こそわれわれの〝グリッサダ〟の能力を披露することができるでしょう」と航空機レーザー着陸システムの設計主任イーゴリ・ベレジノイ教授は答えた。

「ところで、定期旅客機の乗客はモスクワの空が晴れ上がっても、しばらく地上で待機していなければなりません。行き先の空港が気象条件によって閉鎖されているからです」

「行き先の空港が気象条件によって閉鎖されているので……」という空港ではありふれたアナウンスを聞いて、乗客はしばしば、時間を節約できる空の旅の誘惑に負けたことを後悔し、これからは、のろくても正確な鉄道のサービスを利用しようと心に誓う。

実際、民間航空は〝スピード〟を売りものにしてきた。すぐあとで〝快適さ〟をそれに付け加えたが、このモットーにもう一つの言葉――〝全天候〟をどうしても付け加えることができない。現代的な設備や、乗員がマスターした盲目飛行方法にもかかわらず、天候は今日に至るも空のダイヤに定期的に干渉している。

どんな長時間にわたる飛行でも、離着陸にかかるのはわずか11分。しかしこのわずかな時間にパイロットは最高の精神的緊張を経験し、頭の中で膨大な情報量を処理しなければならない。この危険な時間は二つの部分に、すなわち3分間の離陸と8分間の着陸とに分けられる。着陸は最も複雑な飛行部分である。事故の大部分がこの着陸時に起こるのはそれなりのわけがある。

航空機は、遠距離・近距離航法装置、無線・光学手段によって着陸する飛行場に確実に誘導される。しかし、最終段階ではパイロットは必ず地上を見つめ、滑走路までの距離を決め、進入経路やその他のパラメータを選ばなければならない。パイロットは最も複雑な、多くの成分からなる状況を自分で評価し、自分の経験とカンに完全に頼るが、正確に滑走路に降りるには必ずしもそれだけでは十分ではない。とくに悪天候には、ためらわずに、複雑な計算をすることなく、正確に指定地に到着することのできる、安心して頼れる手がかりが必要だ。

そのような道しるべとして登場したのがレーザーである。レーザーは誕生以来の短期間に、多くの分野で利用されるようになった。そしていま、レーザー光線はもう一つの分野でも利用されようとしているのである。

原理も装置も簡単

われわれはモスクワをたそがれ時に出発した。われわれのAN24機が目標付近にやって来た時には、とっぷり日が暮れていた。私は操縦室に呼ばれた。「まもなく〝グリッサダ〟の光が現れます」

私の考えでは、夜間や困難な気象条件下での安全な着陸を保証するシステムは、とてつもなく複雑でなければならなかった。操縦室を埋めた想像を絶するほどのたくさんの計器類の間に、私は〝グリッサダ〟に関係ありそうなものを探し出そうと試みたが、何も発見できなかった。

ベレジノイ教授は語る。「〝グリッサダ〟システムの助けを借りて着陸するためには、機内に追加の設備を必要としません。その光線は標準装備のあらゆる飛行機を滑走路へ誘導することができます。それどころか、このシステムは新しい機内計器類の追加を必要としないだけでなく、多くの従来の計器類の管理からパイロットをある程度解放します。

さらに、このシステムを設置し使用する費用は、自動着陸装置や飛行場の灯光設備の費用の数分の一ですみます」

飛行コースのはるか前方、たくさんの照明から都市と推定される辺の夜空に、ルビー色のひげが生えた。それは驚くべき光景だった。私はたびたび実験室を訪れるが、そこでは、レーザー光線は恐ろしい、危険をはらんだ、しゃく熱した糸のように見える。空中では、それが愛想よくきらめき、われわれを自分の方に招いていた。機は信頼してその方に向かって飛んだ。

ベレジノイ教授は語る。「われわれのシステムの基礎をなしているのは、旅人や航海者が木や岩や星を目じるしに進路を保つ、あのもっとも古くからある方法です。

われわれの場合、このような目じるしとなるのがレーザー光線です。〝グリッサダ〟は、飛行場に一定の規則に従って配置されたレーザー装置の総体です。原則的には、一本の光線でも飛行機を滑走路に誘導することができます。一定の角度で空に向かった光線は、乗員に正確な進路、必要な降下角、進入経路を指示します。

しかし着陸時には、パイロットは他の情報、たとえば無線誘導局の上空を通過する瞬間についての情報をも持つ必要があります。最初の無線誘導局の両側に配置された二つの他の装置がこの課題を解決します。それらのルビー光線が空中で中央光線と交差して、手前の無線誘導局の所在地を示します。さらに二本の光線が後方の無線誘導局の上空で交差します。航空機がそこからはみ出してはならない空気の廊下の〝壁〟――空中にはもう一対の光線が走っている――が見えたとしても、パイロットの邪魔にならないでしょう。最後に二本の光線が地上すれすれに伸び、滑走路の両側端を示します」

いよいよ着陸

機長が言う――「滑走路灯が見えるでしょう。すぐに通信士が指示を出します。滑走路灯を消すのです――特別にわれわれのために」

通信士が合図を送った――すると地平線の所で滑走路を赤と白で点々と縁取っていた長く伸びた長方形が一挙に消えた。ルビー光線は下の方でいっそう濃く、あざやかになった。私は設計主任のベレジノイ教授が簡略に描いてくれた光景をはっきりと見た。二本の光線が地上と平行して走り、他の二本は上方へ、われわれの機の右側と左側へ上がり、もう一本が中心部に伸びた。いまのところ無線誘導局を示すレーザー光線の交差だけがなかった。さらにそこまで飛んで行かなければならない。

ベレジノイ教授は語った。「〝グリッサダ〟の光線は空間でかなり簡単な図形を描きます。その図形は不変です。しかし航空機がコースからそれたり、進入角を乱すかまたは安全着陸に必要な他の条件に耐えないと、パイロットの目に見える図形は、その輪郭を変えます。だからパイロットは、その輪郭が、予め記憶している図形と同じに見えるよう見守っているだけでいいのです。これはむずかしいことではありません。パイロットが盲目着陸を習得するのに数十時間かかるとすれば、〝グリッサダ〟の助けを借りて旅客機を着陸させるためには熟練したパイロットなら数回の進入訓練でまったく十分です。光線のゆがみは航空機のずれを意味します――このシステムは所定の着陸パラメータの50cmの乱れさえチェックします」

突然、前方でさらに二本の光線が走り、一点で中央光線と交差した。われわれが交差の上空を通過すると、操縦室内でベルが鳴り、航空士が「手前の無線誘導局を通過。高度二〇〇、速度よし」と報告した。前方にはいま一つの交差が現れた。そこから滑走路までちょうど一〇〇〇mある。

ベレジノイ教授は語る。「〝グリッサダ〟で着陸するさい、パイロットは地上との無線連絡なしに航空機が必要な高度で無線誘導局の上空を通過したことを知ります。これは明らかに着陸時のパイロットの仕事を容易にします。しかし複雑な気象条件のもとでこそ、このシステムは最も威力を発揮します。レーザー光線は簡単に雨雲を貫くので、パイロットはレーザー光線のおかげで地上の目標を肉眼で約六倍も速く確認することができます。光線に〝自分を結びつけた〟航空機は極端に限られた視界のもとでさえ、無事滑走路に到達します」

レーザー光線がわれわれを誘導して来た大地が見える。航空機は滑走路にふんわりと降り、速度をゆるめて滑走路の上を走った。設計主任は地上で〝グリッサダ〟の操作をしている専門家たちと何かを打ち合わせた。AN24機はふたたび飛び立った。テストは続いている。

☆ ☆ ☆

ルポルタージュ

モスクワのジャズ・フェスティバル

アナトリー・トロイツキー
カメラ Y・ルニコフ

ソ連のポピュラー音楽、ジャズ、ロックなどについて取り上げてほしいという要望が藤沢市の佐藤雅也さん、宝塚市の田村美能留さん、静岡市のT・Kさんから寄せられていますが、本号ではモスクワの〝ジャズ・フェスティバル〟の模様をご紹介します。

6月2日から4日までモスクワの映画館〝ワルシャワ〟で恒例の「軽音楽・ジャズ夏のフェスティバル」が開かれ、ファンたちの大きな関心を集めた。もっとも、多くのファンにはこのフェスティバルはもっと前から始まっていたと言っていいだろう。フェスティバルの数日前、モスクワ近郊のプシチノ市で参加する音楽家たちのパレードがすでに行われていたからだ。

出場する各グループはフェスティバルの規定で、ソ連人作曲家のオリジナル曲と民謡のメロディーをアレンジしたものを少なくとも一曲ずつ演奏しなければならなかった。このことはフェスティバルの創造的なボルテージを高めた。普通、プログラムの中心になるジャズのクラシック作品に代わって、まぎれもないソビエト・ジャズの特徴を打ち出した独創的な作品を多数聴くことができた。

これまでのフェスティバルに比べて特に目立ったことしの特徴(いい面での)は、何よりもまず演奏家たちの技術水準が疑いもなく向上していたこと。フェスティバルに参加した29のアンサンブルのうち、5つのグループはここ数年間にプロになった楽団である。好



フェスティバルに先がけて、モスクワ近郊のプシチノ市で行われたジャズ・プレヤーたちのパレード。



満員の聴衆を前に熱演するピアノのデュエット



トランペットのビクトル・グセイノフ



◀グネシン音楽学校（モスクワ）のボーカル・グループ。歌うのはイリーナ・オチエワ。

きな音楽が本職になれば、演奏家たちは絶えず、明確な目標をもってジャズに打ち込めるようになる。その成果は確実にあがっている。フェスティバルではN・レビノフスキーのクインテット、ゲルマン・ルキヤノフの〝カデンス〟、アレクセイ・コズロフの〝アルセナル〟、イーゴリ・ブリリのオクテット（8重奏楽団）など、経験豊かなアンサンブルがもっともすばらしい印象を与えた。例によって、トランペットのレオニード・チジクが絶妙の技巧とセンスの演奏を聞かせた。ギターのデュエット、ニコライ・グロミンとアレクセイ・クズネツォフは世界一流のジャズ・プレヤーに数えていいだろう。

　このフェスティバルのもう一つの特徴は多数の若い音楽家、非常に若いといってもいいくらいの音楽家たちが参加したこと。ソビエト・ジャズのもっとも新しい世代に属するこれらの楽団の多くが現在すでに興味深い個性的な演奏をしているのはうれしいことだ。そういう楽団として多数の学生アンサンブル、モスクワのリハチョフ自動車工場文化宮殿のアンサンブルなどの名前をあげることができる。

　数年前、いくつかの音楽学校に軽音楽科が開設され、インプロビゼーション（即興演奏）のできる音楽家の本格的な養成が行われている。学生たちの指導には一流のプロ演奏家が当たっているが、これが若者たちの演奏水準向上に文句なく好影響を与えている。

　モスクワの「軽音楽・ジャズ夏のフェスティバル」は伝統により、有名な演奏家や若手たちによるジャム・セッション（即興演奏会）で幕を閉じた。

　夏のフェスティバルは終わった。しかし、ジャズのメロディーはまだ鳴り響いている…



ドラマー、ワレリー・カプルンの独奏

▶
アルトサックスのビタリー・シェマノフ

エレーナとナジェジダのカレントニコワ姉妹による2重唱

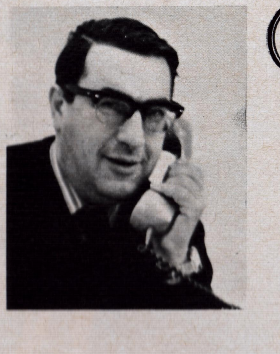




国内問題

ロシア連邦共和国の新森林法

『今日のソ連邦』評論員 ミハイル・エフィーモフ



8月8日、ロシア連邦共和国最高会議は、ロシア連邦共和国森林法を採択した。ざっとこのように、言い尽くしがたいほど大きな意義をもつ法律の可決を電文ふうに表現することができるが、ソ連の国家機構や〃実際〃をあまり御存じない読者のために、さし当たって二つのことだけ簡単に説明しておこう。

まず一つ。ロシア連邦ソビエト社会主義共和国、略してロシアは、合体した一つの完全なもの――ソ連、つまりソビエト社会主義共和国連邦を構成する15の平等な連邦構成共和国の一つである。ロシアの面積はソ連全土の76%強で、一七〇七万五四〇〇平方km、人口はソ連の人口の約52%の一億三六五三万二〇〇〇人である。

第二は、ほかのすべての共和国と同じく、ロシア連邦共和国は、自分の共和国にかかわりのある最も重要な国家、政治、経済面の問題を解決する権限をもっている。共和国は自分の憲法や自分の議会である最高会議、自分の政府――閣僚会議をもっている。

こういうわけで、ロシア連邦共和国の最高会議8月会期は、自分の共和国の森林法を採択したわけだが、この森林法が昨年7月ソ連の最高立法機関であるソ連最高会議で承認されたソ連森林基本法に立脚しているのは当然だ。

ロシア連邦共和国森林法は7章一三〇条からなり、その全文は新聞の約3ページ分を占めた。付言しておくと、ソ連では多くの市民の利益にかかわりのあるこのような重要文書は、かならず中央紙に全文掲載されることになっている。こんどの森林法の場合は、ソ連共産党中央委員会、ロシア連邦共和国の最高会議と閣僚会議の機関紙である『ソビエツカヤ・ロシア』（発行部数二七〇万部）に掲載された。

森林がソ連全土、ましてやロシアの生活で、どんな役割を果たしているかを、ここでくわしく説明するまでもなかろう。私が〃まして〃といったのは、ロシア連邦共和国の森林面積がソ連全体の森林面積の95%を占め、蓄積量もソ連全体の96%を占めているからだ。

森林のもつ大きな意義

森林は昔からロシアの誇りであった。ロシアは世界の主導的な木材輸出国としてずっと名を知られてきた。ジャーナリストがいみじくも言い表したように、ソビエト政府はツァー政体から〃針葉外套〃を受け継いだ。もっともこの〃外套〃ときたら、ツァーリズムのシミ（虫）、もっと正確に言うと私有のシミにかなりひどく食い荒らされていた。ツァー時代に製材工場主や地主が官有、私有のいかんをとわず森林を乱伐したのだ。

一九一八年5月27日、誕生してまだ半年そこそこのソビエト共和国は、全国民のための林業の社会主義的組織の基本原則を定めた「森林にかんする」法令を採択した。この法令にはレーニンの署名がある。森林という〃緑の友〃にたいしてこのような心くばりが行われた時期が、反革命と外国の干渉にソビエト政権そのものが脅かされた時であったことを思えば、その配慮はとくに感銘深いものであった。

森林はひじょうに豊かな原料資源でもあり、忠実な自然の守り手でもあり、よい憩いの場所でもある。どの国も（日本もけっして例外ではない）、森林がむやみに伐採されることがないよう、極力森林の保護につとめている。

森林法の主な内容

ソビエト政権は社会主義の根源そのものから見て当然とるべき道をとっている。ソ連の森林は全ソビエト国民の共通の財産である。森林法にはそれが次のように規定してある。「森林は国家の専有でもあり、もっぱら使用にのみ供せられる。森林にたいする国有の権利を直接、または隠然たる形で侵す行動は禁止される」

単一の国家森林フォンドは、国家機関の管轄下の森林と、コルホーズに無期限に使用させている土地にある森林とから成る。後者の面積はロシア連邦共和国だけで一六〇〇万haにのぼる。

すべての森林の状態、使用および再生産の国家監督を行うのは、各地の権力機関――人民代議員ソビエト、その執行委員会、および国営林業機関である。新森林法は、林業関係の企業と組織に付属して設けられる社会的森林監督部が、この大規模な監督の仕事に積極的に参加することを定めている。

本誌の読者のみなさんは、本誌になんどか紹介された（たとえばことしの7号）学校営林署の記事をおぼえておられることだろう。こうした学校営林署は生徒たちに自然への愛、自然を大切にする態度をうえつけ、植物学、生物学などの自然科学の分野の知識を広め、深めるためにつくられたものだ。学校営林署の義務は森林を保護するだけでなく、森林を育て、薬草、きのこ、いちごや種を集めることだ。いまこの仕事にたずさわっている学校営林署は六〇〇〇、生徒数は三〇万人にのぼっている。

新森林法によると、森林全体は国民経済上の用途に従って三つのグループに分けられる。

第一のグループに入るのは、主に水源涵養、耕地・自然保護、保健衛生の機能を果たす森林である。

第二グループは人口密度の高い地区の森林および第一グループに入っていないすべてのコルホーズの森林。

そして第三グループは主に営業用の森林であり、これらの森林はさらに開発林と予備林に分けられる。

毎年ロシアの森で調達されている木材は約三億七〇〇〇万立方mで、米国と西独の木材調達量の合計にほぼ匹敵する。このように規模は実に大きく、しかもロシアの木材はいぜん世界の多くの国の港で歓迎されている。しかし公正を期すために書いておくが、ソ連の輸出総額のうちの木材のシェアは低下を続けている（革命前のそれは約11%であったが、いまはその半分以下の5・3%）。これは主に機械、設備、燃料の輸出が増えたためであり、絶対数字では木材の輸出は全国でも、ロシア連邦共和国だけでも着実に伸びており、革命前に比べて約6倍増となっている！ ことわるまでもなかろうが、森林の保護と再造成のための努力がなかったなら、こんな成果はとうていあがらなかったろう。

新森林法は、森林資源利用計画は、それぞれの具体的地区の森林伐採の科学的に根拠のある最適規準をふまえて、策定されなければならないとの原則的命題を法的に認証した。いいかえると、「どれだけ必要か？」ではなく、「どれだけ可能か？」という原則が、土台に据えられたのであり、法の保護を受ける自然の利益を重視し、場当たり的な態度を排したのである。

われわれは全力あげて森林を保護することによって、自然保護や自然の富を利用する各ソビエト市民の権利に心をくばっているのである。次に森林法の第87条の全文をあげておこう。この第87条は「人間と自然」という永遠の問題にたいするわが森林法の態度を正確、明瞭に表現しているのではなかろうか。

「市民は自由に森に入り、野生の果実、くるみ、きのこ、いちごなどを採集する権利を持つ。

市民は森林内で火災防止規則を守り、樹木や灌木の破損と盗伐、樹木の損傷、森林のごみによる汚損、あり塚、鳥の巣などの破壊を許さない義務を負う」

新森林法は、森林富源利用規則に違反した者は、森林に与えた損害の程度に応じて、刑事、行政処分または他の処分を受けるとの規定も認証した。

この条文を読んで私は〃観光公害〃を嘆いていた敦賀市長のことが頭に浮かんできた。わが人民国家はこのようにこの問題では実に胸のすくような決断を示しているのである。

ソ連では40余りの省庁が総面積四四〇〇万ha以上の森林を管理しているが、ロシア連邦共和国最高会議の8月会期では、これらのいくつかの省庁にたいして非難の声があがった。また林業の組織面で重大な欠陥のあったアムール、イワノボ州など一連の州のコルホーズ指導者たちも、激しい批判を受けた。

あれこれの欠陥は森林法の広範な審議と採択の過程で明らかにされたのだから、その点にも森林法の好ましい影響が現れたといえる。

……生涯のうちで1本でも木を植えた人は、それだけで子孫に善行を施したことになる、とよく世間でいわれている。未来の世代はきっと森林法の採択にたいしても「ありがとう」とわれわれに言うだろう。

トピックス

モスクワ＝カムチャツカ空の直行便

モスクワとカムチャツカ半島の南端に近いペトロパブロフスク・カムチャツキー（直線距離で一万一八七六km）とを結ぶソ連国内線としては一番長いノンストップ空路が開設された。この新しい定期空路に就航しているのはＩＬ62Ｍジェット旅客機。所要時間は8時間40分で、これまでのハバロフスク経由の半分に短縮。距離にして直行便は一二〇〇km短いので、その経済的な効果は大きい。

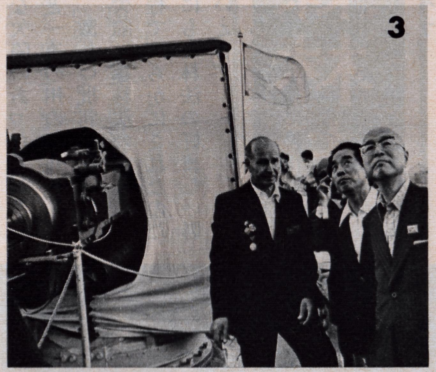
現行5カ年計画（一九七六―八〇年）でアエロフロートは新空港の建設と既存空港の改修を行う。

開発が急ピッチに進む極北、シベリア、極東とモスクワを結ぶ航空路の重要性は年々高まり、ウラジオストク、コムソモリスク・ナ・アムーレ、トムスクでは新空港の建設工事が始まっているし、ペトロパブロフスク・カムチャツキー、ヤクーツク、マガダン、ノリリスク、ハバロフスク、ペベクの各空港では改修工事が進行中。

レニングラードを訪れた大阪市の代表団







レニングラードと大阪の友好のきずなは固い。両市の市役所もたえず相互に接触し合っている。

さて7月11日から16日まで大阪市の代表団（団長石川多賀夫助役）がレニングラードを訪問。レニングラードのイワン・ポポフ副市長は、四五〇万都市の発展、経済と文化、市ソビエトが抱える諸問題——とくに住宅建設の規模の拡大と旧市街の史跡の保存の問題などについて代表団一行に説明した。

副市長の話によると、レニングラードでは1日に一七〇のフラットが新築されており、18—19世紀の約四〇〇〇の有名建造物が、外観は昔のままそっくり残して、内部だけが現代風に便利に改装されているという。

一行は、一九一七年に10月革命の本部となり、その後レーニン首班の最初のソビエト政府がおかれたスモーリヌイを訪れた。いまスモーリヌイにはソ連共産党レニングラード組織の州、市委員会がある。

ネバ州の岸辺につながれているオーロラ号は、一九一七年11月6日夜から7日未明にかけて10月革命の始まりをその砲撃によってつげた由緒ある巡洋艦である。一行はオーロラ号を訪れ、記念物を見物した。

レニングラードの人々は、ファシズムとのたたかいの英雄的かつ悲劇的な日々の思い出を大切にしている。九〇〇日余りのドイツ軍による封鎖期間中に死んだ、何十万というレニングラード市民が眠るピスカリョフ墓地を訪れないような、この市のお客はひとりもいないだろう。大阪市の代表団は、レニングラード防衛に命を散らした人々にたいする尊敬の印として、この墓地の記念碑に献花した。

ソ日協会レニングラード支部（支部会員数二万人余り）で細部にわたる懇談が行われたが、支部長のワシリー・プロコフィエフは職業が医師で、レニングラード市執行委員会（市役所）の保健総局長でもあるので、自ら市の医療施設をくわしく紹介した。

また一行は世界芸術の宝庫エルミタージュ美術館を訪れ、レニングラード近郊のたくさんの噴水で名高い絶景の地ペトロドボレツで半日を送った。

レニングラードを去るにあたって、石川氏は代表団を代表して次のように語った。「滞在中ロシア人の心温まるもてなしぶりを十分感じとり、10月革命のふるさとであるレニングラード市の工業、文化の成果をつぶさに知ることができた。また市当局の住民にたいする配慮には感心したし、医療についてはうらやましいのひとことに尽きる」

1 市執行委員会で握手をかわす石川助役（左）とイワン・ポポフ副市長

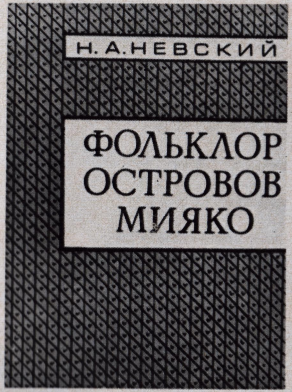
2 ピスカリョフ墓地にもうで、戦時下の英雄的、悲劇的日々をしのぶ。

3 オーロラ号の艦上で革命当時の艦の活躍ぶりを聞く

本だな

民俗学者ニコライ・ネフスキーの著書

『宮古島の民俗』



ソ連科学アカデミー東洋学研究所レニングラード支部が、有名な東洋学者ニコライ・ネフスキー（一八九二—一九四五）の残した手稿の分類、研究、出版の仕事を始めてからもう10年以上になる。その一部はすでに発表され、内外の学界から高く評価された。ことしに入ってまた一つ、ネフスキーの著書『宮古島の民俗』がナウカ出版所から出版された（発行部数七〇〇〇部、一九二ページ）。

ニコライ・ネフスキーが日本で暮らしたのは一九一五年から一九二九年までで。ネフスキーの研究の最初のもくろみは神道であったが、比較民俗学や地方の民俗の知識がなくてはどうにも研究が進まないことをすぐにさとり、宮古島に行くことにした。

ネフスキーがこの宮古島を選んだ理由として、『宮古島の民俗』の編者である文芸学者のリジア・グロムコフスカヤは、ネフスキーは「神話の里」というべきものを終始さがしていたが、この意味で宮古島はネフスキーにとってあこがれの土地だったようだと書いている。

ネフスキーはまず東京の図書館で宮古島にかんする資料を調べたあと、宮古島に渡って、土地の方言を完全にマスターした。ネフスキーは現地の住民から聞いたものを残らず（歌、なぞ、民話、迷信、ことわざなど）記録した。ネフスキーは言葉の個々のニュアンスや慣用句にも興味をもった。ネフスキーは他民族の慣習をうやまい、慣習を知ろうとつとめ、自分の博識を少しも鼻にかけなかったので、現地の人々はたちまち彼に好意をよせ、多くの人が友人となり、その後も一種の通信員の役割を果たした。

ネフスキーの宮古島民俗の研究活動はぼう大なものだった。日本の民俗学者柳田国男氏が回想のなかで、ネフスキーは当時日本の民俗学に知られていなかったいくつかの現象に、日本の学者の関心をよびさましたと書いたのも当然であろう。柳田国男氏は、ネフスキーは多くの貴重な研究をして、世界の学界に大きな貢献をしたと見ており、ネフスキーは日本の方言学者がまだ省みなかったころ、すでに宮古の方言に関心をもったと強調した。

一九二〇年代のネフスキーの活動は、ひじょうに積極的で、実り多いものだったので、岡正雄氏（平凡社東洋文庫『月と不死』の編者）はいまネフスキーを「日本民俗学の生みの親の一人」にあげている。

ネフスキーは数回宮古島を訪れている。彼は宮古島旅行の結果を雑誌『民族』（一九二六—一九二七）に書いた。その論文はつっこみが深く、細部にわたっている。ネフスキーはこれらの論文を日本語で書き、宮古島の歌を方言から文語に訳した。

残念なことに、ネフスキーは宮古島の民俗にかんする著作をロシア語で出すことはできなかった。研究所の古文書室にあった手稿のあるものには、ネフスキーのぼう大なコメントが付いており、あるものはほんの少ししかコメントがなく、またあるものは全然コメントがないというぐあいで、コメントの量はまちまちだった。リジア・グロムコフスカヤは、それらを本にまとめるために心血をしぼった。

この本のテキストは全部ジャンル別に分けられ、初めに歌、つぎに民話、なぞ、ことわざ、迷信の順となっている。いずれもロシア語になっているだけでなく、宮古島の方言も（ローマ字に翻字）併載されている。ほとんどのテキストにもネフスキーの簡単なコメントが付いている（たとえば『根間の主がアカゴ』は、一九二二年8月13日に平良の島尻で5人の40歳位の女性から聴きとったとある）。

「われわれはバリアントの違いがほんのちょっとの場合でも、できるだけたくさんのテキストと翻訳のバリアントを収めるようにした。二つの音標テキストを出し、翻訳は一つだけという場合もときにはある。またテキストは違っているが、翻訳がまったく同一というものもある。またほかのデテールが、研究者・人間であったネフスキーの面影をより完全に再現していると思う」

——リジア・グロムコフスカヤは本の序文にこう書いている。



モスクワの労働組合会館で公演する児童舞踊アンサンブル『カリンカ』

ダンスを通じて情操教育

アダ・バスキナ　カメラ　A・ルイスキン

セラフィモービチ記念文化会館（モスクワ、クラスナヤ・プレスニャ区）の児童舞踊アンサンブル『カリンカ』は、文字通り〝大人の〟評判をとっている。『カリンカ』は、上はボリショイ劇場、クレムリン大会宮殿といった最も名誉ある舞台に招かれる。チェコスロバキア、フランス、キューバでも拍手をおくられた。しかしここで私が語りたいのは、若い演技者たちの踊りの技（わざ）についてではない。私が関心をよせているのは、舞踊による年少者教育の問題である。

マナーも情緒も

『カリンカ』の芸術指導者アレクサンドル・フィリッポフはまだ若い。かれが10年制中等学校を卒業したのは、たった15年前のことだ。フィリッポフは当時すでにダンサーの経歴を持っていた。モスクワのリハチョフ記念自動車工場（ジル）文化宮殿の舞踊アンサンブルで数年間踊っていたのである。学校卒業後、かれはアマチュア芸術団体で教えるバレエマスターの課程を修了した。その後、ジルの文化宮殿の児童舞踊団で働いた。やがてアンサンブル『カリンカ』を創設した。このアンサンブルには現在、6歳から16歳までの二四〇人が参加している。

自分の仕事で何がいちばん重要だと考えているかという私の質問にたいして、フィリッポフは次のように答えた。

「単なる踊りの教師ではないこと、真の教育者であることです。私は子供たちによいマナーを植え付けるよう努力しています」

アンサンブルのレパートリーのなかには、『招待』、『お辞儀』、『腕白小僧』といった、よいマナーの〝法典〟をおどけた形で例解した踊りの場面がいくつかある。

「われわれは、きちんとしていることを重要視します。舞踊室に入るものはすべて、申し分なくきちんとした身なりをしていなければならない。白の衣装にはアイロンがかけられています。髪は念入りにくしけずられています。このような、きちんとしている習慣、自分の外見に留意する能力といったものは、後に一生の習性となるものです」

……文化会館に私が近づいたときだった。『カリンカ』のあるグループの授業が終わって、幾人かの子供たちが、踊るようにして私の方にかけ出してきた。この子供たちの間には、わずかながら感じとられる共通のものがあった。それは胸を張って堂々としていて、動作が伸び伸びしていること、またすべての点で引きしまっているのが目立つことだった。私は、フィリッポフとの対話のなかで、自分のこの瞬間的な印象について話した。

「もちろん、これはすべて外面的な鍛練に関することですが——とフィリッポフは話す——われわれは同時に、できるかぎり感情の鍛練にも努めています。これは恐らく最も困難な仕事でしょう。とくに情緒の乏しい男の子の場合に困難です。とはいえ女の子の場合も簡単ではありません。女の子の場合、本当の感情がセンチメントにすり替えられることがよくあるからです」

たった6歳の子供がアンサンブルに入るのである。この子供は初めにエチュードに参加する。驚きと喜びを呼び起こす状況のなかで自分を考えなければならない。表情や身振りでその驚きや喜びを表現しなければならない。それから音楽の知識を持たねばならない。子供たちは、偉大な作家の作品を聴き、自分の感覚と連想を解明するよう要求される。そしてこの音楽に合わせて踊ることを練習する。フィリッポフは、子供たちの情緒の世界を発達させることによって、子供の成人してからの生活をらくにしているのだと私は思う。その生活をいっそう丁寧なもの、精神的に繊細なもの、あらゆる善にたいして開かれたものにしているのである。

アンサンブルのレパートリーのなかには、学校生活、ピオネール・キャンプでの休息、ハイキング、国際青年フェスティバルなどにかんする多くのさまざまな舞踊楽曲がある。舞踊の〝友好の法則〟が子供を直接教育するとは、私は主張しかねる。しかしそれが一定の気分を伝え、助け合いや集団主義のふん囲気をつくり出すことはあり得る。このような仲間意識は、日常生活のなかにもしばしば現れている。

父親が、ひいきのチームが出場するサッカーの試合の切符をジェーニャ・ポリカルポフに買ってやった。それをことわる時、ジェーニャは泣き出さんばかりだった。しかし、きっぱりとことわった。下げいこが行われることになっていて、仲間を困らせるわけにはいかなかったからだ。またある夏、アンサンブルは招かれてリャザンへ旅をした。この時は、メンバーの3人の子供の誕生日と重なった。旅先でどんなお祝いが催されたことか！　楽しいコンサートと仮面舞踏会で祝われたのだった。

これはチェコスロバキアを巡業したときのことだが、クラスナヤ・プレスニャのちびっ子たちは、ポプラドの町の民俗フェスティバルに参加した。かれらは、自分たちと同年齢の子供たちとの間に、共通の言葉をすぐに見つけた。そしていまでは、手紙や葉書のやりとりをしている。

子供はさまざま

「ところで、子供の自由時間には何か有益なことをやらせなければならない、と言うのがこんにちのはやりになっています——とフィリッポフは言う——私ももちろんそれには賛成です。しかし子供が〝熱中〟しないことを〝やらせる〟べきではない、というのが私の信念です。ところで、そうした例がよくあるのです。ある母親は2年間いつも息子の



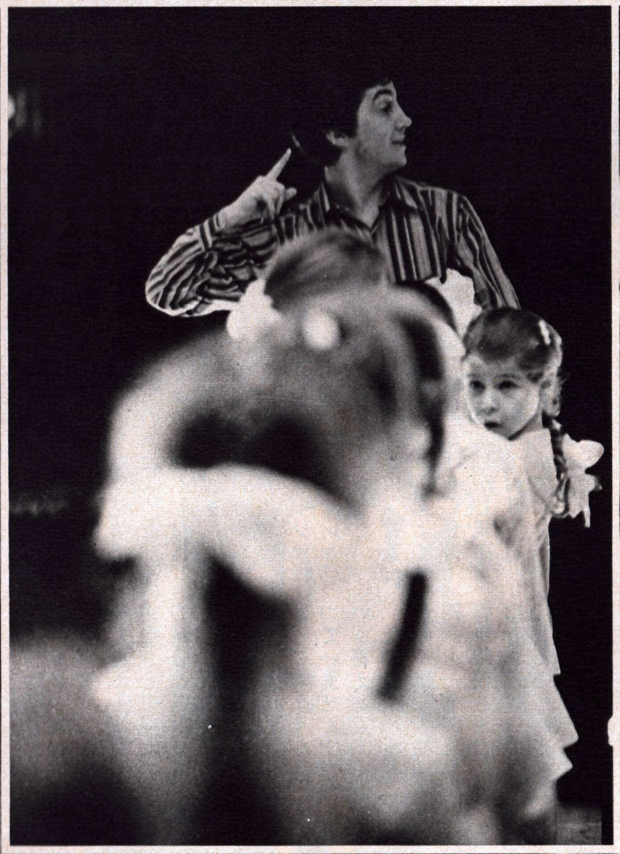
次の構想をねるアレクサンドル・フィリッポフ



踊りの手本を示す



「きみ自身が感じていることを、見る人にも感じさせるんだよ」



「たんなる踊り手ではなく、教育者でありたい」

手をひいて踊りのレッスンに通わせたのです！　後に、そうすることをやめると、子供はたちまちレッスンをよしにしまいました。問題はどこにあったのでしょう？　踊りはまったくこの子の天分ではなかったのです。かれはサッカーならもっとうまくやれたし、模型飛行機ならもっとうまく組み立てたかもしれません。しかしもう手遅れです。母親の監督下で授業を受けることに、かれはあきあきしていたのです。いまとなっては、かれをどんなサークルに誘うこともできません。私が両親や教師との結び付きを非常に重要視するのはこのためです」

毎年、レッスンを開始するに当たって、アレクサンドル・フィリッポフは近隣の学校を訪ねる。アンサンブルが創設されてから8年間、学校の教師たちはこのアンサンブルになじみ、フィリッポフがどんな子供を探しているかを知っている。それは活発、〝敏感〟な子供である。このような子供はしばしば、規律に最も欠けており、扱いにくい子供でもある。フィリッポフは若いにもかかわらず、〝問題児〟相手の仕事をする経験をすでに少なからず積んでいる。

……セリョージャ・ラザレフとワーシャ・ラザレフの兄弟は、学校の内外で、時にはならずものまがいの無頼行為をする乱暴者としてよく知られていた。そこでクラス主任はこの子たちをフィリッポフに見せることにした。兄弟はフィリッポフの気に入った。ほかのことはともかく、かれらは感動しやすい性質をありあまるほどそなえていたからだ。フィリッポフも子供たちの気に入った。セリョージャとワーシャは文化会館でレッスンを受けることになった。

そこでわかったことは、2人とも音楽的で、リズムをよく理解し、動作をわけなく会得することだった。しかし規律にはからきし欠けており、自分を抑制することができないのである。

フィリッポフは長い間、この兄弟と話し合った。その後、自分の息子たちにあまり注意を払っていなかった兄弟の両親とも話し合った。子供たちのだらしなさ、わがまま、約束不履行を克服するためには、少なからぬ教育的努力を払う必要があった。しかしそのかいあって、兄弟はその後、アンサンブルの誇り、アンサンブルの最も規律正しい一員、新入生教育の最良の助手となった。

「しかし両親の注意から落ちこぼれた子供の方が、過保護の子供よりもはるかに少ないのです——とフィリッポフは語る——アンサンブルの年長グループのなかには、最新の流行の服を身につけようと努めている15—16歳の娘が幾人かいます。美的感覚がなくて卑俗です。この子らの家を訪ねて見ると、普通の家庭で、裕福さも中程度です。『なぜご自分の子供をあんなに甘やかしているのですか？』と質問すると、『喜ばせてやりたいのです。若いころの私たちは、このようなものは何も持っていませんでしたから』という答えが返ってきます」

こんにちの生徒たちの両親の多くは、大祖国戦争（一九四一—一九四五年）の時期に青年時代をすごした。当時はほとんどすべての家庭が困窮のどん底にあえいでいた。だがいまは、子供たちを〝甘やかして〟おけるというわけだ。娘は着飾り、化粧をし、同性の友達と人を見下す態度でおしゃべりをしている。そして心ではなく衣装で友を選ぶ。これが娘にとってどんなに危険であるか、どんな欠陥人間が育ちかねないかを、フィリッポフが両親に説いている図を想像してみてほしい。

「ところであなたの集団では、どうすれば権威をかち取ることができるのですか？」「勤勉であること、あらゆる力を集中すること、対人関係を良くすることによってです。この点で最も尊敬されているのはターニャ・ビリュコワとミーシャ・ポリャコフです。2人ともアンサンブルでよく働き、よく勉強しています。なお2人とも学校でコムソモールのリーダーをつとめています」

「あなたのほかに、子供たちを指導しているのはだれですか？」

「第1には、あと3人のバレエマスターです。かれらはモスクワの劇場のかつてのソリストです。第2には、学校の教師たちです。われわれはしばしば、この人たちから助言を受けています。第3には、親たちです。かれらはわれわれの最も熱烈な友人です」

別れるに当たってアレクサンドル・フィリッポフはこう話した——「もちろん私は、踊りが唯一の普遍的な教育手段であるとは考えていません。子供の自主的な活動のどれをとってみても、それがりっぱな教育効果をあげていることは明らかです。合唱、演劇など文化会館の他の児童集団についても同じです。しかし私自身はもちろん、自分のジャンルでやって行きます」


腕白な男の子もこのとおり


エチュードの一つ


出番を待つ

問題点を探る

なぜ医者の権威は低下しているか？

雑誌『健康』学術部長　マルク・フロムチェンコ

医師と患者の複雑な関係

職業としての医学、いわば〃医業〃が出現して以来、医学の権威は、医学の可能性にはかかわりなく、治療の成功にとって根本的なものとされてきた。しかし白衣をつけた医師と患者自身という2人の〃医師〃が患者を治療しているとの主張が正しいとすれば、文明が進んだ現代においては、逆説的かもしれないが、医師が患者と競争することはますます困難となっているといえよう。情報の流れのなかで選択的につかみ取った、患者の〃知恵〃の袋は余りにも豊かになっているのである。

最新の診断・治療方法で現代の医師を武装させている科学・技術的進歩の強襲を前に、以前には不治とされていた病気が後退しつつある。以前には幾百万の人命を奪った多くの伝染病がその陣地を明け渡した。30年前には、心筋梗塞患者の最高80％が罹病後1年以内に死んだものだが、こんにちでは同じ80％が急速に回復し、その後も積極的に働いている。医師は多くの形態の悪性腫瘍を早期に発見し、治療するすべを学んだ。このことが、あるいは医師の権威の向上の理由となっているのではないか、と思われるかも知れない。しかし実際は、すべてがはるかに複雑である。ことし開かれた医師と患者の関係の多様な問題を討議する第2回全ソ会議では、医師の職業的権威の低下の問題が取り上げられた。

会議参加者は、患者の初診から全快までの過程をフォローしながら、治療成果の低下の原因となっている自分たちの誤りを明らかにしようとした。

この場合、いったい問題はどこにあるのか？　医師が自分の権威を高めるために必要な方法と手段を見つけねば、患者を失うかも知れないほど、事態は深刻なのだろうか？　もちろん、そうではない。問題ははるかにデリケートで複雑である。ソ連の住民一人当たりの医療従事者数は世界最高である。同時に国家は、憲法に定められているソ連各国民の健康保護の権利（第42条）の履行を保証し、全国民に質の高い無料の医療を提供している。そのうえ、一定のカテゴリーの患者にたいしては（常置の病院においてはすべての患者に）無料で薬剤が出されている。また最後に、国民の教育水準が高いので、ソビエト医学の最新の発見や新方法にかんする住民の情報取得度は非常に高い。

はんらんする医学知識

当然多くの患者は実際の治療ではしろうとだが、地区担当医が自分たちに、何を、どのように処方しているかを、有名なアカデミー会員、あるいは少なくとも医学教授が最近の雑誌に書いているものと比較しながら判断する（時には極めて断定的に）ようになっている。これらの熱心な患者たちは、物的要因とはまったく関係なく、最新の薬剤あるいは〃超〃最新の治療方法の適用を強く求めている。

このような状況のもとでソビエト医師の以前の（非常に高い）水準の権威をどのようにして守るべきだろうか？　患者と議論して、そのような薬剤がほかならぬ患者に害をもたらすだけだということを証明すべきだろうか？　そんなことはけっしてしてはならない。

会議は次のような結論を出した。このような問題が出てきた主な原因の一つは、多くの医師に患者と話し合う能力があまりないことであり、第2の原因は、臨床医学知識がむやみやたらと流され、しかもその中には間違った宣伝もある。この種の宣伝にたいする責任は医師とともにジャーナリストが負うべきものである。ジャーナリストはセンセーショナルなニュースを求めて、実験室の段階を経ただけの実地の使用にはほど遠い物質のことを書きたてている。この種の記事は専門の刊行物に載せるべきもので、大衆的刊行物にけっして発表されてはならない。ソ連医学アカデミーのニコライ・ブロヒン総裁が、いまは潜在的患者だけでなく、これらの患者を対象に書いている医師とジャーナリストをも、再教育すべき時だと語っているのは偶然ではない。

論議を呼んだ技師の著書

『積極的長寿』という本が即日売り切れたというふん囲気も、こんどの会議の開催がタイムリーだったことを物語っている。この本には『私の老化防止法』という副題が付いており、著者はアカデミー会員（ただし医学のではない）アレクサンドル・ミクーリンである。国家賞、社会主義労働英雄の称号などを一度ならず受けたアレクサンドル・ミクーリンは航空機エンジンの設計者。ちなみに、一九三七年にワレリー・チカロフらが世界で初めて北極経由米国への無着陸飛行を敢行したANT25機は、ミクーリンの設計したエンジンを装備していた。歳月は流れ、ミクーリン・アカデミー会員の生命力も衰え、結局、心臓・血管系統の重病のためしばしば入院加療するようになった。回復ははかばかしくなかった。この航空機エンジン設計者が自力で病気をいやすことを決意したのは、そのときである……そして健康をすっかり取り戻した。しかし単に健康だということだけでは満足しなかった——病気になる前よりも、もっと健康になろうと決意したのである。

『積極的長寿』は二〇万部が出版されたにもかかわらず即日売り切れとなった。ミクーリンの本を章ごとに転載してほしいという手紙が雑誌『健康』にも殺到した。編集部は転載はせず、専門家の若干の批評だけを載せた。老年学研究所長ドミトリー・チェボタレフ医学アカデミー会員はとりわけ次のように書いている——「病気や年齢には屈服したくないというミクーリン・アカデミー会員の不屈さには魅了されたが、本書の著者の助言に従うにあたっては慎重を期するよう読者に勧告する必要があろう」

この警告は、けっして余計なことではなかった——ミクーリン・アカデミー会員の多くの助言は外見は無害のように見えても、内臓に大きな疾患のある人々にはまったく禁じられていることを勧めていた。

ミクーリンの著書にたいする反響を載せた号の雑誌が発行されてからわずか数日後に、同誌編集部は、ミクーリンが設計者として輝かしい成功を収めていた時代にさえ思っても見なかったような人気をかちえたことを確認するにいたった。

ベロルシアのグロドノ市からは、32人が署名した次のような集団の手紙が送られてきた——「自分のそりに乗っていないからといって、この設計技師を思う存分批判することはできよう。しかし、あなた方が何かにつけて相談するようにと助言している医師ではなく、他ならぬかれ設計技師こそが、慢性的疾患から、過労と老化から救われる道、健康と元気な老年への道をわれわれに教えてくれたのである」

なぜ彼が新しいヒポクラテスと呼ばれ、かれの著書にたいする慎重で否定的な批評が、何故にこうも激しい反響を呼んだのか？　ここにそのわけを列挙してみよう。まず朝は呼吸運動、体操、ランニングに始まり、最後に冷水摩擦などの水による処置で終わる。日中は数回、立ったままで〃振動体操〃（つま先で立ち、かかとを上下する）をやり、静脈が血液を心臓へ回流させるのを助ける。就寝前、あるいは昼間、机に座って仕事をしながら、体を導線で暖房用ラジエータに接続し〃アース〃する。これは体に有害な過剰の陰電気を体外に放出するためである。食物の定量を制限し、時には絶食する。要はこれだけのことである。言いかえると、ミクーリンは新しい治療、予防手段は何一つ提起してはいないのである。かれは健康でありたいという熱望と、常識となっている衛生、体育の基礎的規則を毎日きちんと守ることで顕著な成果をあげることができた。

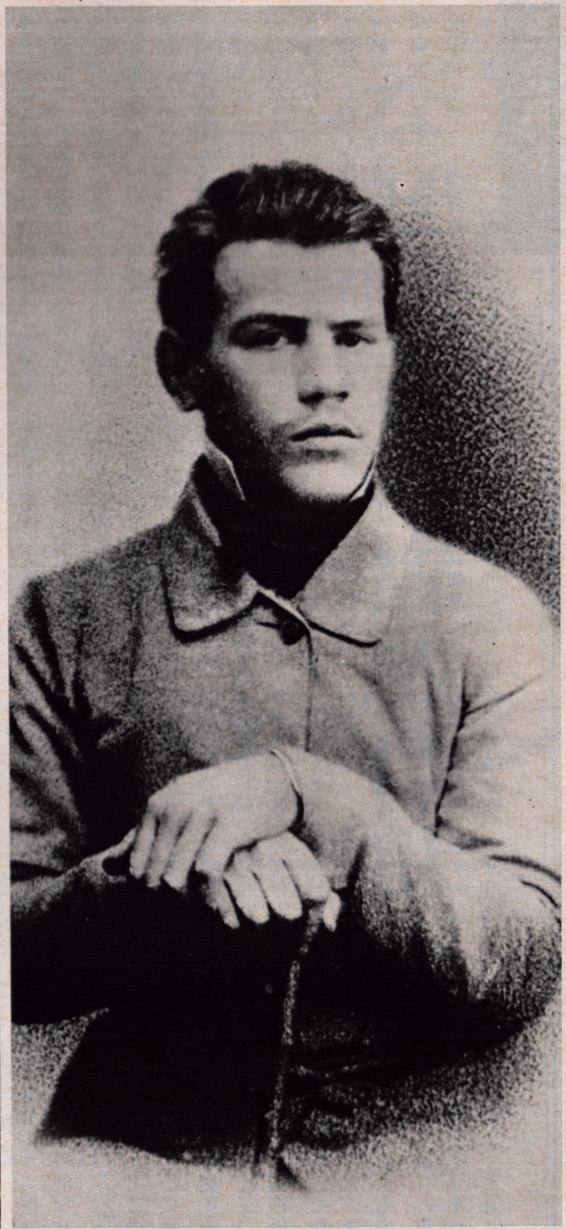
これらの規則はすでに以前から医師が宣伝していたものである。ではなぜ、これらの法則は、この航空機エンジン設計技師がいったん口にすると、このような疑いの余地のない天啓として響きわたるのだろうか？　名声の魔術とでもいうのだろうか？　けっしてそうではあるまい。大多数の読者は、『積極的長寿』という本が出版されるまではミクーリンの名前を知らなかった。理由は、人を催眠術にでもかけるような、かれの恐しく固い信念にある！　「私がやっているとおりにやれ。そうすれば君は私のように健康になり、元気に喜々として生活を楽しめるようになる」——ミクーリンはこう断言する。

全ソ会議の結論

ソ連ではソビエト政権の確立後、平均寿命が急速に延びた。いまでは老齢者がますます増えている。しかし、慢性病にかかっている者や老衰者も少なくない。これらの人々は、健康と病気の中間にいることが多い。しかも70－80歳のものだけでなく、なかには40－50歳で、このような状態にあるものもいる。この人々は、あまり身体の調子がよくないと自分で感じている。このような人々にも、積極的に身体を動かす生活、合理的な食事と鍛練をしんぼう強くすすめ、生活の楽しみをつちかう術を教えなければならない。このような人は数百万人もいる。そしてこの人たちのためには、スポーツトレーナーがしだいに最良の医師になっている。

結局マスコミは新しい治療法にかんする報道を減らさねばならない（十分に検証されていないものについてはなおさらのこと）。病気のテーマは一般に手を触れずにおき、これは医師と患者の親密な話し合いにまかせること、というのが、こんどの会議の結論であった。健全な生活様式を明りようかつ根気強く、納得のいくように宣伝することに重点を置かねばならない。

1851年２月（22歳）



1854年２月（25歳）モスクワで



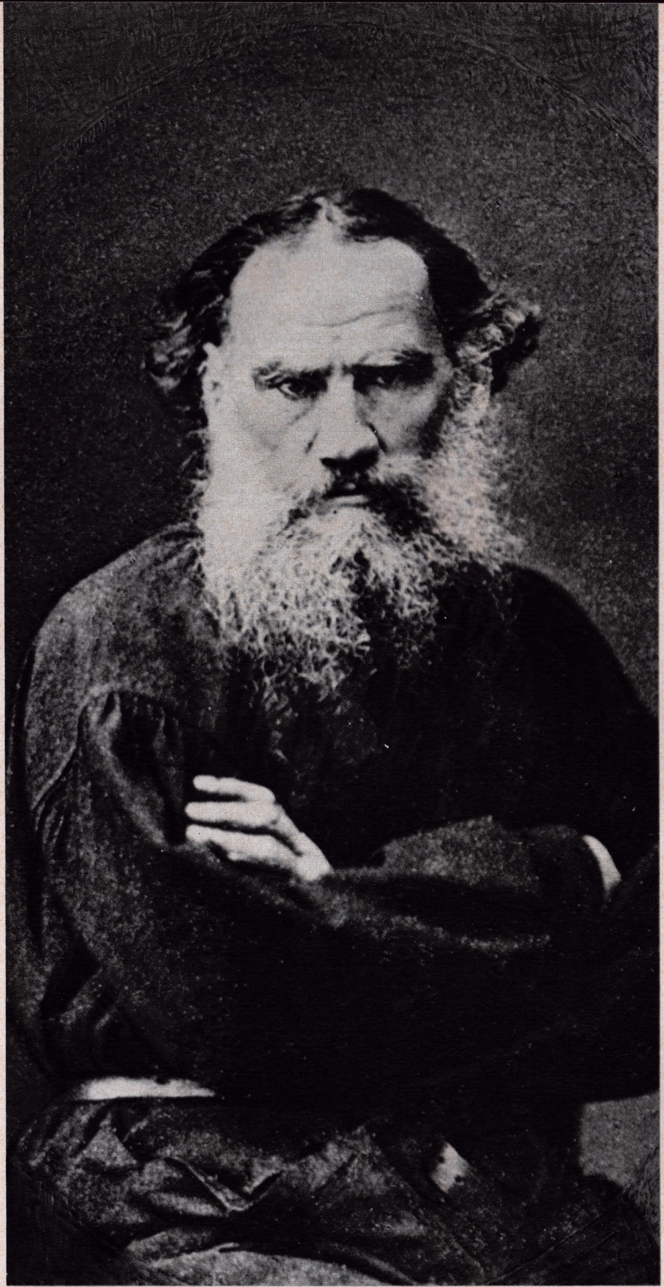
特集　文豪トルストイ生誕150周年

永遠の同時代人トルストイ

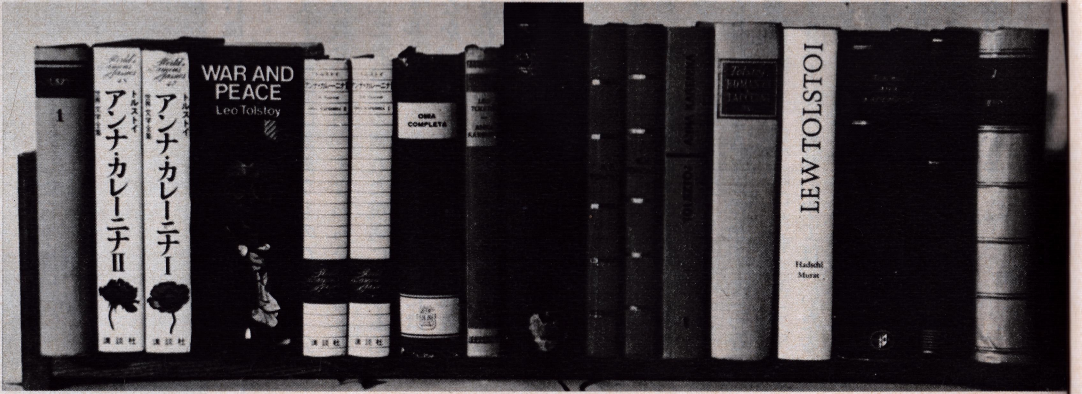
作家　レオニード・レオーノフ

1862年９月（34歳）モスクワで





1885年（57歳）モスクワで



トルストイの作品は世界各国語に翻訳されている。

この9月9日はロシアの生んだ世界的な大文豪レフ・ニコラエビチ・トルストイ（一八二八―一九一〇）の生誕一五〇周年にあたる。この日を記念するために、ソ連はもちろん、世界各国でさまざまな行事が準備されている。本号でも、トルストイにかんする記事を特集した。最初に紹介するのは、ソ連の作家レオーノフの論文である。

わが国の社会思想におけるトルストイの役割は、ロシア作家たちによって再三強調されてきた。トルストイの死の10年まえに、すでにチェーホフは次のように書いている――「トルストイの死が心配だ。彼が死んだら、私の生活には大きな空洞ができるだろう……彼を失えば、わが国の文学は牧夫のいない畜群に変わってしまうだろう……」

トルストイの死は、先進的なインテリゲンチアに身寄りを失ったという感情、さらには指導者を失ったという感情を呼び起こさせただけではない。ロシアの一般大衆もまた、トルストイ喪失を痛感した。トルストイは全生涯を人民に包み隠さず生き、あるときは自分自身の名のもとに、あるときはオレーニン、レービン、ネフリュードフなど自分の作品の主人公たちの名のもとに、心の奥底をさらけ出し、不正な富や無為、暴力、朽ちた文明の積もり積もった奇形とつねにたたかった。トルストイは長寿だったので、民衆の中の先進的な人々は、清廉な心がいつも自分たちの身近で打っており、炯眼な目が自分たちの懲役のような労働を見守っており、鋭敏な耳が自分たちの呻きや歌を聴いてくれている、と考えることに慣れていた。

プーシキンが民衆の言葉の魅惑的な音楽を発見したように、トルストイは民衆の言葉を使って、ロシア人の心のうち、喜びや悲しみを、だれもできなかったほど見事に表現し、彼らの歴史的な典型の中に、民族や個々人が正義の事業のためのたたかいの中で英雄に変わるという、昔から何回となく検証されてきたメカニズムを示した。

嵐も微風も、通常の視野には収まり切らない巨大なものも、不注意な目からはこぼれ落ちてしまうような一見ささいなものも、人間の偉大さもちっぽけさも、すべてが『戦争と平和』『コサック』『アンナ・カレーニナ』『復活』の作者のペンの意のままである。トルストイの矛盾に満ちた複雑な経歴が、彼が人々の心のまったく思いがけない面を示すことを可能にした。人々の心をこれほどまで読者に開いて見せた作家はいなかった。今日トルストイは、その完璧な姿においてだけでなく、真理――純粋な形ではまだだれも手に入れたことのない真理――の探求者には避けられない動揺、極端、迷いの姿においても、いかなる照明の助けを借りることなく、完全に見ることができる。

この人の外貌は、傑出した文学者としての枠にさえ収まらない。散文でプーシキンについて語るのが面目ないのと同様に、トルストイの名は、晴れやかな言葉でふち取られなければならない。その名は、古代の文化の揺りかごから始まる言葉の巨匠の列に連なっている。その創作は、真の大偉業である。ここでも私は、トルストイの諸形象の不滅の光を放つ魅力について触れ、生活についてのトルストイの特別な洞察力を強調し、彼のどの行をとっても、そこには当時の現実の奥深くからつかみ出した、冷めることのない生活素材が盛られていることを強調したい。これと関連して重要だと思われるのは、トルストイの創作のもっとも強力な摘発の側面、すなわち、きわめてまじめなリアリズム、ありとあらゆる仮面の剥奪についてのレーニンの指摘をもう一度明らかにすることだろう。

また、トルストイの思考とトルストイの言葉の驚くべき正確さ、その心理的イントネーションについて触れるのも有益だろう。その言葉は、きわめて含蓄に富み、余韻に満ちているので、読者は行を追いながら文章の奥底に達することができるだけでなく、本を読み終えても、長いことその感動にひたっていることができる。広範な文学に与えたトルストイの強力で有益な影響の原因を列挙し、ついでに作家の詩的完成がロシアの民族的性格にどのように影響を及ぼし、彼自身の創作の中にどのように精悍、不屈、深さ、その他のロシア的資質が現れたかを、一連の輝かしい例をあげて示すのも時宜を得ているだろう。これらすべては、世界文学の流れにおけるトルストイの特別な地位を理解するのに不可欠であり、それによって、ロシア語その他の外国語でこれほどたくさんトルストイの文学について書かれていることが説明つくだろう。

17歳のときに教会の儀式を拒否したレフ・トルストイにあっては、そのキリスト教信仰は奇異なものだった。公式の教会が破門、すなわち公然たる呪咀（これは住み慣れた境遇における伯爵トルストイの気分に影響せずにはおかなかった）という自衛手段を余儀なくされたトルストイの不審の信仰は、彼が親近感を抱いていた家父長制的農民層との関係を気まずくさせた。信仰はトルストイを隠遁や世俗を逃れた孤高へではなく、逆に、近しい人々のための、善と平和のための活動、この巨大な、社会的に思考する個性が引きつけられた素朴な人々との余すところない接近へと導いた。

トルストイの作品の中では、いたるところに人民大衆の側への作者の共感が見られる。賢人カラターエフは一兵卒にすぎないが、伯爵ピエール・ベズーホフは何よりもまず兵卒に、一兵卒になりたがっている。

死の床にあっても、トルストイの生気を失った唇からは、最後の、悲哀に満ちた言葉が漏れる――「いや、百姓はこんなふうには死なない！」 この死をまえにした、歯のあいだから漏れた無念の言葉の中にも、生活は木や鳥や百姓のように、嘘をつかず、不安や後悔や不平もなく、良心のとがめもなくそこを去れるように打ち立てなければならないという、トルストイの人生哲学が現れている。

では、亡びるべき世界にこのように決然と拳をふり上げた彼に何が不足だったのか？ 人類の復活を宣言し、雑草の生い茂った人間畑を除草するために、彼に何が不足だったのか？ そして、新しい宗教を開かないまでも、すでに当時世界の入口に迫っており、トルストイの死の７年後には10月革命でロシアの労働者や兵士の銃剣に乗って世界に押し入った新しいものの確立において、しかるべき地位を占めるためには、彼に何が不足だったのか？ トルストイが頭で考えた生活の変革を、すべてを許す善の宣言を通じて行おうとしたことの中に、謎はないか？ だが、人間の苦悩の全系譜は、結構な暮らしをするためには、心の中の輝きのほかに、人間にはどれほど多くのことが要求されるかを示している。

トルストイの創作の内幕は、真に偉大な完成と偉大な迷いの教訓的な経験を明らかにしている。偉大な迷いは、スコラ的な思弁が現実の批判的な観察に取って代わることによって、すでにこの芸術家にとって危険となっていた理性論的説教へと、しばしば彼を導いた。

トルストイはペンの力で、人間感情のスペクトルのどれでも読者に起こさせることができた。それはつねに、奇跡に出会ったときの素朴な驚きのニュアンスを帯びて、人間の魂を音もなく変え、それをいっそう堅忍な、同情深い、悪にたいして非妥協的なものにする。われわれがトルストイに感謝するのは、彼がカレーニンを軽蔑し、拒否する力と権利をわれわれに与えてくれたからではないのか？ ナターシャ・ロストワといっしょに負傷した求婚者の枕もとで気をもみ、マースロワを裁いた法廷の偽善と犯罪的な無関心に憤慨し、アウステルリッツの野で負傷したボルコンスキー公爵と生の撲滅を遂行したナポレオンとの、技量の極限で演じられた暴露的な出会いによる視覚的、精神的なショックを永遠に、感謝の気持ちをこめて記憶にとどめておく力と権利を与えてくれたからではないのか？ これらすべての場面は、真の生命のおののきに満ちており、この人間の魂への深い透徹、決してくり返されることのない人間個性への有無を言わせぬ尊敬が、今日の文学にしばしば不足しているのではないのか？

トルストイの肘かけ椅子は空いている。世界文学にはいまのところ、トルストイと並ぶものはない。

わが国の文学には、トルストイが出現する以前と、わが国の精神生活におけるすべてが彼の創作遺産の痕跡をとどめている時期とを画する一線が、はっきり認められる。われわれに歴史と言葉をのこし、物質生活の基礎を築いてくれたわれわれの祖先がどんな人たちであっても、われわれは彼らより幸せだ。われわれすべての中には、小さな一つぶではあれ、トルストイがのこしてくれたものがあるからだ。これは、祖国の名を世界に広め、そのことによって自身は全世界にたたえられるレフ・トルストイとなった天才と祖国の相互作用の見本である！

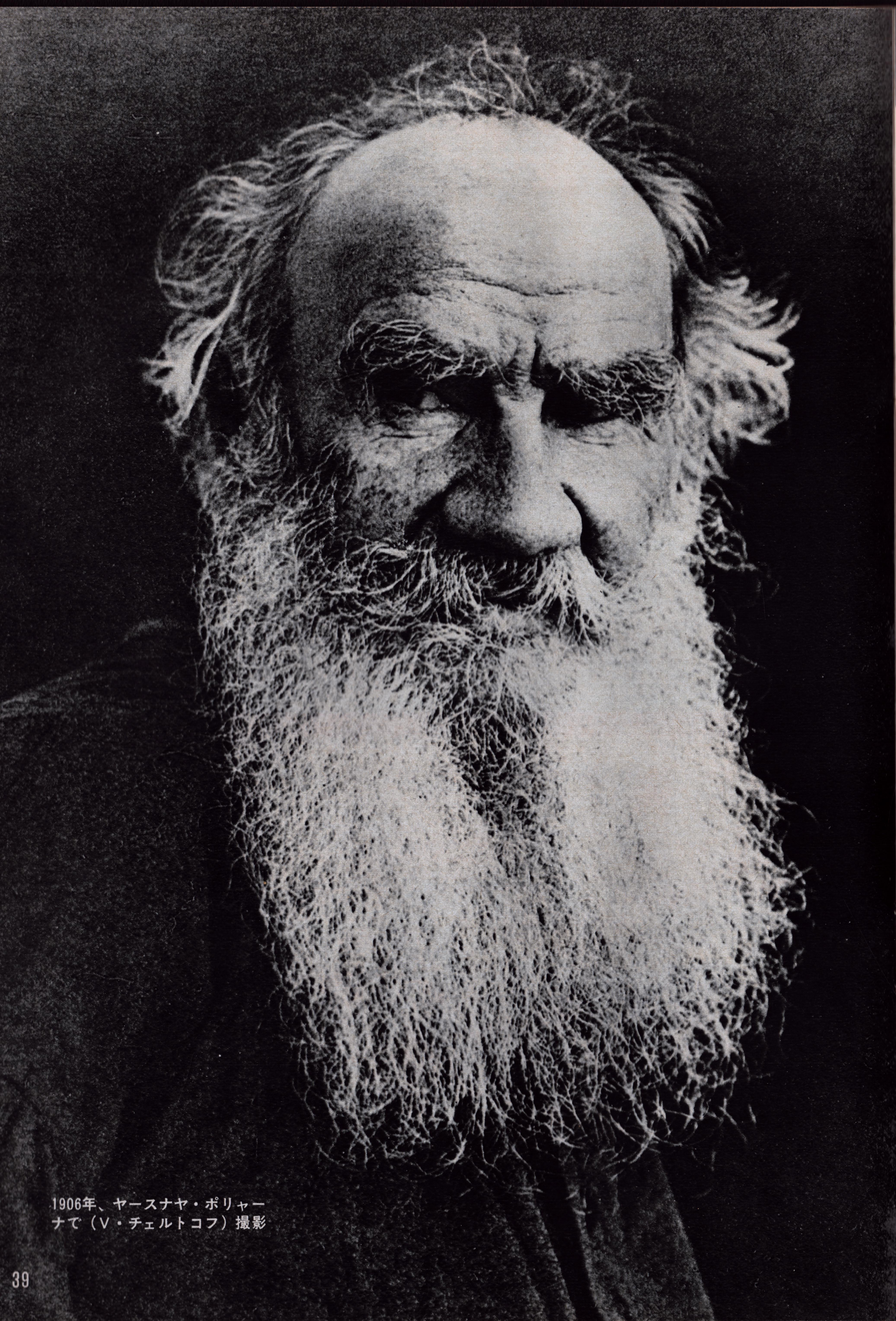
『神父セルギー』の新しい映画化

イーゴリ・タランキン監督がモスフィルム撮影所でレフ・トルストイの中編小説『神父セルギー』の映画化を完了した。ソ連の映画人はこの新作で偉大なロシアの作家の生誕150周年を祝う。

ロシアの映画人が『神父セルギー』の映画化を試みるのは、これが２度目。最初の映画化は60年以上前にヤコフ・プロタザノフ監督によって行われたが、この作品はリアリズムの水準と心理的深さにおいてロシア無声映画の最高峰の一つと評価されている。

タランキン監督はトルストイのこの作品を取り上げたことについて、「『神父セルギー』は規模の点では大きくないが、『戦争と平和』『アンナ・カレーニナ』『復活』その他多くの名作の著者をとらえていた一切の思索、疑惑、探求を含んでいる。作家の強い関心を引いた諸問題――道徳的理想の探求、存在の目的と世界における人間の地位の把握、生と死の問題――は現実性を失わず、今日でも同じように鋭く響いている」と語った。

小説の表題になっている神父セルギーを演ずるのは58歳のセルゲイ・ボンダルチュク。トルストイの『戦争と平和』を映画化（監督）し、主演したことでも知られる名優である。『神父セルギー』での彼の演技は、主人公の困難な道、自分自身との論争、人間的存在の道徳的基礎の探求を情熱的に示している。



1906年、ヤースナヤ・ポリャーナで（V・チェルトコフ）撮影

レーニンのトルストイ論から

レフ・トルストイが死んだ。芸術家としての彼の世界的意義、思想家および伝道者としての彼の世界的名声、そのいずれもが、独特の仕方で、ロシア革命の世界的意義を反映している。

エリ・エヌ・トルストイは、はやくも農奴制度※の時代に、偉大な芸術家として登場した。半世紀以上にわたるその文学活動のあいだにのこしたいくたの天才的作品のうちで、彼は、一八六一年以後も依然として半農奴制状態にあった革命前の旧ロシア、農村のロシア、地主と農民のロシアを主としてえがいた。ロシアの歴史的生活のこの時期をえがくさいに、エリ・エヌ・トルストイは、その労作のうちで非常に大きな問題を提起することができ、非常な芸術的な力を発揮することができたので、彼の作品は世界の芸術文学の第一の地位の一つを占めるようになった。（日本語版全集、第16巻三四一ページ、『エリ・エヌ・トルストイ』から）

※トルストイの最初の印刷された作品（『幼年時代』）は一八五二年9月に雑誌『ソブレメンニク』（同時代人）に載ったが、ロシアの農奴制は一八六一年に廃止された。

※　※　※

彼の口を通じてかたっているのは、すでに現代生活の主人たちをにくんではいるが、まだ彼らと意識的に、徹底的に、最後まで、非妥協的に闘争するところまでいっていないロシアの人民の幾千万の全大衆である。（日本語版全集、第16巻三七〇ページ、『トルストイとプロレタリアの闘争』から）

※　※　※

トルストイの批判は新しくはない。彼は、ヨーロッパ文学にせよ、ロシア文学にせよ、勤労者の味方に立った人々が彼よりずっとまえにかたったことのほかは、なにも言わなかった。しかし、トルストイの批判の特異性とその歴史的意義とは、それが前記の時期※のロシアにおける、しかもまさに農村のロシア、農民のロシアにおける、もっとも広範な人民大衆の見解の破綻を、天才的芸術家だけがもちあわせる力強さで表現しているところにある……

……幾百万の農民の抗議とその絶望——これこそ、溶けあってトルストイの教義をなしているものである。（日本語版全集、第16巻三四九—三五〇ページ、『エリ・エヌ・トルストイと現代の労働運動』から）

※一八六一年の農奴制の廃止と一九〇五年の第一次ロシア革命との間の期間をさす。

※　※　※

トルストイは、ロシアにおけるブルジョア革命の開始期に幾百千万のロシア農民のあいだに形づくられた思想と気分の表現者としては偉大である。トルストイは独創的である。なぜなら、全体としてみた彼の見解の総体が、農民的ブルジョア革命※としてのわが革命の特殊性をまさに表現しているからである。（日本語版全集、第15巻一九一ページ、『ロシア革命の鏡としてのレフ・トルストイ』から）

※一九〇五年の第一次ロシア革命をさす。

※　※　※

トルストイの作品、見解、教えにおける、またその流派における矛盾は実際はなはだしい。一方では、ロシアの生活の比類ない画像を提供したばかりでなく、世界文学の第一級の作品を提供した天才的な芸術家。他方では、キリストにつかれた地主……一方では、資本主義的搾取の仮借ない批判、政府の暴力、裁判と国家行政の茶番劇の暴露、富の増大や文明の成果と労働者大衆の貧困、野性化および苦悩の増大とのきわめて深刻な矛盾の暴露。他方では、暴力による「悪にたいする無抵抗」の神がかり的説教。（日本語版全集、第15巻一九〇ページ、『ロシア革命の鏡としてのレフ・トルストイ』から）

※　※　※

トルストイの見解にある矛盾は、彼の単なる個人的思想の矛盾ではなくて、改革以後ではあるが革命以前の時代におけるロシア社会のいろいろな階級といろいろな層の心理を想定していた、きわめて複雑で、矛盾した諸条件、社会的影響、歴史的伝統を反映したものである。（日本語版全集、第16巻三四三ページ、『エリ・エヌ・トルストイ』から）

※　※　※

芸術家としてのトルストイは、ロシアでさえとるにたりない少数者にしか知られていない。彼の偉大な作品を真に万人の財産とするためには、幾百万、幾千万の人々に無知と、畏敬と、苦役的な労働と、貧困の運命をになわせた社会制度との闘争また闘争が必要であり、社会主義的変革が必要である。（日本語版全集、第16巻三四一ページ、『エリ・エヌ・トルストイ』から）

トルストイの墳墓の地
ヤースナヤ・ポリャーナ

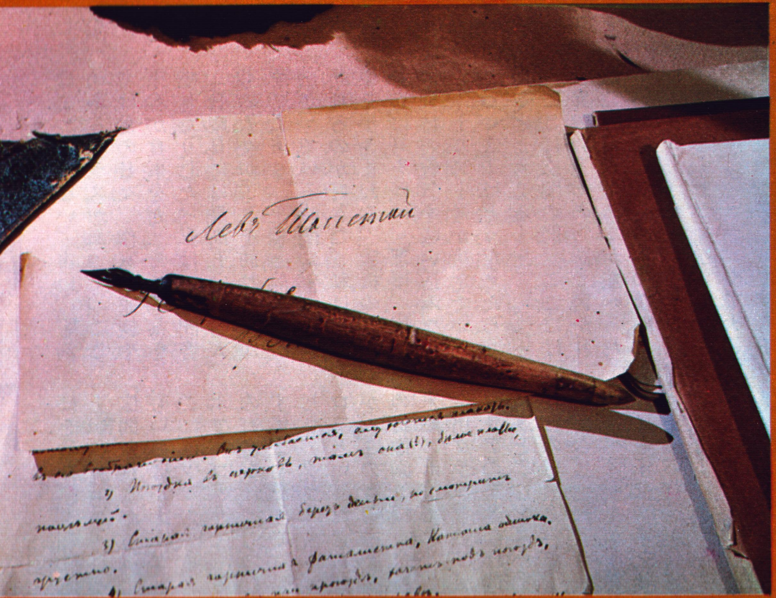
オリガ・ブルガーコワ＝ポノマリョワ
カラー写真 E・カッシン

上右　トルストイがヤースナヤ・ポリャーナで1856年から1910年10月28日まで、わずかな中断を除いてほとんどの期間住んだ家。

上左　このペンでトルストイは数々の名作を書き残した。

下右　トルストイの書斎

下左　書斎にある文机。机の上に置いてあるのはトルストイ愛用の品々。









「わがヤースナヤ・ポリャーナなしには、私はロシアを考えることも、ロシアと自分の間柄を考えることもできそうにない」――レフ・トルストイはこう書いている。

ヤースナヤ・ポリャーナはトルストイ家の父祖伝来の領地で、モスクワの南二〇〇km、ツーラ州にあった。ヤースナヤ・ポリャーナは一九二一年に国の保護区域に指定され、トルストイの邸内には博物館がつくられた。

私はヤースナヤ・ポリャーナをよく知っている。冬にも夏にもここに長く住み、秋、シラカバやカエデの黄褐色の落ち葉に足がくるぶしまで埋まるころ、そこの林をそぞろ歩きするのが好きだった。一九一〇年にトルストイの秘書になった私の父ワレンチン・ブルガーコフとともに、春の花をもとめて、一度ならずヤースナヤ・ポリャーナの森を訪れた。そして話がどんなことに及ぼうとも、ヤースナヤ・ポリャーナでは、結局、話はトルストイのことになった。いまでも、ここはトルストイのことでいっぱいなのだから、当時は別のあり様はまったくなかったのである。

作家の家

作家の家は平凡な、白く塗られた2階建てのもので、注目に値する建築様式のものではまったくない。古い、彫刻のあるテラスがあって、ここでは夏の日々、作家の家族や来客が食事をとったり、茶を喫したりした。私は、訪問客（日曜日には最高五〇〇〇人もの人々がここを訪れる）がすでに去り、平穏と静けさが広がっている時間に、ここを訪れるのが好きだ。私は家の中を歩きまわる。床板のきしむ音に耳を傾け、部屋、部屋の独特の香気を吸い込みながら、トルストイが生きていたころ、ここはどうだったろうかなどと考える……

ここは玄関の間。ここには世界の数多くの言語で書かれた二万冊以上の本が並べられている。これらの本のなかには、ゴーリキーやブーニン、チミリャーゼフやベルナツキー、ロマン・ロランやアナトール・フランス、バーナード・ショウやジョン・ゴールズワージーなど三つの世代の作家、思想家、学者からの献辞のある著作もある。ある人は適切にも指摘した――「ヤースナヤ・ポリャーナの蔵書は完全な世界でできている」と。長年、蔵書の目録作りに苦労した父は、多数の献辞と、トルストイがこれらの本の中に記した線や印は、蔵書に特別の価値を与えていると話していた。

トルストイの父が買ったもので、この作家の長い生涯の時を刻んでいた古い時計のそばを通り、木の階段を二階に上がる。上がったところに大広間兼食堂がある。家の中でもいちばん大きな部屋で、ここにはツルゲーネフ、チェーホフ、ゴーリキーら、ロシアの有名な作家たちが一度ならず集まった。ここへは、レーピン、クラムスコイ、ネステロフといった有名な画家たちが、この家の主とその近親者の肖像画を描くためにやって来た。ホールには2台の演奏会用グランドピアノがある。ロシアの有名な作曲家タネーエフとアレンスキーの指がこれらのピアノのキーに触れ、すばらしいピアニスト、ゴリデンベイゼルが演奏した。トルストイは音楽を聴きながらよく泣いた。かれ自身が言っているように、音楽を「他のどんな芸術よりも深く」愛していたからである。ゴリデンベイゼルは後になって書いている――「かれは、よいものは何でも（たとえばワグナーを）愛するということはできなかったが、その代わり、かれが愛したものはすべてよかった」

大広間のまん中には、家族や客がそのまわりに集まった大きな食卓がある。そして現在でも、まるでいますぐに、ヤースナヤ・ポリャーナの住人たちが食卓につき、落ち着いた会話を始めでもするかのように準備がととのえられている。

この大広間ではトルストイの戯曲『文明の果実』が初めて上演され、またかれが、自分の長編小説『復活』の新しい章を内輪で読んで聞かせたのもここだった。

食堂とならんでトルストイの書斎がある。ここには『戦争と平和』『アンナ・カレーニナ』その他の作品が書かれた文机がある。この机は、部屋から部屋へと一度ならず移された。仕事のとき、作家には絶対の静けさが必要だったのである。机とならんで、小さい、子供用とも思われる安楽いすのあることが、私をふしぎに思わせたことを覚えている。父の話によると、トルストイは近眼だったが、ガラスがかれを原稿から「引き離す」と考えて、一度も眼鏡をかけなかったという。かれは、よりはっきり見えるように、低いいすに座って仕事をするのを好んだ。

父から聞いたことだが、トルストイは普通、朝早くから午後2―3時ごろまで書きものをした。かれはよく繰り返した――作家のなかには二人の人間が住んでいる、一人は創作し、別の一人は批評すると。つけ加えてトルストイは言った――「だが夜だと、批評家は眠っている」。かれはめったに口述せず、自分で書いた。しかも書いたものは非常に読みにくかった。家では、めずらしい競争がよく始まった――判読しがたい原稿を、だれがいちばんに解読するか、というのである。だれにも解読できないこともあった。そのときは筆者のところへ行った。かれは長いあいだ判読しようとするが、結局、顔を赤らめ、困った表情で、「なんとここに書いてあるのか」自分にも解読できないと告白する。つまり構想が記述の過程を追い越していたのである……

壁ぎわに古風な、油布でおおわれてはいるが、ありし昔は皮張りだったソファがある。このうえでトルストイをはじめかれの弟や妹、そしてかれの子供たちが生まれ、またかれが好んで休息をとったのである。この「銅釘が打ち付けてある、皮製の使い古されたソファ」のことを、トルストイは多くの作品のなかで書いている。トルストイの死後、妻のソフィア・アンドレーエブナは、ヤースナヤ・ポリャーナを訪れるものにこのソファを示しながら、「これが運ばれてくると、みなは家族がまた増えるのだということを知るのでした」と語った。トルストイは人間の生と死の偉大な秘密について迫真の描写をしている。『戦争と平和』のなかで、アンドレイ公爵夫人（若公爵夫人）の出産を描いたくだりに次のような個所がある――「5分後、公爵令嬢は自室に居て、何か重いものを運ぶ物音を耳にした。のぞいて

見ると、召し使いたちがアンドレイ公爵の書斎にあった皮製のソファを何かのために寝室へ運んでいるのだった。運んでいる人々の顔には何か厳粛で静かなものがあった……」

ヤースナヤ・ポリャーナの家のなかは静かである。窓の外では、たそがれが濃くなっている。寝室には、作家の着物――外とう、帽子、仕事着、部屋着などがかかっている。かれの手で消されたろうそくが立っている。部屋の主人公は、ちょっとの間出て行って、間もなく帰って来るような感じである……

父は自分の回想録に書いている――「かれの秘書としてトルストイ家に住み込んだとき、私は23歳、レフ・ニコラエビチは81歳だった。しかし心から言っておかねばならないが、われわれの間のこのような大きな年齢差を私が感じたことは一度もなかった。私の言っていることを誤解しないでもらいたい。私はトルストイの天才と英知を崇拝していたが、同時に老齢のかれが若年の私を何につけても理解していることを感じていた。

〝理解している〟というだけでなく、何ごとにつけ対等の者として私に〝共感〟するのである。そして他方、トルストイの思考の全構成、その関心と見解は、なんだか本能的に親しみやすく、〝自分のもの〟として理解できた。それほどトルストイの意識はあのように年を取っていても、若くて力強いものだった。それは感情の力、生活のあらゆる印象にたいする強い感受性、理知の力と創造的能力において、まったく若者のものだった。

レフ・ニコラエビチには35歳と45歳の成人した、ひげを生やした息子たちがいて、かれらはとうの昔に家族から〝分家〟して、ロシアの別々の町と県で一戸を構えていた。この息子たちが1日か2日、〝客として〟ヤースナヤ・ポリャーナを訪れることがあったが、かれらはいつも、自分たちの父親よりも老けているように見えた。私には二人は少し怖い感じだった。一方、レフ・ニコラエビチは、私とでも、だれとでも、対等につき合っていた」

トルストイは生活をその奥底から理解しようと努めた。そしてこのような奥底を庶民のなかに、庶民の思考と希望のなかに発見しようとした。かれは近在の村からやって来た農民たちとの対話に長時間を過ごした。巡礼や乞食と出会うために、またかれが心から尊敬し、賢明とはどういうことかをその人たちから学んだとかれが考えていたロシアの農民たちが、何によって生


作家のマクシム・ゴーリキーと（1900年、ヤースナヤ・ポリャーナ）


秘書のニコライ・グーセフと（1909年、ヤースナヤ・ポリャーナ）


馬上のトルストイ（1908年、ヤースナヤ・ポリャーナ、V・チェルトコフ撮影）

2階の大広間兼食堂







2階の大広間兼食堂の一隅



上左　1859年から1862年までトルストイの創立した農民子弟のための学校があったヤースナヤ・ポリャーナの別館

ソフィア夫人の部屋

公園の中を通ってボロンカ川へ通じる小道

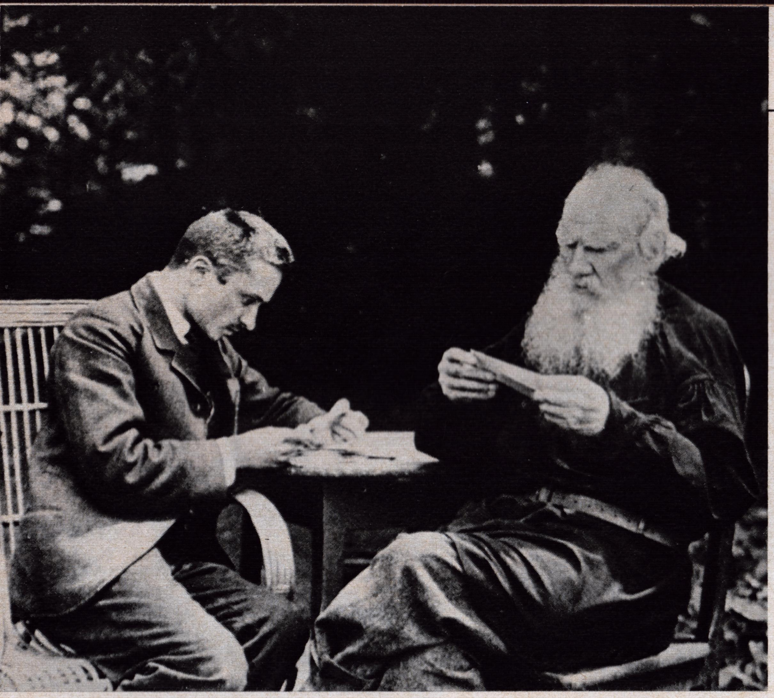


トルストイの墓



きているかを知るために、しばしば旅に出た。そして庶民の生活をよく知れば知るほど、功なくして得たぜいたく、とかれが考えていた自分の家が、ますますかれを苦しめるようになった。トルストイは、夫人あての手紙のなかで、ヤースナヤ・ポリャーナからの自分の退去について次のように釈明している——「なにはともあれ、私はこれまで生きてきたようなぜいたくな条件のもとで暮らすことはもはやできません。そして私の年齢の老人たちが普通に行っていることをするのです。つまり自分の生涯の最後の日々を孤独と静寂のなかで生きるために俗世間の生活から去ってゆくのです……」（一九一〇年10月28日に、83歳のトルストイはヤースナヤ・ポリャーナからひそかに去っていった。途中、汽車のなかでかれは肺炎を病んだ。アスタポボという小さい鉄道駅の駅長が、トルストイを自分の家に運びこんだ。ここでトルストイは11月7日に死んだ）。

トルストイの日記には次のように書かれている——「不平等のために、まわりを赤貧に取り巻かれたわれわれの生活の豊かさとぜいたくさのために、ほとんど身体的ともいえる苦しみを日増しに味わっている。この不平等を少なくすることができない。ここに私の生活の秘められた悲劇性がある」。一八九六年の『現存の体制について』という論文で、トルストイはこう書いている——「資本主義体制は廃止され、社会主義体制に取り替えられねばならず、軍国主義体制は軍縮と仲裁（国際仲裁裁判所）に替えられねばならない……要するに暴力は廃絶され、人々の自由と愛の連合に替えられねばならないのである」。しかしトルストイは、当時としては余りにも激越な思想を吐きながらも、いっそう公正な社会体制をめざす闘争の方法を見出すことができず、この点に「自分の生活の悲劇性」がある、と考えたのである。



トルストイと秘書のワレンチン・ブルガーコフ（1910年、ヤースナヤ・ポリャーナ、ブルガーコフ家の家族アルバムから）



▶ 農民の子供たちと（1909年、ヤースナヤ・ポリャーナ、V・チェルトコフ撮影）

古風な公園

ヤースナヤ・ポリャーナの屋敷は、いまは保護区になっており、ここにはトルストイの家、文学博物館、特別陳列室などがあるが、どの部屋も、偉大な作家にまつわる思い出をよみがえらせる——すべてが、最も偉大な芸術的インスピレーションに照らされたトルストイの晩年を物語っているのである。

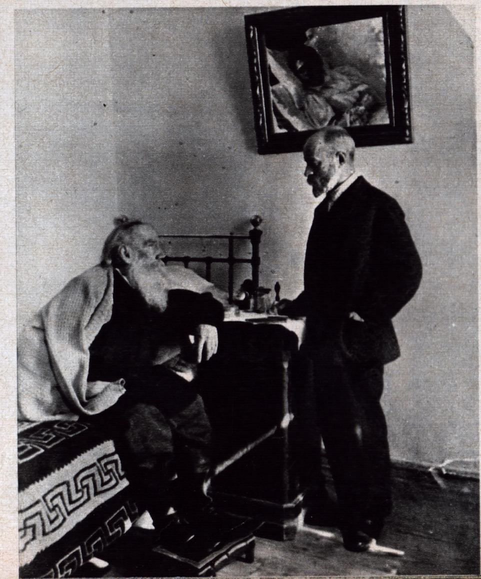
公園も、森も、果樹園も、浮き草の生い繁った古池も、すべてがトルストイ存命中のままである。ここには、この作家の手で移植されたシラカバの森があり、そして『アンナ・カレーニナ』に出てくるボロンカ川のそばの草地がある。ヤースナヤ・ポリャーナの風景の魅力は比類のないもので、トルストイがあのように愛したのも、なるほどとうなずける。一九〇〇年に屋敷を訪れたゴーリキーは後に書いている——ゴーリキーが雨模様の日、この屋敷の主人公とシラカバの林を散歩した時、トルストイは「若者のように溝や水溜りを跳び越え、小枝から雨の滴を自分の頭上にはらい落とし……シラカバの湿った柔らかい幹をやさしい手つきで撫でた」

トルストイとともに乗馬散策をしたという父の次のような話も思い出される——「トルストイは特別の馬乗りだった。かれは当時はまだヤースナヤ・ポリャーナのまわりにたくさんあったうっそうとした森の奥深くに分け入ったり、人々に気付かれない、それから先どこへ通じているのか分からない小道へ急に方向を変えたり、溝や堀を跳び越えるのが好きだった。ある時われわれが長い時間道に迷って、疲れはてて帰って来たときなど、トルストイは大変にご機嫌だった……」

公園の一隅に保存されている、トルストイお気に入りの、シラカバの幹で作られたベンチのわきを通って、屋敷の端の境界まで行く。高くもない塀の向こう側は20世紀である。遠くに巨大なノボツーリスキー製鉄工場の煙突が見え、街道を自動車が走っている。とところで、屋敷からほど遠からぬところに墓地がある。ここにはトルストイ夫人、トルス


トルストイとソフィア夫人
（V・コルニュシン撮影）


孫のソーニャ、イリヤと
（V・チェルトコフ撮影）


◀ヤースナヤ・ポリャーナの医師ドゥシャン・マコビツキーと（V・コルニュシン撮影）

トイの子供、おい、孫たちが葬られている。これはトルストイ家の墓地である。私は、12年前に死んだ父の墓に花をそなえるためにこの地を訪れるときは、必ずトルストイ家の墓を訪れることにしている。荒れるにまかせられたもう一つの墓にも私は花をそなえる。言い伝えによると、『アンナ・カレーニナ』のヒロインのモデルとされた婦人の遺骸がここに眠っているという……


書斎のトルストイ（1909年、ヤースナヤ・ポリャーナ、V・チェルトコフ撮影）

ひきつづき園内を散策する。そばを赤いネッカチーフの少年少女が通って行く。トルストイ記念ヤースナヤ・ポリャーナ寄宿学校の生徒たちである。第2次世界大戦後、すばらしい新校舎がこの学校のために建てられた。子供たちを私はじっと見る——これは、トルストイ伯爵があんなにも多く書き記し、その子供たちの学習の手助けをしたあの農民たちのひ孫たちではあるまいか。

……立ち木が高くそびえる並木道を通ってトルストイの墓へ行く。

有名なドイツ人作家ステファン・ツワイクは書いている——「これは、世界で最も美しい、最も印象的で感動的な墓である。林のなかの草の生い茂った小さい長方形の丘、十字架もなければ墓碑銘もない。それどころかトルストイの名前さえない。感動的な無名の墓、その上を風のささやきだけが吹きぬけている…」

そう、それはカシの古木、ボダイジュ、ヤマナラシなどで囲まれた緑の丘にすぎない。切り取ったばかりのモミの小枝で一面におおわれている墓の上には、だれかが真紅の2本のカーネーションを置いていった。墓のうしろは斜面で、谷間に通じている。墓のまわりでは秋の木の葉がかさかさと音を立て、小鳥が鳴いている……

＊　＊　＊

レフ・トルストイはその生涯の大半をヤースナヤ・ポリャーナで過ごした。ここはかれの「生まれ故郷であり墳墓の地」であった。ここでかれは、それなくしては世界文化を考えることができそうにない作品の数々を書いたのだ。

世界の作家、トルストイを語る

彼はわれわれの良心

「トルストイは、けっして特権的な思想家たちに話しかけなかった。ごく普通の人々のために、善意ある人々に語った。彼はわれわれの良心である。彼はまさに、われわれありふれた人間が考えていること、われわれが告白するのを恐れていることを語っているのである」

ロマン・ロラン（フランス）

トルストイのように書けたら！

「私はふたたび、執拗に読書に取り組んだ……当時私がもっとも尊敬していたのは、芸術家であり、『クロイツェル・ソナタ』と『イワン・イリイチの死』の作者であるトルストイだった……私はこれらの作品の中で展開された光景の迫真力にショックを受け、感嘆した。私のからだの中を突然、作家になるというのは何とすばらしいことだろう、トルストイのように、自分の言葉に全世界が耳を傾けてくれるように書けたら！　という思いが光のように走った」

セオドー・ドライサー（アメリカ）

あなたの作品はすべて読んだ

「私は、英語に翻訳されたあなたの作品はすべて読んだと思っています。私の見るところでは、あなたの『戦争と平和』と『復活』は、これまで読んだものの中でもっともすぐれた、もっとも包括的な小説です」（一九〇六年11月21日付のトルストイ宛の手紙から）

ハーバート・ウェルズ（イギリス）

驚くべき勇気

「ツァーリズムの憎むべき圧制を非難したトルストイの驚くべき勇気こそ、私を彼に引きつけたのである。もちろん、貴族であり、世界的な名声を持つ人物を簡単には迫害できなかった。それにしても、トルストイは身の危険をおかしてやったのである。彼の言葉は雷鳴のように全世界に響きわたった」

トルストイは魅惑的な謎

「トルストイは、魅惑的な謎である。芸術家と改革者がこのように独特に結びついている人物は、ほかには考えられない……もし〝これまでに書かれたものの中でもっとも偉大なもの〟というレッテルを貼ることができるような小説を挙げるとすれば、私は『戦争と平和』を選ぶだろう」

ジョン・ゴールズワージー（イギリス）

輝きをます不滅の星

「文学の明星の中で、年を追って明るくなっている一つの不滅の星がある。この人間——明星——は、民族から言えばロシア人だ。彼は、レフ・トルストイという名でわれわれに知られている」

ショーン・オケーシ（アイルランド）

私にとって良心の声

「トルストイはバルザックと同様に、一つの完全な世界をつくった。しかもそれは〝約束の世界〟であり、われわれが生涯のあいだに何度となく立ち帰る世界である……トルストイはつねに私にとって、私の良心の声の一つだった。すでに私の青年時代にトルストイは、世界を変えるためには、人間を変えること、自分自身を変えることが大切だと、私に教えた」

フランソワ・モーリアック（フランス）

全人類の天才

「トルストイは私には、作家の技量から見て巨人のようであり、ヒューマニズムの技量では、さらに大きな巨人のようだった。何よりもまず、彼は偉大であり、スケールの大きな人間である……彼の天才は、一人の強力な人物を通じて現された全人類の天才であった。おそらく彼は、それを自覚していたのだろう。だからこそ、世界各地の人々の心を傷つけたすべてのことが、彼の心をも深く傷つけたのである」

ウイリアム・サローヤン（アメリカ）

時代を方向づける知者

「彼はわれわれにとって、単に天才的な作家だっただけではない。それぞれの時代を支配するのは、その時代によって尊敬され、その時代の思想を方向づける幾人かの自由な知者である。トルストイは、このような導きの光の一つだった……まことに、われわれが文学の中で愛するすべてのものを、すでにトルストイは持っていたのである」

アンドレイ・モーロア（フランス）

すべての歴史小説も顔色なし

「もしキューバ革命が遅かれ早かれ時代に反映される運命にあるとすれば、歴史家であり、芸術家であるトルストイが『戦争と平和』を創作した時に用いた方法をよく検討することほど、時代の創造者の将来にとって実り多いものはない。『戦争と平和』は、他のすべての歴史小説がどれほど賛辞を浴びたものであれ、これと比べれば形式、内容ともにすたれたもの、ニセ物と思われるほどの作品なのである」

アレホ・カーペンター（キューバ）

現代人に不可欠の源泉

「現代人にとってこれほど必要な他の源泉が、この世にあるかどうか、私は知らない。私個人はつねにトルストイを、その実例が私の生きるのを助け、時にはこの半世紀も私を取りまいていたものを理解するのを助けてくれる他の巨人たちと同列に置いている」

ヤロスラフ・イワシケビチ（ポーランド）

翁には歯が立たぬ

「手始めに、私はツルゲーネフ氏をあっさり打ち負かした。それからせっせとトレーニングを積んで、モーパッサン氏を打ち負かした。私はスタンダールとは2度引き分けたが、2度目は私の方が優勢だったと思っている。だが私が気でも狂うか、どえらく成長でもしないかぎり、だれも私を対トルストイ戦のリングに上げてくれないだろう」

アーネスト・ヘミングウェイ（アメリカ）

ソ連におけるトルストイの著作

「私の心からの希望は、多くの大衆、働く勤労者を私の本の読者にし、私の思想を彼らの決定的な審判に付すことである」とレフ・トルストイは語っている。しかし革命前のロシアでは、トルストイの著作はわずかな部数しか出版されなかった。たとえば、一八六四年に出版された2巻ものの『トルストイ作品集』は、発行部数わずか三〇〇〇部だった。

＊　＊　＊

多くの大衆に読んでもらいたいという作家の夢は、一九一七年の10月革命後に初めて実現した。革命後の一九一八年にははやくも、トルストイの著作が出版された。ソビエト政権の60年間に、トルストイの著作はソ連で二四四五回出版された。これらソ連と世界の98の民族の言葉で出版された作品の総発行部数は二億部以上。トルストイの長編小説はソ連で、たとえば『戦争と平和』は二三〇回（総発行部数一三七九万九〇〇〇部）、『アンナ・カレーニナ』は一四二回（同九〇六万九〇〇〇部）、『復活』は一〇三回（同六四六万四〇〇〇部）発行された。

＊　＊　＊

一九二八年から一九五八年にかけて刊行された最初のトルストイ全集（全90巻）は、大がかりな原文考証と学術的研究調査の成果である。

トルストイの他の著作も再三出版された。その中には、発行部数三〇万部の20巻ものの作品集（一九六〇年から一九六五年にかけて刊行）もある。

トルストイの作品集はウクライナ語、グルジア語、レット語、アルメニア語、トルクメン語、エストニア語で出版された。アゼルバイジャン語の作品集の出版も始まっている。

＊　＊　＊

レフ・トルストイ生誕一五〇周年を記念して、ソ連の文芸図書出版所は作品集の新版（全22巻）を準備した。この記念日のために発行される書籍の総発行部数は四〇〇〇万部にのぼる。

トルストイと徳富蘆花

文学博士 アレクサンドル・シフマン

『トルストイと日本』はソ連の文学研究者アレクサンドル・シフマン著『レフ・トルストイと東洋』のなかの一章であるが、A・シフマンはこの章のなかで、豊富な資料をもとに、日本の文学活動と社会思想の発達にトルストイの作品が及ぼした影響や日本人とトルストイとの出会いについて述べ、日本人の手紙を引用し、トルストイの作品の日本訳などについて語っている。以下はこの著書のなかのトルストイと徳富蘆花との交わりについて述べた部分（要旨）である。

トルストイへの傾倒

レフ・トルストイの日本の客や文通者の中に徳富蘆花がいた。徳富のトルストイへの傾倒崇拝は、ロシアの文豪の芸術作品と道徳・倫理観にたいする、日本の知識人の進歩層の態度を鏡のように反映していた。

一八九〇年、徳富は雑誌『国民之友』に大論文『露国文学の泰斗トルストイ伯』を発表し、一八九七年には兄（蘇峰）の主宰する出版社（『民友社』）から『トルストイ』（『12文豪』の第10巻）を出版した。この著書は彼のその後の作家としての運命に決定的な役割を果たした。徳富はトルストイの作品の研究を通じて、トルストイの倫理・道徳観だけでなく、トルストイの芸術作品のリアリズムの原則をも摂取した。それは彼の最初の長編小説『浪子』（『不如帰』）にすでに多分に現れた。

一八九九年に徳富蘆花はトルストイの『コサック』を英語版から翻訳した。

徳富のその後の作品、とくに長編小説『黒潮』（一九〇二年）には、彼がトルストイから摂取した最良のもの、つまりヒューマニズムと市民的熱情、人生の真理にたいする忠実さが、具現されている。同時に徳富の作品には、彼が経験した思想上の悩みが反映されている。当時彼は自分の師トルストイからの助言の必要をとくに強く感じていた。日露戦争が終わるのを待って早速彼は、自分を悩ましている疑問を解決し、自分の立つしっかりした地盤を見出すために、はるばるヤースナヤ・ポリャーナへ旅立った。

これより先の一九〇六年1年21日、徳富は自分の精神的経験、疑惑、思索を誠意をもって、トルストイに書き送った。この手紙は世界文化の二人の偉人の個人的交際のきっかけをつくった。その手紙の断片を引用しておこう。

「親愛なる先生、日本にあなたの崇拝者が少なからずおり、しかもその数が日ましに増えていることは、きっと先生も御存知と思います。あなたの御生活と作品はわが国の知識人、とくに青年に大きな影響を与えています。われわれは現在革命に遭遇しているロシアにたいして、心からの共感をもっています。日本もさまざまな改革に直面しており、精神的復興の過程を体験しなければなりません。新しいロシアと新しい日本の誕生のために祈り、この目的達成のために働きたいと思います…

私に間違いがなければ、私が以前にお送りしました拙作2編を、お受け取り下さったことと思います。日本語の本は、私が書いたあなたの御生活と作品の概要で、一八九七年に発表したものです。第2の本は私の長編小説（『浪子』）の英訳です。これはとても貧弱な見本なので、これで日本文学全体を判断なさらないよう望みます。なお、この小説は私の生活の変転矛盾の時期の産物なので、道徳的に見てとても弱点があります」

この徳富の手紙は2月にヤースナヤ・ポリャーナに着いた。トルストイはこの手紙を日記の中で「とても気持ちのよい手紙」と特徴づけた。これより少し前、トルストイは徳富が送った本を受け取り、英訳の『浪子』を読んで、日本の上流社会の生活を正しくえがいている点が気に入った。

トルストイは何回か徳富に返書を書こうとしたが、そのつど何かに妨げられてついに書き終えなかったが、ついに一九〇六年4月25日、徳富に手紙を送った。

待望のトルストイの返書は徳富の手に届かなかった。かねてからヤースナヤ・ポリャーナ訪問を夢みていた徳富は、急に決心して、何の予告もなく旅支度をした。

ヤースナヤ・ポリャーナの訪問

一九〇六年6月30日、徳富はヤースナヤ・ポリャーナに着き、5日間滞在した。後日彼が回想しているように、これは彼の生涯の最も幸福な日々であった。トルストイは大よろこびで徳富を迎え、多くの時間と配慮を彼のために割いた。食事のときは必ず彼を自分の横に座らせて質問をあびせたし、ヤースナヤ・ポリャーナの近辺を案内してまわった。また書斎で何時間も話しこんだりした。徳富はとてもひかえ目な、品位のある態度をとり、ヤースナヤ・ポリャーナの全住人に好かれた。医師のドゥシャン・マコビツキーは徳富のトルストイ邸滞在を、日記の中に次のように書いている。

「……けさ、レフ・ニコラエビチ（トルストイ）が朝食を待ちながらニレの根元に座っていたとき、私は徳富を呼びにいった。彼は眠っていた……徳富がまだ出てこない間に、レフ・ニコラエビチは朝徳富と散歩をして、草刈りをしていた百姓のところへ立ち寄った時の話をした。徳富はあんな大鎌を見たことがなかった。彼は日本では小さい鎌（多分普通の鎌だろう）で、こういうふうに刈るんですと、そのしぐさをやってみせた（レフ・ニコラエビチはその敏しょうな動作をわれわれに繰り返し見せてくれた）。そのあと、レフ・ニコラエビチが百姓から大鎌を借りて草を刈ると、徳富もその後に続いて刈った。しかもうまく。日本人の器用さには驚いた！

朝食後、レフ・ニコラエビチは徳富と馬車で散歩に出かけた。2時半に出かけて、6時15分にやっと帰ってきた。これはレフ・ニコラエビチが徳富を水浴につれていったからだ。徳富の水浴時間は長かったが、それだけでなく、彼らは先に水浴していた者が水から上がるまで待たねばならなかったのだ。レフ・ニコラエビチは徳富のこの満足感を奪いたくなくて、ひどく帰りが遅れてしまい、自分の食後の午睡の時間をつぶしてしまった」

もう一つ、幾分単純な感じはするが、この二人の出会いについての興味深い証言がある。当時ヤースナヤ・ポリャーナにいたレフ・ニコラエビチの姪エリザベータ・ワレリヤノブナ・オボレンスカヤは、一九〇六年7月4日、孫のY・N・マクラコフに次のように書き送った。

「ヤースナヤ・ポリャーナで私は一人の日本人を見ました。その人はクリスチャンで、おじいさんの所へ宗教の話をしにきたのです。姓は徳富で、作家です。なんでもその人のある長編小説がロシアの雑誌にのったことがあるそうです。私たちはみんな徳富がとても気に入りました。とてもいんぎんで、心づかいが行き届き、来た時は背広姿でしたが、ヤースナヤ・ポリャーナでは始終日本の着物に幅の広い帯をしめて、いつも扇子を手にしていました。その人はおじいさんと水浴に行きました。そして……その人が立ったあと、私たちは浴室の壁に鉛筆で日本語の詩とその英訳が書いてあるのを見ました。詩はボロンカ（水浴した川の名）をうたったものでした」

『順礼紀行』の出版

徳富は祖国に帰ると、旅行記『順礼紀行』を出版した。その中で彼は自分の旅行を、とくに客としてトルストイ邸に滞在した時のもようを、精彩ある筆でえがいている。日本の作家が半世紀前にトルストイへ送ったこの本は、ヤースナヤ・ポリャーナの図書館に保存されている。その中から若干の断片



トルストイと徳富蘆花、トルストイの末娘アレクサンドラ（1906年6月、ヤースナヤ・ポリャーナで）

を引用しておこう。

「静かなるかな露西亜の夏の朝。日は早や高けれどもきらめかで睡げに、遠き林には靄迷ひ……池を周りてや、下れる所樺の木の蔭に青塗の狭き板の腰掛あり。余は暫し憩はむと、コルクのヘルメット帽を枕に、インヴアネスうち被りて仰向けになり、うと〳〵と何時しか夢心地になりぬ。

良久しくして人の近寄る気はひあり。つとめて重き瞼を開けば、一人の老翁吾側に立てり。庭園の掃除に来し百姓爺かと思ひしは一瞬、まがふべくもあらぬ翁の顔に、刎ね起きるより早く「お、君はトキトミ君」と翁は歯ぬけて子供の如く可愛ゆき口もとに笑を崩づして手を差伸べ、余は「ああ、あなたは先生」と緊と握りし其手は大にして温かなりき……

翁の顔を見れば、顔の色は紅を帯びたれど、髪鬚灰白の色となりて、眼少しうるみ、歯ぬけ、思ふにまして老ひたり。翁は満七十八なり。我等は今立話したる彼腰掛の辺を去りて、翁は前に立ち、余は従ひて、径を下り、又一つある小池の辺を話しつ丶行く。白つぽき鼠フランネルのだぶ〳〵したる着物に、黒き革の帯して、縁広の白き夏帽をかぶり、自然木のステッキをつきたる姿は何処までも画に見文に読みたる其ま丶の翁也」

徳富のこの本のなかで最も貴重なのは、彼とトルストイとの会話の記録である。レフ・ニコラエビチは徳富に興味をもって日本国民の生活や文化、文学、詩についてたずね、そのあと逆に相手の多くの質問に答えた。徳富は文学にかんするトルストイとの対話を次のように書いている。

「余曰く、翁近代の露国小説作家の中何人に許す乎。翁曰く、夫れドストイエーフスキー乎、君彼を読みしや。罪と罰、罪と罰を読み候。翁頷きて曰く、罪と罰、甚佳甚佳。ツールゲネフ如何。翁の曰く、ツールゲネフ甚優美、然も深からず。ゴンチャロフ如何。翁曰く、亦同じ耳。ゴルキー、メレジコウスキー、チエホッフの徒如何。翁曰く、ゴルキーはオあって学なく、メレジコウスキーは学あってオなし、チエホッフ、彼は大なるオあり。……談は転じて翁の著作に入りぬ。余曰く、翁の文学的作物の中、翁自ら尤も何をとる乎。翁や丶考へて曰く、先づ『戦争と平和』ならん。余曰く、翁の之を取る所以は寧露国真史としてならん。翁の曰く、然り」

徳富とトルストイの会話のなかでは、露日関係のテーマもたびたび取り上げられた。トルストイは日本国民とその歴史、文化について、また日本政府の政策についてたずね、徳富はこれらの質問に誠心誠意答えた。ある晩徳富は日本の詩人たちの詩をトルストイに暗唱して聞かせ、これらの詩のすぐれたものの中には、ロシアの詩人の詩と同じ善、公正、平和の思想が脈打っていると強調した。トルストイは日本について次のように語った。

「余は昨年日本俘虜の過ぐるを見たり、皆実に善良なる顔なりき、日本人の周到を以てして自家の使命を覚悟せず、唯欧米の己に腐朽せむとする皮相文明の跡を趁ふの看あるは憾む可し、君よく聴け、露西亜にせよ日本にせよ、東洋民族（翁は露西亜を欧州に加へず）には特有の使命あり、其は人生の真義を知り人間の真生活をなすにあり、彼西欧諸国は器械的におのが仕出来したる所謂文明をば誇れども其は殆んど何ものにもあらず、東方の民は西人の跡を趁はず自家の天地を拓かざる可からず……君は先日日本の務む可き所及び日露の間に長く親和の交を結ぶ所以を問ひぬ、其は他なし同一目的に向って同一覚悟を以て進むにある耳」

蘆花の手紙

最初徳富はロシアから西欧に出て、イギリス、フランス、ドイツおよび米国を訪れるつもりだったが、ヤースナヤ・ポリャーナでのトルストイの話に感化されてその計画を取り止め、自分の師の考えを早速実行に移すために帰国した。日本帰国後徳富はトルストイあての最初の手紙に次のように書いた。

「親愛なる先生

お客好きの貴家を辞去してからもう3カ月になりますが、今日初めて先生に手紙をしたためます。まず申し上げたいのは、先生にお会いできたことは私にとってとてもしあわせだったということです。先生にお目にかかり、話されることを聞き、また自分の胸きんを開くこと——これはみな、幾万露里も私にはただの一歩と思われるほどの至福でした。たった5日間でしたが、この5日間は私の生涯の最もしあわせな思い出となるでしょう。

……7月19日にモスクワを立って、8月1日にウラジオストクに到着し、そこから汽船で敦賀へ、それから汽車で東京へ向かいました。東京には8月4日の朝着きました。こうして、モスクワから東京まで全部で17日かかりました。

先生がチェルトコフ氏を通じて私にお送り下さった貴著『世の終わり』『ただ一つの必要なもの』『大罪悪』がもう拙宅に来ていたので、早速それらを読みだしましたが、すべての本質的な問題で、私が先生と同意見であるのを感じうれしく思いました。『世の終わり』はすでに翻訳ずみで、東京のある新聞にのることになっています。（私はこれに無関係です）。私は『賢者の毎日の思想』を翻訳する人をさがしています。貴著の多くはすでに翻訳ずみか、あるいは翻訳中です……

親愛なる先生、冬が近づいています。御自愛下さい。近くまた手紙をさし上げることにして、きょうはここで筆をおきます」

不思議なことに、これきりで徳富とトルストイとの文通は、何らたいした理由もなく中断してしまった。レフ・ニコラエビチは自分の日本の友人について最良の思い出を抱いていたし、徳富もヤースナヤ・ポリャーナから、その主人にたいする愛と感謝の気持を抱いて出立していった。文通が途絶えたのは、徳富蘆花が自分のその後の文通でトルストイをわずらわすことがあっては、というこまやかな心づかいとひかえ目な気持ちのせいとしかとりようがない。これが唯一のもっともな理由だといえよう。

トルストイの死後、徳富は自分の中編小説や論文のなかで、ヤースナヤ・ポリャーナで過ごした日々のことを、何度も敬けんの念をこめて追想している。たとえば一九〇八年にトルストイ生誕80年祭の『国際トルストイ記念文集』のために書いた『日本からの反響』の中で、徳富は親愛の情をこめて次のように書いた。

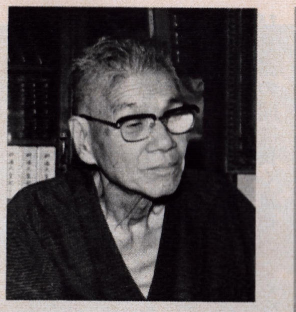
「親愛な家のテラスで〝さようなら〟をいってからもう2年になる。

こうしてペンをもっていると、蔓性植物がからみ、きらめくランプに照らされた、明るいベランダの幻影が眼前に浮かぶ。師は片手を扉の把手にかけ、うしろを振り向き、私にほほえみながら、立っている。別れがつらく、私もじっと立っている。師は私に向ってほほえむ。師のそのほほえみが、それからの七三〇日という月日の霧を通し、われわれをへだてる一万露里を通して、私に見える」

徳富は死ぬまで師トルストイのヒューマニスチックな遺訓——諸民族の兄弟愛、平和と親善の遺訓にあくまでも忠実であった。

日本におけるトルストイ

——木村　毅　氏に聞く



トルストイが日本に及ぼした影響の研究で知られる評論家の木村　毅氏にいろいろお聞きした。木村氏は一九一九年から刊行された日本最初のトルストイ全集（春秋社）の編集者としても活躍された。

日本にはいつ、どのような形でトルストイの作品が入ってきたのですか？

——明治16年（一八八三年）にプーシキンの『大尉の娘』が伝わったあと、明治20年（一八八七年）に『戦争と平和』の一部が『泣花怨柳北欧血戦餘塵』という題で出版されています。これが日本でトルストイの作品が紹介された初めです。訳者は森　體という岡山の人です。

トルストイが日本へ紹介された後、その思想がしだいに日本の知識人に影響を与えるようになるわけですね。

——『戦争と平和』が紹介されてから10年ほどのあいだに、トルストイはかなり紹介されるようになりました。トルストイの伝記がまとまって出されたのは、日本が最初です。フランスやイギリス、ドイツにもまだトルストイの伝記のないときに、日清戦争の後ですが、徳富蘆花が『トルストイ』という本を書いています（一八九七年）。

日本人はロシアの農民に非常に親しみを持っていました。そういうこともあって、トルストイの影響が日本に入ってくるのが非常に早かった。日清戦争の前に小西増太郎がロシアへ行ってトルストイの弟子になっていますし、日清戦争後には徳富蘇峰が訪ねて行っています。トルストイの思想が日本人の膚にとても合ったのでしょう。

トルストイから特に大きな影響を受けた人たちと言いますと……

——一番初めは、徳富蘆花です。ロシアと日本が戦争などするのは、けしからんと、日露戦争が済んでからすぐ、ヤースナヤ・ポリャーナのトルストイに会いに行きました。この訪問のことをまとめたものが、彼の『順礼紀行』です。これは非常に面白い本です。蘆花は日本に帰ると、東京郊外の糟谷村というところに隠栖（いんせい）して、百姓を始めました。これが日本の最初のトルストイヤンです。

このような人は、ちょいちょいありましたが、後で有名になった人には、トルストイの理想実現をめざして宮崎県で「新しき村」の建設を始めた武者小路実篤、それから有島武郎のように、トルストイに心酔して自分の北海道の財産をみな百姓に分けた人もありました。このような人は、ヨーロッパやイギリスにはいないと思います。これはやはり、日本独特のトルストイの受け取り方ではないかと思います。

それから、日本では『トルストイ研究』という雑誌が出ていました（一九一六年発刊）。このような月刊雑誌が出ていたのは、日本だけだという話です。この雑誌の主幹だった加藤武雄は後に新聞小説家として有名になった人ですが、トルストイが大変好きで、こういう雑誌を出したのです。日本人がトルストイのことをすみずみまで知るようになったのは、この雑誌を通じてです。石田三治の独創的な評論などによってこの雑誌は非常に高い権威を持っていました。『トルストイ研究』はじきに廃刊になると思われていたのが、2年以上も続いたんですから、いかに日本人がトルストイを好きだったか、これでも分かると思います。

また、トルストイの名を非常に通俗的に広めたのは、〝カチューシャ〟の芝居です。これは島村抱月が明治35年（一九〇二年）にイギリスに行って『復活』の舞台を見てきて、後に自ら脚色してこれを帝国劇場で演じさせたものです（一九一四年）。このとき、カチューシャに扮した松井須磨子のうたった『カチューシャの歌』が一世を風靡したことは有名です。

木村先生は、トルストイについて何か本をお書きになっていますか？

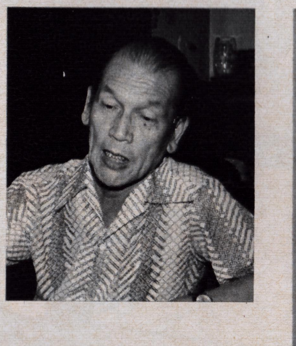
——トルストイについては他の先達の方々がいろいろお書きになっておりますので、私が書いたのは『ルッソーからトルストイまで』（一九二二年）と、ロシアに居たドゥホボール教徒とトルストイの関係について調べた戦後の『ドウホボール教徒の話』（一九五六年）ぐらいです。

ドゥホボール教徒に関心を持たれたのはどういう理由ですか？

——トルストイの影響です。『ドゥホボールとトルストイ』というフランスの本を手に入れたのをきっかけに、いろいろ資料を集めて、本にしました。この本は、当時大変注目されて、いろんな本に引用されるようになりました。本の内容は、ドゥホボールの起こりから、戦争に反対で、武器を全部焼いたり、税金を納めなかったりした教徒たちが、ツァー政府から迫害され、ロシアに居られなくなり、追放されるわけですが、トルストイが『復活』を書いて、その印税で二万人の教徒をカナダに送るまでの経緯を書きました。さらに後半で、日本ではいつからドゥホボールについて雑誌や新聞に載るようになったか、それから日本の文献について書き、現在カナダにいるドゥホボール教徒たちの状況を書きました。私の姪が今カナダに居ますが、ドゥホボールたちと行き来があるということです。

トルストイと私

——本多　秋五　氏は語る



トルストイの『戦争と平和』についてユニークな作品論（『「戦争と平和」論』）を書かれている文芸評論家の本多秋五氏にインタビューした。

『戦争と平和』について本を書かれたのは、どういういきさつからですか？

——『戦争と平和』は前にも読んでいたが、本気で読む気持ちになったのは一九四一年からです。その読後感を二、三年かかって書き、それが本になって出たのは戦後の四七年でした。

『戦争と平和』の私の読み方は、特殊です。大学に入ったころはプロレタリア文学が非常に盛んな時代で、文学をやっていましたから、私もその影響を受けました。大学を出て、プロレタリア科学研究所に入ったころ（一九三二年）から弾圧が激しくなり、翌一九三三年は小林多喜二が殺された年ですが、私も逮捕されました。

私たちの世代にはみな転向問題というのがあって、どういうふうにして、いままでの考え方では割り切れない歴史の進展にたいして対応してゆくかという問題にぶつかったわけです。保釈後、田舎に居て、佐多稲子さんの『牡丹のある家』という短編を読んで、非常に感銘を受けたんですが、どういう感銘なのか自分でもうまく言えなかった。最近読んだら、やっと分かりました。つまり、これはそれまでの価値観というものから、突然に解放されてしまったという作品なのです。要するに、それまでのプロレタリア文学のイデオロギーでは見えない日本の現実というものがくっきりつかまえられている。そういう感銘の性質が当時よく分からなかった。

それと似たような経験を、私は『戦争と平和』の中でしたわけですが、その正体をつかまえようとして、一九三七、三八年の年末年始に読んだ印象を解きほぐそうとして、四一年から数年間かかったのです。つまり、プロレタリア文学の考え方、あるいはマルクス主義の考え方というものが、学生あがりで現実社会、人間というものを知らないのに思想だけが入ってきた。そして歴史が大きくうねり出したときに、それについて行けなくなった。そこで前の公式主義的な、観念的なものを御破算にして、人間とか歴史とか文学とかいうものが何かということをイロハから勉強し始めることを、トルストイが教えてくれたのです。

『戦争と平和』の中で特に興味を持たれた問題は何ですか？

——トルストイは、『戦争と平和』のエピローグの第二編で歴史を動かすものは何かという問題を提出して、そこから自由と必然という問題に当面し、繰り返し、巻き返しやったが、理論的にうまく解決できなかった。歴史はある程度、自由の産物であり、必然の産物であるとしか言えなかった。しかし、その自由と必然の闘いというものが、ボロジノの戦争のところで書かれている、と私は読んだわけです。ボロジノの戦争が終わって、日が暮れて、雨が降り始め、だが依然として殺りくが行われている。そこでは人間はもう沢山だ、もうくたびれたと考えているが、だがしかし世界と人類を支配している何者かの意志によって依然として戦いが行われていることが書かれている。これは、自由というものが、必然の車輪の進行に踏みしだかれて行く光景が書かれているんだというように考えて、私は、自由が完全に滅ぼされて行く光景であると思った。それを読んで救われたような感じがした。つまり、小我が破れ、大我が生まれた、と私は言うわけですが、小さい自分の主観が破れて、客観の世界が現れてきたということです。自由が完全に滅ぼされてしまってから、今度は、外にあった必然というものが、自分の中によみがえってくる。どうしても動かすことのできない、自分の内部にあるものが必然である。そこから自由が再生し、自我が再建されるというようなことを味わった。これが私の『戦争と平和』の読み方で、非常に特殊な読み方だと思うが、そんな読み方も許容しうるところが、『戦争と平和』の大きさだと考えています。

トルストイについて現在どのようにお考えですか？

——トルストイの晩年の思想を読むと、いろんな帝政ロシアの矛盾に痛みを感じて、何とかしてそこから抜け出したいという願望はあった。しかし、いかに抜け出すかという方法が分からず、ただ心を入れ替えよ、悔い改めよ、ということを言っていた。だから、ぼくら青年時代に読んでも、それだけでは人生の指針として足りない。何かもう少し、具体的に世の中を作り変え、人間の進む道を教えてくれるのでなければ、と思った。その点からいくと、マルクス主義者の説は非常に明快で、力強くて、人間が新しい生活を始めるためには、古い社会制度を壊して、新しく建て直さなければならないという教えだから、非常に献身的な人たちが居て、犠牲を惜しまずにやったところに魅力があったのでしょう。

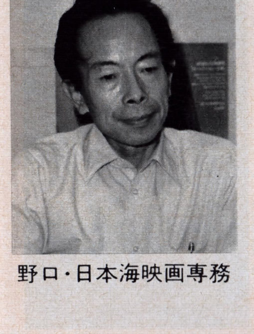
しかし、今になってみると、やっぱり社会制度を直しただけでは人間は救われない、心を何とかして変えなければ、そして心というものは放っておくと毎日サビが付く、毎日、磨きをかけなければならないということも確かなことです。その点、トルストイが心について説いている道徳的なことは、今日でも生きていると思います。

☆　☆　☆

日本で上映されたトルストイ原作映画



一九六八年5月、東京の有楽座で『アンナ・カレーニナ』がロードショー公開されたときの飾り付け



野口・日本海映画専務

映画は最も大衆的で、すべての人、すべての国の国民に親しまれている芸術だが、その映画がレフ・トルストイの作品、思想、感情を大衆につたえるために果たした役割は大きい。トルストイにたいする映画の関心は、芸術としての映画の誕生とともに生まれた。映画がまだ素朴な手作りだった初期の段階に、一部の監督ははやくも、この偉大な作家の作品を映画化することを夢見ていた。

一九〇九年からこんにちまでに、世界の映画界では、レフ・トルストイの作品を脚色した映画が60本以上も制作されている。六〇―七〇年代だけでも、『復活』（一九六〇―六一年、ミハイル・シュワイツェル監督）、『コサック』（一九六一年、ワシリー・プローニン監督）、『戦争と平和』（一九六六―六七年、セルゲイ・ボンダルチュク監督）、『アンナ・カレーニナ』（一九六七年、アレクサンドル・ザルヒ監督）、同名のバレエ映画（一九七四年、マルガリータ・ピリヒナ監督）その他の映画がソ連で作られた。

このころから、日本の映画ファンも、映画化されたトルストイ作品に本格的に親しむようになった。

日本海映画株式会社はこの面で多くの業績をあげた。同社はソ連の主な監督の映画が日本で公開されるときの窓口になっている。

公正を期すために記しておかねばならないが、日本の観客は、すでに戦前にトルストイの作品の映画を初めて見ることができた。たとえば一九三七年には映画『ナターシャ・ロストワ』と『カチューシャ・マスロワ』（ピョートル・チャルドゥイニン監督）が日本で上映されている。

「映画のために書かねばならない。映画は大衆によって、そのうえあらゆる国の人民によって理解されるものだから」――日本海映画の専務取締役野口陽一氏は、トルストイが一九一〇年に述べたこのような言葉でインタビューの口火をきった。以下は野口氏の話――

「トルストイははかり知れないほど多くのものを映画に与えたといえる。重要なのは、日本の観客がソ連映画に親しみ始めたのが、ほかならぬトルストイの作品からであることだ。映画『戦争と平和』『復活』『アンナ・カレーニナ』は日本の映画ファンから非常に注目された。これらの映画は、戦前生まれで、何らかの形でトルストイの作品を読み、トルストイの思想を受け入れていた人々を満足させた。

セルゲイ・ボンダルチュクの『戦争と平和』2部作は、記録的な観客を動員した。この映画は一四〇日間上映され、日本全国で三〇〇万人以上が見た。東京での観客動員数は約四二万五〇〇〇人にのぼった。この映画の魅力は、事件の内容を広く、深く解釈しており、生活のいぶきが感じられたことである。

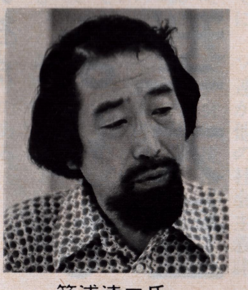
日本では『復活』と一九六八年に上映された『アンナ・カレーニナ』がたいへん好評だった。『アンナ・カレーニナ』のときは東京で約四〇万人を動員し、1日の観客動員数は三七〇〇人に達した。トルストイの小説を映画と比較してみると、これはこれまでの映画のうちで、最も忠実に脚色されたものといえる。

トルストイの作品の新しい解釈をたえず探究しているソ連の映画人には敬意を表さねばならない。日本の観客はまた、バレエ映画『アンナ・カレーニナ』をも正当に評価した。この映画のなかでは、舞踊と映画が非常によく統一されている。マイヤ・プリセツカヤがこの映画に加わっていることも、映画の成功に一役買っていることは明らかだ。しかしそれにしても、トルストイの作品が新しい形で、多くの新しくてすばらしい情緒をわれわれにもたらしたのである。

トルストイ生誕一五〇周年にあたり、われわれ映画の関係者とすべての映画ファンもこの祝日をお祝いする。9月にわれわれは日ソ協会と共同で映画『復活』を上映し、その後、日本の主要都市で映画『戦争と平和』を、ソ連で制作されたままの形どおり、4部を一挙上映することにしている」

（『戦争と平和』記念上映についてのお問合せは日本海映画——電話03・243・1601へ）

日ソ協会のトルストイ生誕記念行事



箕浦達二氏

日ソ協会では、協会内外のロシア語、文学、映画、演劇などの関係者を集め、「トルストイ生誕一五〇周年記念祭実行委員会」（横田瑞穂委員長）を発足させ、いろいろな行事を計画している。同実行委員会の箕浦達二事務局長（横浜市立大学講師）にインタビューした。

「実行委員会では、長年にわたり日本の文学、思想、宗教など、さまざまな面に極めて大きな影響を与えたトルストイの偉業をしのんで各種の記念行事を行います。日露戦争の時にトルストイが、ロシアと日本の両国民に反戦平和を呼びかけたことは有名ですが、このようなトルストイの平和の思想をもう一度汲み取り、生誕記念祭を契機にして、日ソ両国の相互理解と善隣友好の関係がより一層深められることを願っています。

まず、実行委員会では8月末から11月にかけて大阪と東京で講演会と映画会、京都で映画会を開催します。講演会では委員会に参加しているロシア文学者がそれぞれ得意のテーマでトルストイについて語ります。映画会ではトルストイ原作のソ連映画『復活』を上映します。

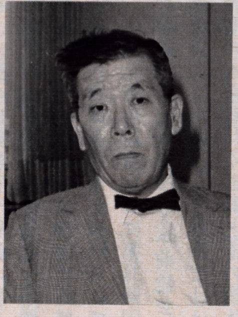
実行委員会の仕事の一つとして、パンフレット『トルストイ』が出版されます。このパンフレットで多面的にトルストイを取り上げて、日本の多くの青年男女にトルストイを知ってもらい、トルストイの作品をすでに読んだことのある人々にも、トルストイを再認識してもらおうと思っています。ソ日協会からもこのパンフレットのために写真集などが送られてきました。

このパンフレットには金子幸彦、中村融、西本昭治、草鹿外吉、稲田定雄、大木昭男、小椋公人、山村房次、斎藤　勉、樹下　節、中本信幸、和久利誓一、鳥越　信、米川哲夫、藤沼　貴、法橋和彦、北御門二郎、増見利清、北垣信行氏らの論文のほか、女優や作家の方たち、たとえば、女優の栗原小巻、山口淑子（参議院議員）、作家の宮原昭夫、霜多正次などの皆さんからもトルストイについての感想、随想が寄せられています。

なお、このパンフレットにはトルストイの年譜も収められています」

（記念行事の詳細についてのお問合せは日ソ協会文化事業部——電話03・429・8231へ）

トルストイの作品と岩波書店



岩波雄二郎氏

これまで岩波書店で発行したレフ・トルストイの作品は、延べ五〇〇万部にものぼるという。同書店の岩波雄二郎会長を訪ねた。

「70年以上も前のことですが、私の父、岩波茂雄は、学生時代からトルストイの作品に関心を持っていました。その後、岩波書店を創立しましたが、その出版する本の中ではトルストイの作品が大きな部分を占めていました。

一九二九年から三一年にかけて全22巻のトルストイ全集（八杉貞利監修、米川正夫・中村白葉・原久一郎編集）が出版されました。戦前すでに岩波書店は、このロシアの文豪のほとんどすべての作品を出版しましたが、現在もこれは版を重ねています」

岩波書店がトルストイの作品を出版しはじめてから今日までに、25点の作品（全集は1点として）全部で延べ約五〇〇万部を発行してきた。ちなみに同書店から発行された夏目漱石の作品が約一三〇〇万部、芥川龍之介が三一七万部、森鷗外が二八〇万部だという。特に『戦争と平和』（二二万部）、『復活』（二六万部）、『アンナ・カレーニナ』（一四万部）の人気が最も高い。岩波書店はこのほか、伝記などトルストイ関係の一連の本を出版している。

「トルストイの文学的遺産と思想が日本の人々に与えた影響は、非常に巨大であり、多様であったと思います。一〇〇年以上たった今日でも、日本でも世界でも、このロシアの偉大な作家の作品が読まれています。現在も日本にはトルストイの崇拝者がいますし、彼の思想や世界観の継承者もいます」と岩波氏は話を結んだ。

トルストイ生誕記念講演と映画の夕べ

主催　日ソ親善協会／日本対外文化協会
後援　朝日新聞社
日時　9月16日(土)午後5時半
場所　東京・有楽町　朝日講堂
講師　A・A・アナニエフ（ソ連作家同盟理事会書記、オクチャーブリ誌編集長）
周郷　博氏（「トルストイの教育観について」）
映画　トルストイ関係の記録映画
（入場無料、先着五〇〇名まで）

ソ連の視点

何よりも大事な新型大量殺りく兵器禁止問題

『プラウダ』紙政治評論員
ユーリー・ジューコフ

目下ジュネーブの軍縮委員会は、さきごろ国連軍縮特別総会で採択された勧告に挙げられた一連の問題を討議している。軍縮委員会の議題となっている問題のうちでもとくに、新型の大量殺りく兵器とその体系の禁止の問題は、真に最も重要な意義を持っている。

一九七五年6月13日、L・I・ブレジネフはモスクワ市バウマン選挙区の選挙人集会で演説し、国々、まず第一に諸大国は、新型の大量殺りく兵器とその新体系の開発を禁止する協定を結ぶべきである、と提案した。

同じ一九七五年9月23日に、この提案はソ連政府のイニシアチブで、その時開かれていた第30回国連総会に重要かつ緊急の議題として上程された。国連加盟国の圧倒的大多数が事態の重大性をよく認識した結果、12月11日に総会は、「しかるべき国際条約（または協定）を結んで、新型の大量殺りく兵器とその新体系の開発・製造を禁止する効果的な措置をとる必要があると考える」との決議を採択した。

総会は軍縮委員会にたいし、「できるだけはやく」協定文について合意を取り付け、次の第31回総会にこの成果にかんする報告を提出するよう呼びかけた。

もし権威ある国際会議（軍縮委員会）がソ連の提案の緊要性を認識して、この提案を無条件で支持したなら、事はきっとすばやく運んだに違いない。しかしなんと、軍産複合体の意志が良識の声をひんぱんに抑えている西側諸大国は、よくやることだが、そのときも、さもソ連の提案の趣旨が〝よくわからない〟として、次々に〝説明〟を要求し、討議を長引かせた。

ソ連の包括的メモランダム

こうして1年がたったが、軍縮委員会は協定案をまとめることに〝成功しなかった〟。一九七六年9月28日にソ連は、軍拡中止と軍縮の問題にかんする包括的メモランダムを第31回国連総会に上程した。このメモランダムには「新型と新体系の大量殺りく兵器の開発禁止」という大きな項目が入っていた。

ソ連政府は「近い将来新型兵器が出現する可能性があり、しかもその有効効果の規模が、核兵器や化学兵器または細菌兵器のそれに比肩するか、それともそれらを上回るおそれがある」点に注意を喚起するとともに、「いまこうした目的に科学を利用することは、別に制限されてはいない。つまりいつなんどき、どんな結果がでるか全然見当がつかないような事態の急変が突然起こる可能性があるということであり、危険は大きいから、その予防手段を発見しなければならない」と警告した。

メモランダムにはその例として、血液や細胞質に有害作用を与える光線兵器、人間の内臓器官や行動に害を与える超低周波兵器、遺伝器官を破壊する兵器、宇宙輸送船を基地とする航空・宇宙核兵器体系などが挙げられていた。

一九七六年12月10日に第31回国連総会が採択した決議は、1年前総会が「軍縮委員会にたいし、できるだけはやく新型の大量殺りく兵器とその新体系の開発・製造の禁止にかんする協定文について合意を取り付けるよう要請した」ことを指摘した。

総会は、こうした協定の「重要性を確信しており」、従って協定文について合意し、その成果にかんする報告を一九七七年秋の第32回総会に提出するよう、再度軍縮委員会に要請することを、あらためて確認した。

米国の熱意のない態度

残念ながら、軍縮委員会は一九七七年秋までに合意ずみの協定案を提出することはできなかった。

一九七六年4月26日の米国のクリスチャン・サイエンス・モニター紙は、戦略兵器制限交渉の最中に米国がとった「若干の措置」をわかりやすく例挙した。

——複数弾頭の新型大陸間弾道ミサイル（ICBM）ミニットマンⅢ型五五〇基が配備された。

——複数弾頭のポセイドン型潜水艦用新弾道ミサイル（SLBM）が四九六基装備された。

——戦略用の弾頭と爆弾の数が三〇〇〇から九〇〇〇余りにふやされた。

——トライデント型ミサイルを装備する潜水艦隊の創設が開始された（一九七八年4月20日に米海軍はこの種の潜水艦29隻の建造注文を出した。総額は四〇〇億ドルの見込み）。

——潜水艦用の新型長距離弾道ミサイルが開発された。

——改良型の戦略巡航ミサイルが開発された（一九七八年6月25日に米国紙はホワイト・サンドで「初公開」されたトマホーク型新巡航ミサイルの実験をとてつもなく騒々しく書き立てた）。

——MX型ミサイルの開発が始まった（報道によると、この開発は悪名高い「目標増大構想」と結びついている。ミサイルをある地下サイロから別のサイロへ秘密裏に移せるようにするために、ミサイル1基について10—20の地下サイロがつくられる）。

——新型攻撃戦略兵器の年間製造費が4倍に増額された。

平和の事業にとって危険なこのような時勢の動きに直面したソ連政府は、一九七八年5月に国連軍縮特別総会に上程した諸提案のなかで、新しい種類と体系の大量殺りく兵器の開発禁止を早急に決議するよう要求した。そのさい、中性子兵器の禁止の必要性がとくに強調された。

中性子兵器禁止条約案は、ことしの3月にすでに、ソ連が他の社会主義諸国と共同で軍縮委員会に提出ずみであり、この真に野蛮な大量殺人兵器の製造、配備の完全、無条件停止について合意すべき時はとっくにきている。ソ連についていえば、米国がつくらない限りソ連もつくらないという自国の声明を断固守るつもりである。

放射線兵器の禁止は重要な意義をもつだろう。この問題はソ米二国間の討議の対象である。

手遅れにならないうちに

最後にすべての新しい種類と体系の大量殺りく兵器全体の製造禁止問題も、緊急に解決する必要がある。

ワシントン筋は世論をなだめるために、新型兵器は軍縮交渉で「ロシア人と勝負するさいの切り札」に使うのに必要なだけだと断言しているが、それとは裏腹にペンタゴンはいったん新型兵器を備えると、もうその兵器とは手を切れなくなっている。

それは米国の安全保障にどういう結果をもたらしているか？ それで米国の安全はさらに確実なものになっているか？ 消息通はそれに否定的な答えを出している。たとえば7月31日のニューヨーク・タイムズ紙の社説——「歴史の皮肉は、米国がたくさんの兵器体系を発明し、やがてソ連が続いてそれらを開発し、それらが最大の脅威になっていることである。カセット弾頭（複数弾頭）づきのミサイルはかつては大きな優位を約束してくれたが、（ソ連が同じような兵器を開発した）いまは、米国の地下ミサイル兵力を脅かす最も恐ろしい兵器となっている。そしてわれわれはこの脅威を取り除くためにまたもや新兵器の開発にとりかかろうとする。しかしまたその兵器はブーメランのように米国を打つはめになろう」

ニューヨーク・タイムズ紙が問題にしているのは、悪名高い「MX」ミサイル・システムである。同紙は、もしこのようなシステムが開発されれば、ソ連もそれに答えて同じようなことをやってのけよう。そうなればワシントンに「パニック反応」（ニューヨーク・タイムズ紙の表現）が起ころう。

一〇〇年余り前の一八五九年7月30日にカール・マルクスはダス・フォルク紙に次のような賢明な警告の言葉をのせた。「現代の偽善的な政治のあらゆる教義のなかで、〝平和を望むなら戦争の準備をせよ〟という教義ほど、多くの不幸をひきおこしたものはない。大きな嘘をふくんでいるということで、とくにきわだっているこの偉大な真理は、全ヨーロッパに武器をとるよう呼びかけた鬨（とき）の声である……」

その時以来少なからぬ戦争、まず二つの世界大戦が世界を震撼（かん）させた。せめていま、手遅れにならないうちに、唯一つの合理的な結論（軍拡競争を中止し、新しい、ますます破壊的な種類や体系の兵器の開発を停止する）を出すべき時ではなかろうか。そうなれば、大量殺りく兵器の縮小と、そのあとの廃棄へ移ることができよう。

次号予告

本誌次号は、新ソ連憲法採択一周年を記念して、新しい憲法の規定がソビエト社会でどのように実現され、ソ連市民の権利が具体的にどのように保障されているか、特集記事で紹介します。

トピックス

クマの親善使節

さきごろ、極東の森の中で捕獲された8頭の子グマがハバロフスクからモスクワへ空輸された。このうち一頭は西ドイツへ送られ、残りはモスクワ・サーカスの有名なクマの調教師フィラトフとドゥーロフの手に渡った。来日中の〝ボリショイサーカス〟でも人気を集めているように、クマの曲芸はソ連のサーカスのトレードマークだ。

この5年間にハバロフスクからソ連各地の動物園やサーカスに送られたクマは一五〇頭。これまで世界各国にたくさんのクマが送られているので、各地の動物園で極東のヒマラヤグマやヒグマが見られる。

ハバロフスク動物コンビナートでは、クマ以外にも、トラ、ヘラジカ、アカシカ、ノロ、タヌキ、その他の野生動物を捕獲しているが、捕獲量は毎年の野生動物調査の生息数とにらみ合わせて、極東の動物相を破壊しない程度にコントロールされている。

身体障害者の生活と就業

松江市の関光子さんから「ソ連の身体障害者はどのような教育を受け、どのようにして社会生活を送っているか」（本誌第6号掲載）との質問がありましたので、アンナ・ウラジナ・ノーボスチ通信記者がお答えします。

戦争中ミハイル・シュミヒンは脊椎に重傷を負い、病院で足を切断しました。国家医療・労働鑑定委員会がシュミヒンの身体障害程度を第1種（ソ連の身障者は労働能力喪失の程度によって第1種―第3種に分けられる）と鑑定して以来、35年間ずっとシュミヒンは、身体障害年金で暮らしており、働いていません。

ロシア連邦共和国（ソ連最大の連邦構成共和国）のジーナ・コマロワ社会保障相の話――「年金は重要なものではありますが、それだけが社会保障ではありません。身体障害者の職業教育や就職あっせん、身障者にさまざまな特典や特権を与えることも、なかなか大事なことです。なお、年金をはじめ、身障者向けの国のいろいろな社会保障給付は、課税されません」

たとえば脊椎・運動器官に欠陥のある身障者は、地区の社会保障部を通じて、手操縦の小型自動車や各種の車イスを無料で提供されています。

戦争で身障者になった人は、家賃や公共サービス料金は半額です。またかれらは身体機能障害者専用のサナトリウムで定期的に休息しています。サナトリウム滞在費やそこまでの往復旅費は無料です。

第1、第2種身障者の市内交通機関の料金は無料です。またこれらの身障者の多くは、10月1日から翌年5月31日まで、鉄道、船、飛行機の運賃が半額になります。

身障者はもし必要ならば、あらゆる生活サービスや医療が無料である特別のホームで暮らすことができます。

普通の病気で（たとえば梗塞などで）身障者になった人も、一定期間の労働歴があれば年金が支給されます。年金の給付に必要な労働従事期間は、身障者の年齢、性、労働条件によって異なります。労働傷害または職業病の結果身障者になった人には、労働従事期間のいかんにかかわらず、年金が給付されます。子供のときからの身障者も全部、年金を受けます。

ソ連の社会保障機関は、働くことを希望している身障者の就職あっせんに心をくばっています。たとえば労働能力を一部失った人々のために、普通型の企業に特別の職場が設けられていますし、身障者だけが働く特別の企業もあります。こうした企業で働く人には、労働時間の短縮、作業ノルマの引き下げ、有給年次休暇日数の増加など、さまざまな特典が与えられています。

コマロワ社会保障相の話――「現行法では、医師の診断によって身障者が一定の種類の労働ができるとあれば、企業管理部は就職を希望する身障者の就労を、労働能力を失っているという理由で拒否することはできないことになっています」

そのほか、企業管理部は、作業中に身障者になった者が、もしその企業で労働活動を続けることを希望すれば、その者を就労させねばなりません。また、その者が前の仕事をやれない場合は、管理部はその者の同意をえて、一時的または恒常的に、前の仕事よりも軽い仕事を与えなければなりません。

またコマロワ社会保障相はこう言っています――「身障者が専門職を身につけるよう配慮しています。いまロシア連邦共和国では専門の職業技術寄宿学校を含む中等技術学校やさまざまの講習会で、約九〇〇〇人の身障者が39種の職業を無料で学んでいます。この身障者のなかには先天的な身障者や重症の身障者もいます」

身障者は働いて自分の生活水準を上げているだけでなく、働いているというその自覚で、身障者の生活様式全体にもよい影響を及ぼしているのです。

なお働いても働かなくても、年金は支払われます。

olympics-80

オリンピックに備える鉄道

80年モスクワ・オリンピックには、三〇万人を超す外国人旅行客がやってくるだろうと予想されている。さらに約一〇万人のソ連市民が、競技開催都市に集中する。これらの旅行客の輸送のために、すべての交通機関が使用される。当然、鉄道が中心となるだろう。

ソ連は、27ヵ国と鉄道で直接結ばれている。オリンピック開催中は、定期国際便にさらに特別編成列車が追加される。これによって競技開催地へ、直通列車で毎日一万六〇〇〇人以上の外国人を輸送することができる。

競技開催期間中と終了後には、内外の参加者や観光客たちの観光旅行が行われる。その他、モスクワと他の競技開催都市――レニングラード、キエフ、ミンスク（サッカー予選）、タリン（ヨット競技）をむすぶ輸送も必要となる。当然ながら列車を補充しなければならない。

オリンピックをめざす鉄道整備計画に沿って、客車が新調され、駅が改修されている。一九八〇年までに国際線に六五〇両以上の快適な客車が補充される。

特にモスクワ鉄道管区では大規模な工事が行われており、またモスクワ周辺の鉄道環状線の大改造も完了する。この環状線は、以前モスクワ経由で運行していた通過貨物をすべて引き受ける。同時に、モスクワに集まる放射線上に追加の線が敷設される。モスクワ鉄道管区には、オリンピックまでに二〇〇〇両以上の客車と一六〇〇両以上の電車が新たに投入される。

モスクワの地下鉄もまた当然、余波を受ける。首都の競技施設、ホテル、オリンピック村などの配置や収容人員はすでに正確に分かっているし、競技日程も決まっている。これらのデータをもとに、オリンピック施設への下車駅もきめられている。予想される乗客の流れの統計図もでき、それをもとに地下鉄全線のダイヤグラムが作成されている。開会式と閉会式、サッカーの決勝戦などの当日にはレーニン・スタジアム周辺の駅に最大の人出が予想されるので、これらの駅を通る路線の特別なダイヤグラムが作成されている。

オリンピック開催までに、新設計の地下鉄車両約三〇〇両が補充される。最も混雑が予想される駅の全部で27台のエスカレータも改修される。この改修によってエスカレータの速度は毎秒15cmになる。

特に外国人客の人出が予想される路線や駅施設には、フランス語、英語、ドイツ語で各種の案内が行われる。

モスクワやレニングラードでは、地下鉄の新区間がオリンピック開催までに操業に入るので、市民やオリンピック観光客の交通は今よりもっと便利になる。

☆ ☆ ☆



同僚を相手に特訓
中のヤツケービチ

スポーツ

ソ連柔道期待の新人ヤツケービチ

エブゲニー・ゴルブノフ
カメラ　I・ウトキン

ベテラン選手のチョチョシビリやノビコフがオリンピックで金メダルをとってから、ソ連の柔道選手たちは、最高ランクの試合でも一目置かれるようになった（チョチョシビリは一九七二年ミュンヘン・オリンピックの軽重量級で金メダル、ノビコフは一九七六年モントリオール・オリンピックの重量級で金メダル）。現在、モスクワ・オリンピックを目前にして、ソ連柔道界では"新人攻勢"が目ざましい。

今年の5月、うれしいニュースがフィンランドのヘルシンキ欧州選手権大会から届いた。若いラトビア人のアレクサンドル・ヤツケービチがこの晴れの大会に初出場して、みごと金メダル（86kg以下級）を獲得したのだ。

アレクサンドル・ヤツケービチは、まだ20歳。ラトビア国立体育大学の2年生だ。彼は12歳の時に"ディナモ"クラブの柔道部に入部。それから3年後には、ソ連ジュニア選手権で銀メダルを獲得した。

ヤツケービチの大きな国際試合での勝利の系譜が、ほかならぬフィンランドで始まったのは因縁深い。一九七五年に彼は欧州ジュニア選手権で金メダルを獲得したが、その開催地がフィンランドのツルクだった。やがて試合のランクは上がったが、彼の技も向上した。一九七六年の欧州ジュニア選手権と世界ジュニア選手権では、ヤツケービチはチャンピオンの座を楽々と獲得した。

……そして、ふたたびフィンランド。しかし今回のヘルシンキ欧州選手権に



得意の大技

は、かくかくたるタイトルと豊富な経験を持った、円熟した選手たちが集まったのだ。しかし、これら"おとな"の選手たちの中で、若いヤツケービチは気後れもせずに、すばらしい技を披露した。彼は頭脳的な作戦を立て、ねばり強く、エネルギッシュに試合を進めた。

ヤツケービチは、すべての予選を優位に進めて、無失点で勝ち、準決勝と決勝への進出にあたっては、前回の欧州選手権銀メダリスト、スイスのレトリスベルガーとフランスのトリペ選手に勝った。ヤツケービチは決勝戦で一九七六年度欧州選手権の銅メダリスト、デトレフ・ウルチ(ドイツ民主共和国)選手と対戦した。この決勝戦は非常に激しかったが、ヤツケービチはよく闘った。試合中、つねに技をしかけ、積極的に攻撃し、審判員全員が一致して彼に軍配を上げた。

タタミから下りると、チームの仲間やコーチたちがヤツケービチを抱きかかえるようにして出迎えた。疲れきった彼はトレーニングウェアをつかむと、着換えに行った。

「まず眼鏡をかけて、それから着換えたらいいじゃないか」とみんなが彼に言った。ヤツケービチはしばらく考えて、

「まったくだ。こんな時に眼鏡のことを忘れてしまって」と自分のうかつさを笑った。

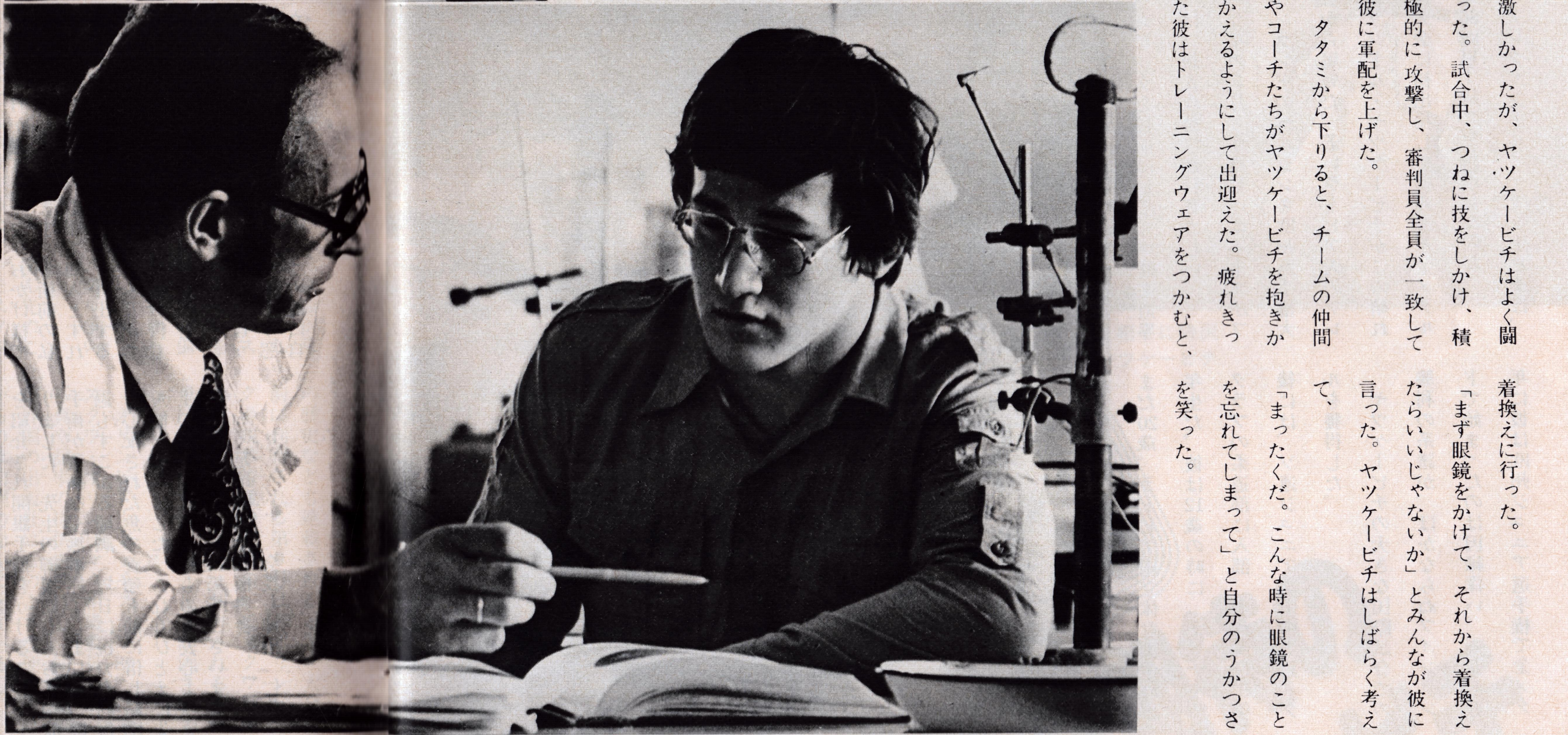
今年はこの若い選手にとって、多くの試合での勝利の年となった。今年の初めにはパリの国際試合で世界の強豪を破って優勝、つづいて欧州選手権で1位、そして故郷リガでの国際試合。

新欧州チャンピオンのコーチ、ニコライ・フィリモノフは、ヤツケービチの試合を、オリンピック出場へのそれぞれのステップとして評価している。

「重要なのはモスクワ・オリンピックです。他のすべては、この重要な目標にいたるまでの中間的な目標にすぎません」とヤツケービチもコーチと同意見である。



母親とくつろぐヤツケービチ。母親のガリーナはリガの中等学校のドイツ語教師。



体育大学生理学講座のブレマニス主任からゼミナールの指導を受ける。



左からアレクサンドル・ヤツケービチ、コーチのニコライ・フィリモノフ、10歳の"黒帯"ヤニス・ダルズニエクスくん。



欧州選手権の印象を仲間に語る

人工水晶体のフョードロフ教授に感謝の手紙

ソ連の眼科医で人工水晶体の考案者スビャトスラフ・フョードロフ教授が5—6月に来日して、各地で自分の開発した人工水晶体の移植手術に立ち合ったことはすでに本誌でも紹介しましたが、群馬県桐生市の桐生眼科クリニックで百瀬　皚院長の手術を受けた4人の患者さんたちから、このほどフョードロフ教授のもとに次のような感謝状が寄せられました。

毎日暑い日が続いておりますが、先生はお元気でいらっしゃることと思います。世界的に有名な先生に眼の手術をしていただき、二ヶ月が過ぎました。片眼が見えなくなってから七年。片方の眼が緑内障だと知らないでおりました。百瀬先生の所で手術していただき、翌日5月30日の朝百瀬先生と先生がいらして、眼帯を取りはずし診察をして下さって、Vサインが出ました。この時の私の喜びはたとえようもありません。先生は外国語で何か話し、最後に日本語で「成功」と申しました。この時の喜びは格別でした。その後左の眼を手術し、約一ヶ月後に退院。今は週2回通院しております。行くたびに快方に向かっております。両先生の御力で失明せず、視力をなおいっそう高められたことに感謝しております。これからも世界中の眼の悪い人達をお救い下さい。

先生に会えるなら会って御礼申し上げたいのですが、書中で御礼申し上げます。

森　定治

謹啓

暑さ厳しい折柄先生にはいかが御過ごしでございますか。私も今日の暑さに負けず無事に過ごして居ります。

白内障手術のため入院中は大変御世話様になりました。百瀬先生の手術を受け、退院後の今日では眼も大変良く見える様になりました。これもひとえに両先生のおかげとただただ衷心から感謝申し上げるのみでございます。

ほんとうに先生有り難うございました。まずは御礼まで。

敬具

西山　佐平

日本では毎日暑い日が続いております。御地はいかがでしょうか。

人工水晶体の手術をしていただいてから二ヶ月が過ぎました。おかげ様で元気に過ごしております。手術前の私は、新聞も読めず、道路で知人とすれ違っても気づかない有様で、外出するのがいやになり、家の中にこもりがちでしたが、今では、信号も店の看板も本も読めるようになり、何処か旅行へ行きたいと思うようになりました。これもみな先生のおかげです。有り難うございました。手術の翌日にはもう窓から、川の流れやその向こうの道に自動車が走っているのが見え、山の緑がとてもきれいに見えました。手術前は、ぼやっと霧に霞んでいたのに……。

昔ならこのまま盲目で一生過ごすところを今の時代に生まれ、先生にめぐり会えて、うれしくて感謝の気持で一杯です。

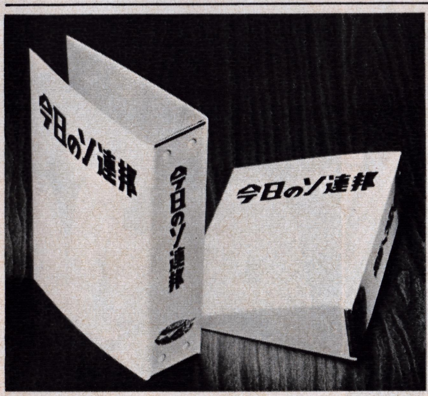
有り難うございました。お礼かたがたご報告申し上げます。

浜寄　コト

私は足尾町の産業振興事業計画の一つの水産業振興会の要職に在り、ヤマメ、岩魚、銀鮭のふ化養殖に関与し老体に鞭を打ち日夜を分たず研究と会員の育成指導に微力を尽しております。ところが急速的に左眼の視力減退により魚のふ化養殖作業困難となり、日常生活にも若干不自由をきたし先行き不安な日々を送っておりました。折もおり、地域の方より桐生眼科クリニックを紹介され開眼手術をうけることになりました。先生の御援助もあおぎ開眼手術が苦痛なく無事終了しました。経過もすこぶる順調、短日に視力も回復し心配された魚の養殖も前に倍し精励可能となりました。これもひとえに先生の優秀な医術の賜ものと衷心より感謝と敬意を表する次第でございます。

足尾町水産業振興会

会長　神山　仁作



本誌専用ファイルができました!

『今日のソ連邦』を保存するのに便利なファイルが発売されました。このファイルには、ことしから週刊誌型（B5判）になった本誌の一年分24冊がとじこめます。材質はポリプロピレン、乳白色のバックに『今日のソ連邦』の金文字が印刷されている上製のファイルです。定価は六五〇円。送料（二〇〇円）を添えて左記にお申し込み下さい。

お申し込み・お問合せ先
（郵便番号一七〇）
東京都豊島区東池袋3—1—1
サンシャイン60
ソ連総合貿易株式会社
（電話03—988—5711）



季刊誌

『オリンピアード・モスクワ80』創刊号

アジアで初のオリンピック大会が東京で開かれてから、すでに14年。一九八〇年には社会主義圏で初めて、モスクワで第22回オリンピック大会が開催される。日本男子体操選手団と、開催国の意地にかけても雪辱を期すソ連選手団の対決をはじめ、女子バレーボール、柔道など、ソ日両国のメダル争いが予想される種目も多い。

あと2年というと、ずいぶん先のことのように思われがちだが、モスクワではすでに一九七六年のモントリオール大会終了直後から、季刊情報誌『オリンピック・パノラマ』の刊行を開始、オリンピック開催に向けて活発なPR活動を始めた。ロシア語のほか、英、独、仏語でも出版されるこのような情報誌の刊行は前例がなく、今大会の成功を期すモスクワ・オリンピック組織委員会の意欲的な姿勢が注目される。

日本でも、社会主義圏で初めて開催される今大会について正しい情報を各界に提供しようと、ベースボール・マガジン社と新時代社の協力で、季刊『オリンピアード・モスクワ80』が発刊されることになり、この7月1日に創刊号（夏季号）が発売された。

『オリンピアード・モスクワ80』はモスクワ・オリンピック組織委員会によって特に認められたオフィシャル・マガジンで、『オリンピック・パノラマ』の翻訳を軸として編集される。また日本の読者のために、日本選手団やオリンピック候補選手の動向のルポルタージュ、エピソードで綴るオリンピックの歴史なども連載される予定。大会直前に刊行される第9号は、オリンピック参観希望者のための「モスクワ五輪総ガイド」、大会後に刊行される第10号は「大会総集編」として計画されている。

『オリンピアード・モスクワ80』はモスクワ・オリンピック組織委員会から写真や記事の提供を受ける。同組織委が外国の出版社にこのような便宜をはかるのは前例のないことである。

日本光学のカメラが公式記録用に採用されたのをはじめ、美津濃のスポーツ・ウェアが聖火リレー走者用に提供されるなど、日本企業と同組織委との協力も活発化している中で、『オリンピアード・モスクワ80』の創刊は、関係各界の注目を集めている。

なお、編集・制作にあたっている新時代社はこの8月、カメラマンを現地取材に送り、競技が行われるモスクワ、レニングラード、タリン、キエフ、ミンスクでオリンピック施設の建設状況や各地の見どころ、市民のスポーツライフなどを日本人の目で取材。その成果は10月1日発売の第2号から順次発表される。

『オリンピアード・モスクワ80』はA4判、80ページ、定価八〇〇円。

詳細のお問合せは左記へ。

ベースボール・マガジン社（東京都千代田区錦町3—3　電話291・7901）

新時代社（東京都千代田区西神田2—7—12　電話263・2811）

催し物のご案内

チモフェーエワ・ピアノ独奏会日程

9月13日・東京　渋谷公会堂／17日・神奈川県民ホール／19日・広島郵便貯金ホール／20日・東京　日比谷公会堂／21日・鹿児島県文化ホール／22、23日・那覇勤労福祉会館／26日・新潟県民会館／29日・東京　厚生年金会館／30日・藤沢市民会館／10月2日・宮城県民会館／3日・福島文化センター／6日・川崎市立産業文化会館／11日・群馬県民会館／14日・福岡　電気ホール／17日・東京　中央会館／18日・大阪毎日ホール／19日・京都会館第1ホール／20日・愛知文化講堂／23日・北海道厚生年金会館／26日・千葉市民会館／28日・神奈川県立音楽堂。

曲目　ショパン・船唄嬰ヘ長調作品60、ショパン・ピアノ・ソナタ第2番変ロ短調作品35、ショパン・12のエチュード作品25、プロコフィエフ・ピアノ・ソナタ第3番、プロコフィエフ・ピアノ・ソナタ第9番ハ長調作品103、シューマン・ノベレッテ第8番作品21、シューマン・謝肉祭作品9などから。

詳細についてのお問合せは、東京都港区赤坂2—10—14　第2信和ビル内ジャパン・アーツ（電話03・585・7031）へどうぞ。

太平洋系サケ・マスの人工養殖

ゲンナジー・ピサレフスキー

しあわせにも太平洋系サケ・マスの運命は、事実上絶滅した他の多くの魚類ほど悲惨ではない。それも多分に、ソ連の専門家がサケ・マスの大がかりな人工養殖に成功したおかげである。

ことしの春、サハリン州の養魚場関係者はシロザケとカラフトマスの稚魚八〇〇〇万尾を太平洋に放流した。いま孵化養魚係は新シーズンにそなえて自然の産卵場の清掃、設備の修理、経験の交流に大わらわだ。

サハリンに最初の養魚場がつくられたのは、魚がいまよりもずっと多かった一九二八年だが、現在すでにサハリンの養魚場の数は18。近く稚魚の年間生産数は一〇億尾に達する見込みである。

サケ・マスは極東の河川の主要な富源である。これらの魚の牧場は海洋であり、ゆりかごは小さい川や支流である。

よい天候が続くサハリンの初秋の山々、9月の冷気にさらされて紅葉した木々、狭い谷あい、さらさら音を立てて流れる小川は、筆舌につくしがたい美しさだ。そのころどんな小さい川でも、産卵場へのぼるサケ・マスが見られる。肥えた魚は浅瀬をはい、水のないところはとび越えて、川の上流へ向かう。……そしてクマが川に姿を現し、銛（もり）のような鋭いツメで魚を叩き、魚を岸に投げとばす。クマは人に注意を払わず、人が空に向けて発砲すると、水ぎわから離れ、不平そうにうなり声をあげる。

産卵のため川をのぼる途中のサケ・マスを獲ることが許されているのは養魚場関係者だけ。彼らは最も大きな魚を獲り、よい卵と白子を選ぶ。受精卵は特別の箱（一箱に三〇万粒）に入れられて、工場へ送られる。ここで特別な盆の上に広げられ、流れる水に入れられる。

二一〇昼夜の孵化期間中は常温を保たねばならず、どんな寒いときも、川からの水の供給が片時もとだえないよう着氷を割らねばならない。そうしないと、卵は死んでしまう。それと同時に、さまざまな寄生生物を防ぎ、水中の酸素量を調べるなどの世話をしなければならない。

1月になると、鶏卵からヒヨコが出るように、ごく小さな魚が卵を破って出てくる。水面1平方m当たり二万五〇〇〇尾も孵化するこの魚は、それから4、5ヵ月後にやっと海に放流される。それまではいわば〝幼稚園〟にあたる特別の池に入れられ、スケソウダラの新鮮な卵がエサとして与えられる。池で育った稚魚は、体重も、大きさも野生のもの以上になり、こんごの海洋生活のどんな災厄にも十分耐え抜けるようになる。

5月に稚魚は海に放流され、自由の身になるが、放流されるのは普通どしゃぶりの雨があがった夜である。そんな夜は川の水がにごっていて、大ぐらいのほかの魚のエジキになる心配が少ないからだ。

ソ連では太平洋系サケ・マスの大半を自然の条件のなかで再生産している。だから関係者は川の上流の産卵場の改善に力を入れている。だがかなりのサケ・マスが極東のすべての地域（とくにサハリン州）で人工養殖されている。

サハリンの魚類学者は、これまでシロザケなどのサケ・マスが産卵しなかった川でも、サケ・マスの養殖にふみ切った。これらの種類の魚は、この世に生まれ出た川に必ず産卵に戻ってくるという興味ぶかい生物学的特徴をもっているので、魚類学者はこの魚のいない川でシロザケの稚魚の人工養殖を始め、ついにシロザケをその川に産卵に帰らせることに成功した。これによってサケ・マスの人工産卵場を著しく拡大できるようになった。

同じく太平洋系のサケ・マスの一種であるマスノスケの人工養殖実験も始まっている。

世界でただ一つ

モスクワの動物腫瘍病院

アンナ・アンドロノワ
カメラ　A・ボプコフ



愛犬の入院を前にしばしの別れを悲しむ。

ジクという名の犬は6歳のときに、左目の下に腫瘍ができた。まもなく飼い主は犬が食欲をなくしているのに気がつき、獣医科病院へ連れて行った。獣医はジクを診察した。腫瘍が鼻骨、眼窩（か）、歯茎をおかし、奥歯にも広がっていることがわかった。ジクは専門の治療を必要としたので、動物腫瘍病院へ移された。

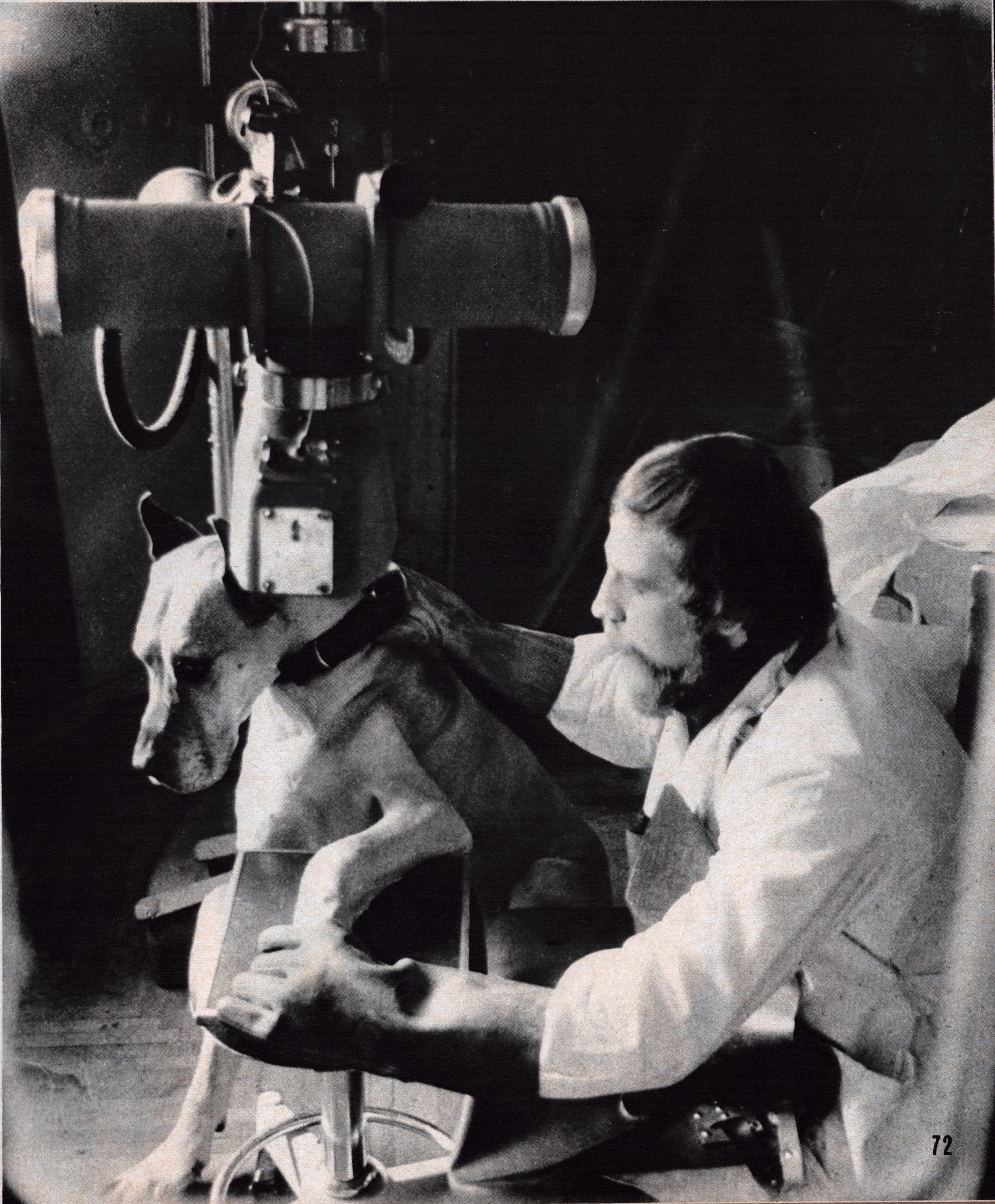
世界でただ一つの動物腫瘍病院は、13年前にニコライ・ブロヒン・アカデミー会員のイニシアチブにより、彼が指導するモスクワのガン・センターに付属して設立された。ここへは家畜、主として自然性の腫瘍を持つ犬やネコが診察、治療に連れて来られる。動物腫瘍病院では化学療法やX線療法が行われ、術後の傷口の治療にレーザーが利用されている。

この病院の設立は、言うまでもなくもう一つの目的――動物の腫瘍に効く薬や治療方法が人間にも適用できないかを調べるという目的を持っていた。問題は、自然に発病した動物にたいしてだけこのような実験を行うことができることにある。接種された腫瘍は自然性の腫瘍とはまったく異なった増殖をするからだ。

ジクからとった組織を検査して、上顎（がく）の小細胞ガンの診断がくだされた。人間と犬の多くの腫瘍は、細胞構造では同じだ。このような類似は、犬の腫瘍も人間の腫瘍も、同じ手段や方法で対処できるという可能性を示している。動物腫瘍病院では、薬剤はまず実験用の小動物――ネズミ、イエウサギ、ハツカネズミを使ってのすべての実験段階を通る。そのあと、薬剤は犬に用いられる。

医師はジクに化学療法のコースを指定した。ジクは4カ月後に健康になった。腫瘍は跡形もなく消えた。変化を受けた鼻骨、眼窩、歯茎、奥歯でさえ回復した。

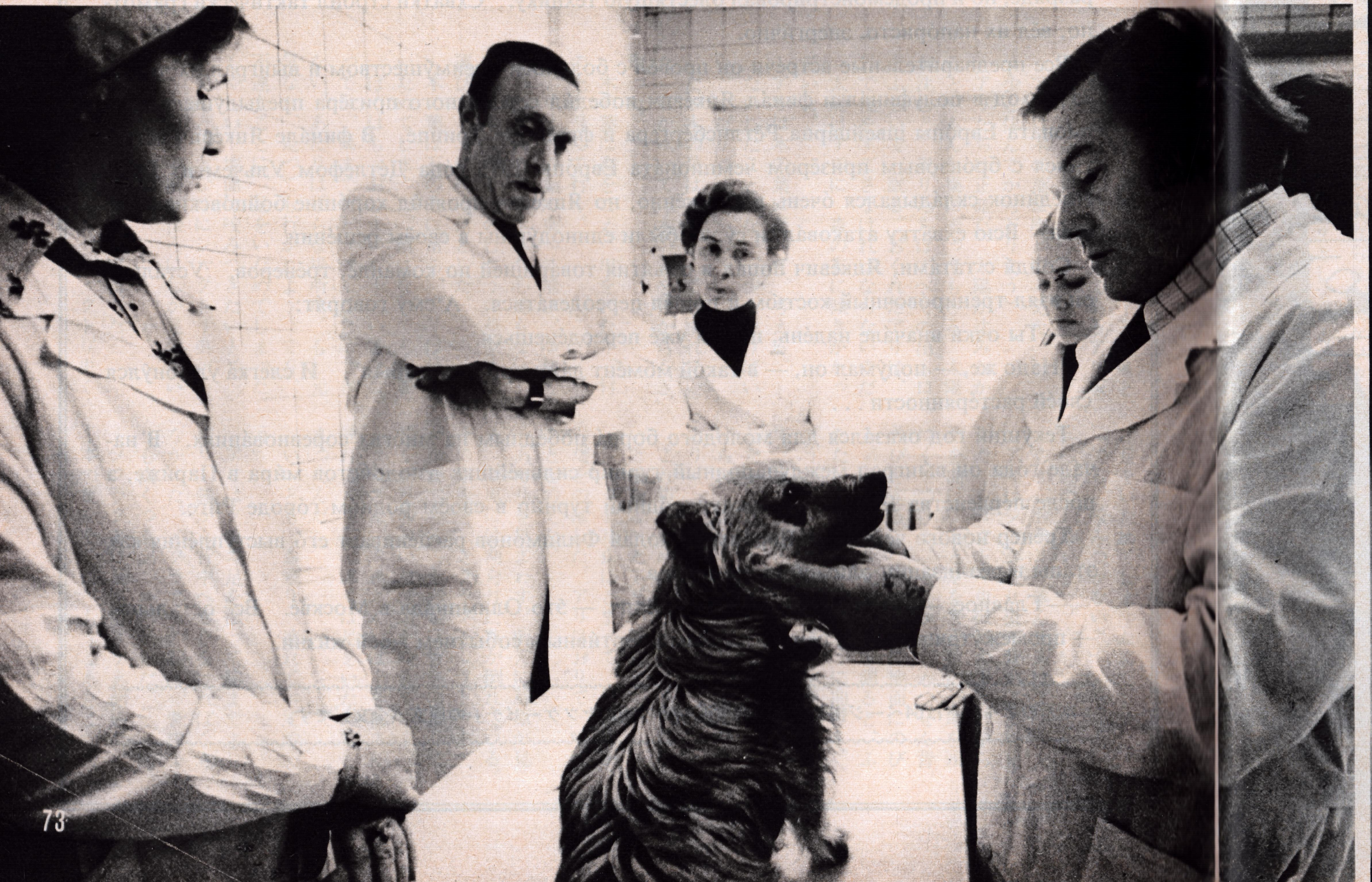
一〇〇〇匹以上の動物が動物腫瘍病院での治療コースを無料で受けた。そのほか、ここでは毎年二〇〇―三〇〇件の診察も行われている。ついでながら、ここで救われた多くの動物の飼い主は、ペットの術後の傷口の美容整形も忘れない。



〝患者〟のX線写真をとる獣医セルゲイ・ゾントフ



腫瘍が跡形もなく消え去り、元気になったジク。



医師の診断合議。正しい診断が下され、病犬の治療方法が討議される。

АЛЕКСАНДР ЯЦКЕВИЧ: “ГЛАВНОЕ — ЭТО ОЛИМПИАДА В МОСКВЕ”

Евгений **ГОРБУНОВ**

По́сле олимпи́йских побе́д ветера́нов Чочошви́ли и Но́викова сове́тские дзюдои́сты заста́вили относи́ться к себе́ с уваже́нием на турни́рах са́мого высо́кого ра́нга. Сейча́с, в преддве́рии Олимпиа́ды в Москве́, заме́тно прогресси́руют и представи́тели “но́вой волны́” сове́тского дзю́до.

В ма́е э́того го́да прия́тная весть пришла́ из Хе́льсинки с чемпиона́та Евро́пы: молодо́й рижа́нин Алекса́ндр Яцке́вич, впервы́е выступа́я в столь отве́тственных соревнова́ниях, завоева́л золоту́ю меда́ль в сре́днем ве́се (до 86 кг).

Алекса́ндру Яцке́вичу 20 лет. Он студе́нт 2-го ку́рса Латви́йского госуда́рственного институ́та физи́ческой культу́ры. В се́кцию дзю́до при о́бществе “Дина́мо” Яцке́вич пришёл 12-ле́тним ма́льчиком, а че́рез три го́да получи́л серебряную меда́ль чемпиона́та СССР среди́ ю́ношей.

Интере́сно, что счёт побе́дам в кру́пных междунаро́дных соревнова́ниях Яцке́вич начина́л и́менно в Финля́ндии. В 1975 году́ на чемпиона́те Евро́пы среди́ ю́ношей в Ту́рку он стал облада́телем золото́й меда́ли. Зате́м ранг турни́ров возро́с, но с ни́ми возросло́ и мастерство́ борца́. На чемпиона́тах Евро́пы и ми́ра среди́ юнио́ров, кото́рые состоя́лись в 1976 году́, он уве́ренно завоёвывал пе́рвые места́.

. . . И вот сно́ва Финля́ндия. Но на э́тот раз здесь собрали́сь уже́ зре́лые борцы́ с гро́мкими ти́тулами, бога́тым о́пытом. Одна́ко Яцке́вич не то́лько не дро́гнул во взро́слом разря́де, но и продемонстри́ровал блестя́щую те́хнику. Схва́тки стро́ил такти́чески гра́мотно, вёл их напо́ристо, энерги́чно.

Все предвари́тельные встре́чи он провёл с больши́м преиму́ществом и вы́играл их чи́сто. За вы́ход в полуфина́л и фина́л Яцке́вич победи́л сере́бряного призёра предыду́щего чемпиона́та Евро́пы швейца́рца Рётлисбе́ргера и францу́за Триппе́. В фина́ле Яцке́вич встре́тился с бро́нзовым призёром чемпиона́та Евро́пы 1976 го́да Де́тлефом Ульчем из ГДР. Поеди́нок скла́дывался о́чень напряжённо, но Яцке́вич прояви́л хоро́шие бойцо́вские ка́чества. Всю схва́тку атакова́л, и су́дьи бы́ли единоду́шны в своём реше́нии.

Сойдя́ с тата́ми, Яцке́вич попа́л в объя́тия това́рищей по кома́нде, тре́неров. Уста́лый, он взял трениро́вочный костю́м и пошёл переодева́ться. А ему́ говоря́т:

— Ты очки́ внача́ле наде́нь, пото́м уже́ переоде́нешься.

“На́до же, — поду́мал он, — в тако́й моме́нт да́же про очки́ забы́л”. И слегка́ улыбну́лся свое́й расте́рянности . . .

Теку́щий год оказа́лся для молодо́го борца́ побе́дным на мно́гих соревнова́ниях. В нача́ле го́да он вы́играл междунаро́дный турни́р сильне́йших дзюдои́стов ми́ра в Пари́же, а по́сле пе́рвенства Евро́пы — междунаро́дный турни́р в своём родно́м го́роде Ри́ге.

Тре́нер но́вого чемпио́на Евро́пы Никола́й Филимо́нов расце́нивает его́ выступле́ния как эта́пы в реализа́ции олимпи́йских пла́нов.

— Гла́вное, — соглаша́ется с ним Яцке́вич, — э́то Олимпиа́да в Москве́. Всё остально́е — промежу́точные це́ли пе́ред гла́вным спорти́вным собы́тием мое́й жи́зни.

本号のテキストは64ページ掲載の「ソ連柔道期待の新人ヤツケービチ」の原文（全文）です。

アリの冒険

ビタリー・ビアンキ



アリがシラカバの木に登り始めた。てっぺんまで登りついて、下を見ると、下の地面には、自分の巣であるアリ塚が、かすかに見えた。

アリは木の葉に座って考えた。

〈少し休んでから下りよう〉

アリたちは正確だ。太陽が沈みかかると、みんな巣に走ってもどる。太陽が沈むと、アリたちはすべての出入口をふさいで、眠る。おくれたアリは、外で夜をすごさなければならないのだ。

太陽はすでに、森の方に傾きかかっていた。

アリは木の葉に座って、考える。

〈たいしたことはない、少し急げばいい。くだりは速いから〉

だが木の葉は、黄色くて、枯れていた。風が吹いて、木の葉を枝からもぎ取った。

木の葉は森をこえ、川をわたり、村の上を飛んで行く。

アリは木の葉に乗って飛び、ゆれて、恐ろしさのあまり生きた心地もない。

風は木の葉を村のむこうの草原まで運び、そこに投げ落とした。

木の葉は石の上に落ち、アリは足をいためてしまった。横になって考える。

〈ぼくはもうおしまいだ！　いまとなっては、巣までたどりつくことはできない。あたりは平らな場所だ。もし元気なら、走っても行かれよう。でも、不運なことに、足をいためてしまった。くやしい、地面に咬みつきたい！〉

見ると、となりにシャクトリ虫がいる。からだの前と後ろにしか足のないイモ虫だ。

アリはシャクトリ虫に言った。

「シャクトリ虫くん。シャクトリ虫くん、ぼくを巣まで連れてって！　ぼくは足をいためてしまったんだ」

「でも、咬みつかない？」

「咬みつかないよ」

「じゃ、お乗り、運んであげよう」

アリはシャクトリ虫の背中によじ登った。シャクトリ虫は弓のようにからだを曲げ、あと足をまえ足に、尾を頭にくっつける。それから、とつぜん背のびをすると、棒のように地面にのびる。そして、背丈で地面を測ると、ふたたび、からだを弓のように曲げる。こうして、歩き出しては、地面を測って、また歩き出す。アリは地面に転落したかと思うと、こんどは空に放り上げられ、頭を下に向けたり、上に向けたり。

「これ以上だめだ、とまって！　でないと咬むよ」とアリが叫んだ。

シャクトリ虫はとまって、地面にからだをのばした。アリはおりて、呼吸をととのえた。

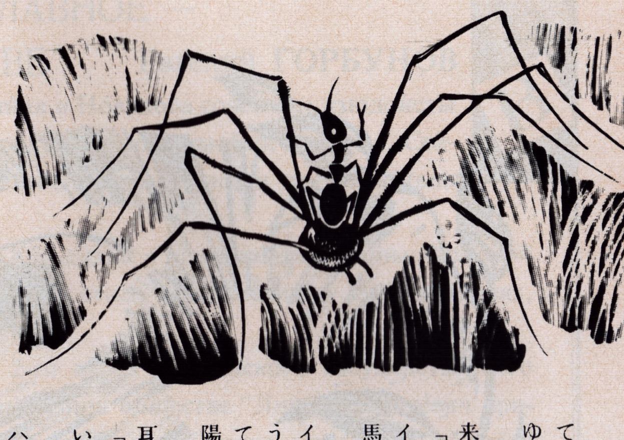
あたりを見まわす。前方に草原が見え、草原には刈られた草が倒れている。その草原を、メクラグモ（ザトウ虫）が歩いている。その足は竹馬のように長く、足のあいだで頭がゆれている。

「クモさん、クモさん、ぼくを巣まで連れてって！　ぼくは足をいためてしまったんだ」

「いいとも、お乗り、連れてってやろう」

アリはクモの足を伝って膝までよじ登り、膝から背中へおりなければならなかった。メクラグモの膝は、背中よりも高くつき出ていたからだ。

メクラグモは足を置きかえ始めた。1本の足をそこに、もう1本をここに



と、全部で8本の足が編み棒のように動き、アリは目がまわった。メクラグモの歩き方は速くはなく、腹が地面をこすっている。アリは、そんな歩き方にうんざりして、もう少しでメクラグモに咬みつくところだった。そのときさいわい、平らな道に出た。メクラグモは立ちどまった。

「おりなさい、タマ虫が来る。あの方が私より速いよ」とメクラグモが言う。

アリは背中からおりた。

「タマ虫さん、タマ虫さん、ぼくを巣まで連れてって! ぼくは足をいためてしまったんだ」

「お乗り、運んであげよう」

アリがタマ虫の背中に乗るか乗らないうちに、タマ虫は走り出した! その足は馬のようにそろっている。6本足の馬よろしく、タマ虫は走る。走っても、空中を飛んでいるかのように、ゆれない。

あっという間に、ジャガイモ畑まで来た。

「さあ、おりて。私の足では、ジャガイモ畑のうねは越えられない。ほかの馬に乗るんだね」とタマ虫が言う。

アリはおりなければならなかった。ジャガイモの株は、アリにとっては、うっそうとした森と同じだ。丈夫な足で駆けても、まる1日かかる。おまけに、太陽はもう低い。

とつぜんアリは、だれかが呼ぶのを耳にした。

「さあ、アリさん、私の背中にお乗り。いっしょに行こう」

アリがふりむくと、かたわらにノミハ虫がいる。地面にいても、やっと見えるほどだ。

「きみは小さいんだね! ぼくを乗せられないだろう」

「あんたは大きいというのかい? いいからお乗り」

アリはどうにかノミハ虫の背中に陣どった。やっとのことで足を置いているという具合だった。

「乗った?」

「何とかね」

「乗ったら、つかまって」

ノミハ虫は、バネのような太いあと足を引きつけると、ぴょん! とそれを蹴った。つぎの瞬間には、ノミハ虫はうねの上にいた。ぴょん! ぴょん! こうして、うねからうねへと跳ぶ。

アリがたずねた。

「囲いは越えられる?」

「囲いはだめだ。高すぎる。あんたはコオロギにたのみなさい。コオロギなら越えられる」

「コオロギさん、コオロギさん、ぼくを巣まで連れてって! ぼくは足をいためてしまったんだ」

「うなじにお乗り」

アリはコオロギのうなじに乗った。

コオロギは長いあと足をそろえ、それから一気にそれをのばして、ノミハ虫のように、空中高く跳ねた。だがそのとき、コオロギの背中のうしろで、ばさっと羽が開き、コオロギは囲いを飛び越えて、静かに地面におりた。

「ストップだ! 着いたよ」とコオロギが言う。

アリは前方を見た。前方には川があった。1年かかって泳いでも、渡り切れない。

太陽はいっそう低くなった。

コオロギが言う。

「私には川は跳び越えられない。何しろ、こんなに広いから。待って、アメンボに声をかけてやろう。きみを運んでくれるだろう」

コオロギが何かしゃべり出した。見ると水の上を、足のあるボートが走っている。

こっちへ走って来た。

いや、それはボートではなく、アメンボだった。

「アメンボくん、アメンボくん、ぼくを巣まで連れてって! ぼくは足をいためてしまったんだ」

「いいだろう、お乗り、運んでやろう」

アリは乗った。アメンボは跳ねると、陸の上を走るように、水の上を走り出した。

太陽は、もう少しで沈みそう。

「アメンボくん、もっと急いで! ぼくは巣に入れてもらえなくなってしまう」とアリがたのんだ。

「できるかぎり急ごう」とアメンボが言う。

さあ、一目散! 足をせっせと動かして、氷の上を滑るように、水の上を滑って行く。たちまち反対側の岸に着いた。

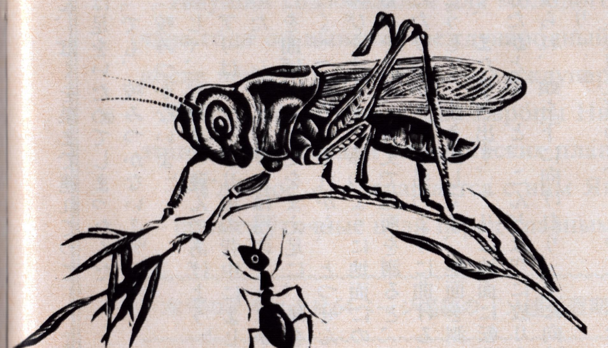
「地面の上は走れないの?」とアリがきく。

「地面の上は苦手なんだ。足が滑らないからね。それに、前方には森がある。ほかの乗りものを探すんだね」

アリは前方を見た。川の上に、天にも届きそうな森がそびえている。太陽はすでに、その後ろに隠れてしまった。

いや、アリは巣に帰れない!

「ごらん」とアメンボが言った。「ほら、きみの乗りものが歩いている」



アリが見ると、コガネ虫が這っている。ふとった、ずんぐりした甲虫だ。これで走れるのだろうか?

とにかく、アメンボの言うとおりにした。

「コガネ虫さん、コガネ虫さん、ぼくを巣まで連れてって! ぼくは足をいためてしまったんだ」

「で、きみの巣はどこだい?」

「森のむこうのアリ塚だよ」

「遠いんだなあ……きみにはむりだ。お乗り、連れてってやろう」

アリは固い甲らのわき腹をよじ登った。

「座ったかい?」

「座ったよ」

「で、どこへ座ったんだい?」

「背中に」

「ええい、ばかだなあ! 頭の上に座りなおせよ」

アリはコガネ虫の頭の上に移った。コガネ虫は背中に座っていなくてよかった。背中をまん中から開くと、固い2枚の羽を立てた。それはまるで、裏返した2つの桶のようだった。その下に、上の羽よりももっと薄くて透き通った、広くて長い別の羽が隠れていて、それが広がってきた。

コガネ虫はいきんで、羽をふり始めた——ブルン、ブルン、ブルン。まるでエンジンの始動だ。

「コガネ虫さん、急いで! お願い!」とアリはたのんだ。

コガネ虫はそれに答えず、もっぱらいきんでいる——ブルン、ブルン。

とつぜん薄い羽がふるえて、はばたき出した——ジ、ジ、ジ! トゥク、トゥク、トゥク!

コガネ虫は空中に舞い上がった。コルク栓のように、風で森の上まで吹き上げられた。

アリは上から見おろした。太陽はすでに、地平線にさわっていた。

コガネ虫が走り出すと、アリは息が詰まりそうだった。

ジ、ジ、ジ! トゥク、トゥク、トゥク!

コガネ虫は飛びながら、弾丸のように空気を突っ切って行く。

眼下に森がちらつき、そして消えた。

そこには、例のシラカバの木があり、アリ塚はその下にあった。

シラカバのてっぺんで、コガネ虫はぶるん! とエンジンを切り、枝にとまった。

「コガネ虫のおじさん! ぼくはどうやって下へおりればいいの? ぼくは足をいためているんだ、首を折ってしまうよ」とアリが懇願し始めた。

コガネ虫は薄い羽を背中に重ねた。その上から、固い羽がフタのように閉じた。薄い羽のはじっこが、固い羽の下にきれいに収まった。少し考えて、コガネ虫が言った。

「きみがどうおりればいいか、私には分からない。私はアリ塚へは飛んで行かんぞ、アリたちが咬むから、痛くてかなわん。自分で考えるんだね」

アリが見おろすと、ちょうどシラカバの真下に、自分の巣がある。太陽はと見れば、すでに半分まで地平線に沈んでいる。

どこを見まわしても、枝と葉ばかり。頭から跳びおりる以外、巣へ帰ることはできない!

ふと見ると、となりの葉に、ハマキガの幼虫がいる。絹のような糸を出して、枝に巻きつけている。

「ハマキガくん、ハマキガくん、ぼくを巣までおろして。もうわずかしか時間がない。巣に入れてもらえなくなってしまう」

「おくれればいいさ! 見てのとおり、ぼくは忙しいんだ。糸をつむがなくちゃならないんでね」

「みんなぼくに同情してくれたのに、じゃけんにしたのは、きみが初めてだよ!」

アリはがまんできずに、幼虫にとびかかり、咬みついた!

幼虫はびっくりして、足をまるめ込むと、でんぐり返った! そして、下へ跳びおりた。アリは幼虫にぶらさがって、しっかりしがみついていた。

落ちたのはわずかなあいだだった。何かが上から引っぱったからだ!

アリと幼虫は、絹の糸にぶらさがって、ゆれ出した。糸は枝に巻きついていた。アリはハマキガの幼虫につかまって、ブランコに乗ったようにゆれていた。糸はしだいに長くなった。糸はハマキガの幼虫の腹からくり出して、切れずに、のびた。

アリと幼虫はますます下へとおりた。下のアリ塚では、アリたちが大忙しで走りまわっている。出入口を閉めているのだ。

すべての出入口が閉ざされ、最後の一カ所だけが開いていた。

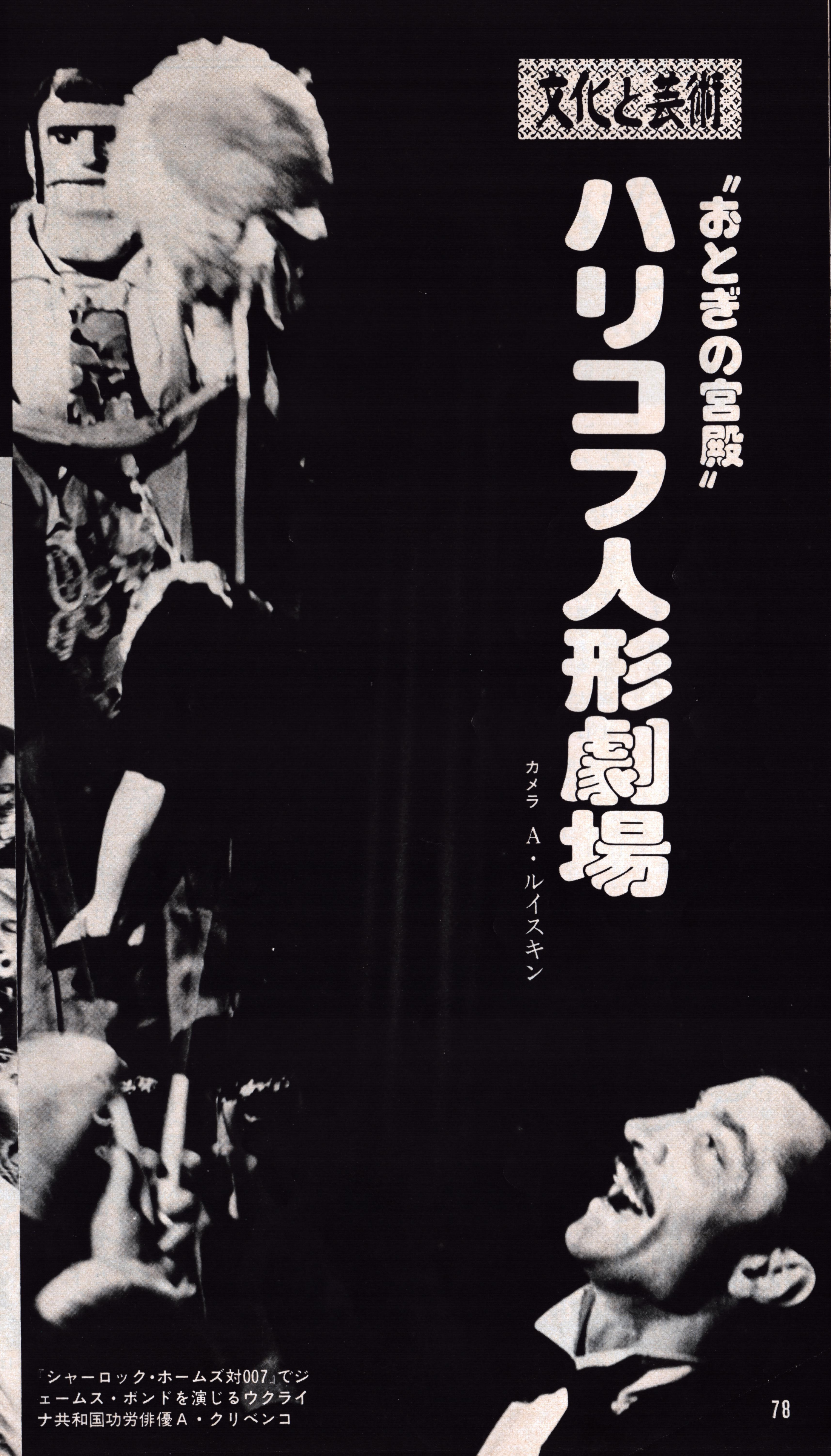
アリは幼虫から手をはなすと、ごろんと一回転して、巣にころげ込んだ!

そのとき、太陽が沈んだ。



〝おとぎの宮殿〟ハリコフ人形劇場

カメラ A・ルイスキン



『シャーロック・ホームズ対007』でジェームス・ボンドを演じるウクライナ共和国功労俳優A・クリペンコ



ナジェジダ・クループスカヤ記念ハリコフ人形劇場の入口

〝おとぎの宮殿〟――ウクライナ共和国の大工業中心地であるハリコフの市民たちは、自分たちの人形劇場――ナジェジダ・クループスカヤ記念ハリコフ人形劇場をこう呼んでいる。人形劇場の一風変わった建物は、一九〇七年に建てられたもので、あらゆる年代層の観客に親しまれている。劇場のロビーには常設の児童絵画展、屋内庭園、リスやオウムやモルモットの檻、魚の入った水槽などのあるコーナーが設けられている。三つのホールが博物館になっていて、ソ連各民族や他の社会主義諸国の人形劇場の約一万点の人形が展示され、ベルギー、ポルトガル、米国、フランス、スウェーデン、日本の人形の写真や絵やパンフレットなども展示されている。

劇場の出し物は、子供も大人も楽しめるものだ。今上演されているのは現代ソビエト劇作家のイシドル・シトクの『悪魔の粉ひき小屋』、ウクライナの作曲家グラク＝アルテモフスキーのオペラ『ドナウのザポロジェツ（ザポロジエ・コサック）』、イタリアの劇作家カ



人形といっしょに勢ぞろいした俳優たち

ルロ・ゴッツィの民話『シカの王様』、フィンランドの作家マルッチ・ラルニのコメディー『4番目の椎骨』、有名なソ連の児童文学者アルカジー・ガイダールの中編『戦争の秘密』など。つい最近では、ユーモア推理ミュージカル『シャーロック・ホームズ対007』が上演された。

一九七六年にモスクワで開かれた国際人形劇連盟の第12回大会と、一九七七年にストックホルムで開かれた第3回国際人形劇フェスティバルで、ハリコフ人形劇場は自慢のレパートリーの一つ『ウクライナのベルチェプ』を披露した。ベルチェプとは、民族的な人形劇の古い呼び名で、昔は広場や定期市で上演されていた。それがロシアで知られるようになったのは16世紀末から。ハリコフ人形劇場がモスクワとストックホルムで披露したのは、昔のテキストをそのまま再現したもの。人形や舞台装置は、ウクライナの民族的な人形劇の香りと色彩を正確に伝えている。

ハリコフ人形劇場は、このまちでも最も人気のある劇場の一つ。この劇場を25年以上も指導しているのはウクライナ共和国人民芸術家V・アファナシエフ。持ち前の情熱と創造的エネルギーで、劇場に名声をもたらした。連日の大入り満員は、俳優や演出家や美術担当者たちの水準の高さを見事に証明している。もちろん、大人80コペイカ、子供30コペイカという入場料の安さも、人気の秘密の一つだ。


『ベルチェプ』の一場面


コメディー『ペトルーシカ』より


『ベルチェプ』の最初の場面


子供たちは人形劇のほかに人形博物館も見学できる。

今日のソ連邦
一九七八年9月15日号
編集・発行
ソ連大使館広報部（東京都品川区東五反田3—9—13、郵便番号141、電話03・447・3536）
印刷
大日本印刷株式会社



中央アジア・タジク共和国の
首都ドゥシャンベの娘たち